IZANAGI

佐久謙一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＺＡＮＡＧＩ

【Ｎコード】
Ｎ７８７９Ｐ

【作者名】
佐久謙一

【あらすじ】
その世界において罪を犯して死んだものは神となる。
そして償いとしての使命をこなさなければ永遠に死ぬことを許されない。
この救いようのない世界で神となった男が一人。
灰色の空の下、男は笑う。

序章　酒場の男？

――この無駄に広がる灰色の空を見ていると気分が悪くなる。

私はぶつぶつと悪態をつきながら、明かりの乏しい夜道を歩いていた。容赦なく吹き付ける風のせいで顔がひりひりする。

そうして寒さに震えながら、道を歩いていると、視界の片隅に小さいバーを捉えた。

随分と古い感じのするバーだった。そのまま西部劇に出てきても違和感のない、そんな感じだった。ただし扉は至って普通のドアだった。そこだけが何故か残念に思えた。

とりあえず体を温めようと思い、私はそのバーに入っていった。

私は入口に一番近い席に腰を下ろし、無言でグラスを磨いている老バーテンダーに、強い酒を頼む、と言った。バーテンダーが無言で見返してきたので、私はコートの中から財布を取り出し、有り金全部――と言っても、硬貨が五枚――をカウンターに転がした。バーテンダーはそれを確認すると、グラスを置き、うしろの棚から酒ビンを取り出し、グラスに注ぎ始めた。

私はその態度に、ちっ、と舌打ちをし、カウンターに背を向け、軽く店内を見渡す。

テーブルに男二人、カウンターの隅の席に男一人。皆同じように顔を伏せ、眠りこけていた。

今から私もあいつらの仲間入りをしようか、と頭に四人の男が眠りこけている図を想像する。悪くない。

軽く薄笑いを浮かべ、体を戻す。すでに透明な液体がグラスに注がれていた。

グラスを手に取り、一気に仰ぐ。体の奥底が熱くなってきた。

思わず小さい声が口から漏れる。手に力が入り、グラスを強く握り締める。
バーテンダーはこちらを見向きもせず、グラスを黙々と洗い続けている。
ふぅ、と息を吐く。
ボーっと顔が熱くなり、口元が自然に笑みの形を描く。
先程の嫌なことなど、酔いで消えていく。そんな時だった。

「あんた随分ご機嫌だなぁ……」

体をブルッと震わせる。
口から唸り声のような声が漏れる。突然の声で、ほろ酔い気分が冷めてしまった。
「おいおい、たった一杯でもう酔っちまったのか？」
ククッと嘲笑が聞こえる。

序章　酒場の男？

私は顔を真っ赤にし、体を震わせた。今度は怒りからだ。私はその場に勢いよく立ち上がった。

「おいおい怒るなよ。ちょっと、からかっただけじゃねえか」

笑い声交じりの声が聞こえてくる。

私は声の方向を探そうと辺りを見渡した。すぐに見つかった。カウンターの隅で酔いつぶれていた男が顔を上げ、こちらを見ている。

その男は、かなりやつれた顔をしていた。髪は長く、前髪が目元を覆っている。この地方では珍しい黒髪だ。服は簡単なシャツとズボン。どちらも黒だ。そして腹部がひどく汚れていた。

「あ、あぁ、あんたの言いたいことは分かるぞ。俺が誰かってことだろ？」

口を開いてもいないのに、そいつは自分から勝手に話し始めた。

「はは、実はな、面白い夢を見たんだ。随分昔のことなんだが、妙に生々しくてなぁ。ん？　俺が誰か？　まぁ、まず聞けってさ。そうすれば全部分かるって」

男はべらべらと喋りながらこちらに近付いてくる。私の肩を叩き、まぁ座れ、と耳元で呟く。私は何か言おうと思ったが、何も思い浮かばず、そのまま促されるままに椅子に座った。

「神様だよ神様。万人がひれ伏すあの神様だよ」

男も横に座り、訳の分からないことを言いだした。

「くそったれ。あぁ、神様は糞って言葉がお似合いだな。あはははは！」

男は天井を仰ぎ、高らかに大笑いし始めた。

ぐ、と、私は喉の奥で唸り声を発した。変な奴に絡まれてしまった、という思いからだ。

「あぁ、待て待て。俺は多分普通だからさ」

私が帰ろうとしているのを悟ったのか、男は私の肩に馴れ馴れし

く手を置き、顔を近付けてきた。
私は怪訝な顔でその顔を見返す。その反応に気を良くしたのか、男はにいっと不気味な笑みで返してくる。そして右手を顔の前まで持ってきて、指を一本立てた。
「一杯だ。一杯でいい」
さらに顔を近づけてくる。その分だけ私は顔を遠ざける。
「もし一杯奢ってくれたら、最高にくそったれで最高に吐き気のする、最高に面白い話を聞かせてやろう。どうだ？　たった一杯でいいんだぜ？」
ククッとそいつは体を震わせながら笑った。
男の怪しい態度に、眉をひそませていると、そいつはさらに笑みを大きくした。
「なぁ、いいじゃねぇか。たった一杯でいいんだぜ？　それで話を聞いてくれたら、もうあんたには付きまとわねえよ。保障する。安いもんだろ？」
その馴れ馴れしさに私はさらに眉をひそめる。それでも男は絡んでくるので、今は金に余裕が無い、だから向こうに行ってくれ、と言った。すると男はこちらの顔を、観察するかのように視線を動かし、笑みをますます強めた。

序章　酒場の男？

「……お前、まさかオウングロウのカジノに行ってきたんじゃあねぇだろうな？」

私は黙ったまま男を睨みつけた。その反応に男は肩を震わせて笑う。

「やっぱりな。あんたとんでもないアホだろ？」

男はそのまま声を出して笑いだした。今この場で殴り飛ばしたい気分になる。

「あそこのカジノはとんでもねぇ連中が仕切ってんだぜ。あんた最初は絶好調。で、途中から一気にツキが逃げて、大負け。文句言ったら放り出された。そんなところだろう？」

その言葉に、ぐっと言葉が詰まる。まさに男の言葉通り、先程カジノで大負けしてきたばかりなのだ。

「リベンジとかはやめときな。マフィアなんてレベルじゃねぇ連中ばかりだ。まぁ、一番いいのは適度なところで止めて目立たないことだ。あ？　何で知っているのかって？　それはな――」

――俺があの町出身だからだよ。

男はこちらをまっすぐに見据え、そう言った。

「あの町は最低の無法地帯。観光名所とか言われているのは上辺だけさ。奥に行けば行くほど、治安は悪くなる。一番奥なんかは人の死体が普通に転がっているらしいぜ？」

私は黙って男の話を聞く。

「――そんで、裏じゃあ、国家に見放された町、とか言われているのさ。さて……この続きが気になるかい？」

男はククッと笑った。いつの間にか男の話に夢中に聞き入ってしまっていた。

私は苦々しい顔で唸ったあと、バーテンダーに一杯注文した。

男の前にグラスが置かれ、透明な液体が注がれる。

「いや、ありがとよ」
男は上機嫌に酒を仰ぎ、一気に飲み干した。
私は男に、話の続きを催促する。そいつは上機嫌にげらげらと笑いながらこう言った。
「なぁ、一つ質問してもいいかい？」
私は黙って頷いた。男は大きく息を吐き、ゆっくりとした口調で尋ねた。
「あんたはさぁ、神様を信じるかい？」
私は自分の酒を飲み干し、しばらく男の横顔を見つめていた。その、何かにとても疲れたような目を見る。そして小さい声で、信じない、とだけ答えた。
「まぁ、そうだろうな」
男は空のグラスを惜しみ気に見ながら、そう言った。
「神が言うには人類は皆平等なんだろ？　だがよ、平等だったら、何で屑連中は大金を持ち、いい思いをしているのに、あんたはこんなところでやけ酒飲んでるんだろうね？　どこが平等なんだろうなぁ」

序章　酒場の男？

男はグラスに残った氷を口に放り込み、噛み砕きながら言葉を続ける。

「まぁ、誰でも分かることは、この世に偉大な神様なんぞ、いやしねえってことだ。いるのは適当に綺麗事を口先だけで並べている書物の中の平和主義者だけってな」

男は大きな声で笑い出す。それに釣られて、私も笑っていた。

「だがな……」

突然男は語尾を下げる。

「俺は見ちまった。そして知ってしまったんだよ」

男は顔を右手で覆い、ククッと笑う。しかし先程のとは違い、それには嗚咽が混じっていた。

「ククッ、あぁ、最低だ。最悪だ。もう救えない。もう救われない。俺は、俺は――」

そして――そいつは泣き出した。

そんな男の様子に私は大きなため息を吐いた。せっかく気分が乗ってきたのに台無しだと思ったからだ。私は男に、もう帰っていいか？　と尋ねた。

私の言葉が聞こえているのか、いないのか、男はなんの反応も返さず、泣き続けている。

私は再びため息を吐く。無駄な金を使ってしまった、と思い、椅子から立ち上がろうとする。

その時、男の手で肩を押さえ付けられた。

「なぁ、あんた」

男はこちらに顔を向け、にいっと不気味な笑みを浮かべる。目からは、いまだに涙がこぼれていた。

私は無言のまま男の顔を見返す。男は力無く首を傾け、ゆっくりと口を開いた。

「あんたさ、一回死んでみたことはあるかい？」
私は眉をひそめた。
何を言っているんだ、こいつは。
「まぁ、普通に考えりゃ、人間は死んだら終わりだよな。終わるんだよな」
男の口が動く。
「だがな、違うんだよ。そうじゃねぇんだよ。人間は確かに終わる。だが終わらねぇんだよ」
突拍子のない言葉。だが私はその言葉に何故か興味をそそられてしまった。
私は再び腰を下ろし、男を見た。ククッとそいつは笑った。
「聞かせてやるよ。最初に約束したからな。だがな、この話を知ったせいであんたがどうなるかは保障しない。俺は知っている。どうなるかは知っている。だが保障はしない。中途半端になっちまうからなぁ」
その喋り方に、私は言葉に表せないほどの好奇心に捕らわれてしまった。この男の話を聞きたいと、本能が望んでいるようだった。
「さて前座が長すぎたな。それじゃあ話そうか。だがな、これを信じて狂乱するのも、あんたの自由。信じずに馬鹿話として受け取るのも、あんたの自由。だが結末は同じさ。最高の結末さ。最初は分からないだろうが、すぐに分かる。俺の言った、終われないという意味が。だが、これも何かの縁だろうよ。ん？　何がって？　まぁ、気にするな。たいしたことじゃあない。あんたの奢ってくれた酒は最高に美味かったってこと。そう、ただそれだけのことさ。それじゃあ話そうか。とある人間の話なんだが、ちょっと違う。これはな、神様の話なんだよ。そう、偉大な神様。ククッ、面白そうだろ……？」

一章　造神？

ゆっくりと眼を開ける。
天井でぐるぐるとファンが一生懸命回っている様子を見て、自分も頑張らないとな、となんとなく思う。
今何時だろうか、と一瞬思うが、すぐに時計を探すのを止めた。
布団の中の温かさが心地よく、眠気が襲ってくる。
そのまま体の欲求に従い、眼を閉じた。

ゆっくりと眼を開ける。
天井でぐるぐるとファンが一生懸命回っている様子を見て、何であんなに無駄に頑張っているんだろう、となんとなく思う。
「さて……」
さすがに眠気は吹き飛んだ。
彼はあくびをしながら、半身を起こす。背筋を伸ばし、もう一度大あくび。頭をぼりぼりとかく。
視線が下に向き、それなりに鍛えた腹筋と生涯の相棒を視線に捕らえる。そこで、自分が裸で寝ていることに気が付いた。
――寝るとき、いつも裸で寝ていたっけ？
首をかしげながら、部屋を見渡す。古いテレビや、冷蔵庫。床に散らばった雑誌。そうして部屋にあるものを目で辿っていき、それが自分の隣まで来たとき――彼は凍り付いた。
シーツからはみ出した白く尖った肩。その肩に掛かる亜麻色の髪。そして目鼻立ちがキリッとした顔。
そこには――女がいた。しかも自分と同じく裸で寝ている。
「……」
彼は隣の女を確認し、一気に眉をひそめる。
――誰だ、こいつは。
女の顔をまじまじと見るが、見覚えはない。

彼は、おい、と声をかけながら、女の肩を揺さぶった。すると女は薄く目を開き、もぞもぞとした口調で話す。
「……何？　ていうか、このアパート暖房無いの？　寒いんだけど」
女はあくび交じりに文句を言いながら、そのままシーツに顔をうずめる。
そのまま眠りそうだったので、さらに肩を揺さぶる。
「……何よ？」
眠りを妨げられたことに腹を立てたのか、女は目をうっすらと開けた状態で、やや低い声で返してくる。彼は、その目をまっすぐに見返し、口を開いた。

一章　造神？

「お前、誰だ？」
「はぁ？」
彼の質問に怒りと呆れの混じった声が返された。
「あんたね、頭大丈夫？」
「自分では正常と思っている」
反射的に返した彼の言葉に、彼女はさらに不機嫌そうに眉をひそめる。
ここであることに気付いた。今の仕草もそうだが――この女、かなりの美人だ。
「はぁ、たく……」
彼女はシーツを放り出し、その裸体を隠そうともせず、あくび混じりに両腕を上げ、背筋を伸ばす。その透き通るような綺麗な髪と豊かな乳房に一瞬見惚れてしまい、無意識にその乳房に手が伸びる。
「はい、おあずけ」
伸ばした手は無残にもはたかれた。
「……てか、お前は誰なんだよ」
はたかれた手を悲しそうにブラブラさせながら、再び尋ねる。
「……それ本気で言っているの？」
彼女の睨むような視線を、彼も真っ直ぐに見返す。
「俺はどこまでも本気だ」
「その言葉、前にも聞いたんだけど」
それきり彼女は口を閉ざし、ベッドの周りに散乱している下着を回収し始めた。
彼女の素性については答えてくれそうにないので、もう一つ別の質問をしてみることにした。
「なぁ、お前何で俺の隣に寝ていたんだ？」
「……あんた、もう一度自分をよく見たら？」

彼女にそう言われ、自分が全裸、そして女も全裸で一緒に寝ていたことを改めて確認する。
「あ、なるほど」
思わず口に出して言ってしまったが、昨夜そういうことがあったってわけだ。
そこで、別の疑問が浮かんだ。よく分からないが、今の彼には目の前の女と愛し合ったこと以前に、昨夜このベッドで眠ったことすら記憶に無かった。
彼は自分の頭をさすりながら、彼女に尋ねた。
「なぁ、俺昨日酒とか飲んでいたか？」
「いいえ。水なら馬鹿みたいに飲んでいたけど？」
彼女はショーツを脚に通す手を止め、振り向く。
「飲んでいたか、って、なんで他人事？」

一章　造神？

その質問に、彼はなんと答えようか一瞬迷ったが、ここは正直に言っておいた。
「どういうわけか君の名前が……てか、君自身のことがよく思い出せないんだ」
「そう……」
途端に彼女の瞳が氷のように鋭いものへと変貌する。マゾ気は無いが美人に睨まれるのは、そんなに悪くない。
「いきなり私を呼び出して、いきなり押し倒してきたと思ったら、今度はいきなり記憶喪失？　何とも愉快な人ね」
「呼び出した？　俺が？」
「ええ……まさかほんとに覚えてないの？」
彼女の顔にやや心配の念が浮かぶ。今までの発言は冗談だと思っていたのだろう。
「おかしいな……。いい女と寝たことは絶対に忘れない自身があるのに……っとストップストップ」
「？」
ジーパンをはこうとしていた彼女を止める。
「何？」
怪訝な顔で彼女は尋ねてくる。
「俺たちがそういう関係なら、もう一度俺とやってくれないか？そうすれば俺も、きっと何もかも思い出す――」
彼女は目をすっと細める。
「一人でやってなさい」
彼女は呆れたようにため息を吐き、やや大きめの灰色のジャンバーを羽織る。
悲しいが、美人とやれる関係があると分かると、ついつい誘ってしまうのが男というものだ。

「それじゃ、今度はちゃんと記憶を戻してから呼んでよね」
先程の発言で、彼女の顔からは心配の念がすっかり消えていた。
このまま帰すのは惜しい。
「思い出した、思い出した。さあ、やろう」
「……私の名前は？」
「……」
彼は口元に微笑を浮かべ、言った。
「俺たちの愛に名前が必要だろうか？」
「必要ね」
即答。

一章　造神？

「それは詭弁というやつだ。お互い名前も知らない男女が愛し合い、子供を産んだという昔の伝承がそれを物語っている」
「まさか、その辺の強姦犯、とか言うんじゃないわよね？」
「……」
彼は、ぐっと言葉をつまらせるが、すぐに新たな言葉を吐き出す。
「俺とお前が愛し合うのは犯罪だろうか？」
「恋人同士だろうが夫婦だろうが無理矢理は犯罪になるのよ」
「……あぁ、ネタ切れだ……」
もう何も思い浮かばず、最後にそう締めくくった。
そんな彼の様子に、彼女は再びため息を吐く。そしてそのまま何も言わず、玄関の扉のドアノブに手をかける。
「……結局お前は誰なんだよ」
誘いに失敗した、と悟り、再び最初の質問をする。
その質問に、彼女は振り返らずに言った。
「自分で考えなさい」
ドアが勢いよく閉まる音がし、彼女は出て行った。
「……」
静寂。
耳にドアが閉まる音の余韻が残っている。
「何なんだよ……」
ため息を吐きながら、辺りに散乱する下着と上着、ズボンと、視線を辿っていく。
――汚い部屋だな……。
そんなことを思いながら、再び上着に視線をやったとき、彼の目に、上着のポケットからはみ出している紙切れが留まった。
何となくそれが気になり、ベッドから立ち上がり、その紙切れを手に取る。

その紙には、汚い文字と共に、一枚の写真が挟んであった。
「これは――あの女……？」
やや古びたその写真には、幸せそうな笑みを浮かべた男女が写っていた。
一人は先程の女らしき人物だった。女のほうは今より若く、まだ少女と言ってもいい幼さだった。
次にその隣、女の肩に馴れ馴れしく手を置いている男に眼をやる。
「誰だ、コイツ……？　胡散臭い笑み浮かべた奴だな……」
そう男の容姿に感想を述べつつ、
――何で俺がこんな写真を持っているんだ？
そう思い、散々考えたが、軽い頭痛のせいなのか、何も浮かばなかった。

一章　造神？

次に汚い文字が書かれた紙に目をやる。
字が酷く歪んでおり、暗号のような文だが、一部読める文字があった。
それにはこう書いてあった。
『死で始まり、生を救い、死で終わる』
「……」
――訳が分からん。
頭をぼりぼりとかきながら、大あくび。とりあえず顔を洗うことにし、写真と紙を近くの机の上に置いて、洗面所に向かった。
毛先が割れた歯ブラシと、くしゃくしゃに丸められた歯磨き粉が置かれた洗面台。水道の蛇口をひねり、水を出す。顔に水をぶっかけ、タオルでごしごしと拭き取る。大分すっきりした。
だが、まだ頭がズキズキと痛むので、シャワーでも浴びようか、などと考えつつ、正面にかかった鏡を見る。
そこに一人の男の顔が映った。その顔は――
「……」
踵を返し、先程机の上に置いた写真を手に取り、洗面所の鏡と写真とを交互に見比べる。写真に写っていた男。こいつは――
「俺……だよな……？」
目の前の鏡には、先程まで胡散臭いだのなんだの言っていた、男の顔が映っていた。写真よりは少し年を取っていた。
「……」
――つまり俺はあの女の恋人か何かってことなのか？
写真の風景が遊園地のような場所なのだから、そうとしか思えない。
「それで彼女は怒っていたわけか……」
そこまで考えて、一つの疑問が浮かぶ。

――だけど何で彼女のことを思い出せないんだ？　写真を見る限り、結構長く付き合っていると思うんだが……。

鏡に映る自分の顔を凝視。彼女が記憶喪失と言っていたことを思い出し、頭に傷等が無いか調べてみる。とくにそれらしい外傷は無かったのでひとまず安心する。一応、体も確認してみたが、ケガは無かった。

「ひょっとして痴呆症？」

なんとなく出た言葉だったが、自分で言って将来がすごく不安になってきた。

一章　造神？

――俺今何歳なんだろ？　鏡を見る限りは三十行ってないと思うけど……。

しばらくそのまま凝視していたが、鏡を見ても何も出てこないので、とりあえず服を着ようと、洗面台を出る。すると――

「自分の部屋とはいえ、裸でうろつくのは感心出来ませんねぇ」

「！！」

突然声を掛けられ、彼は肩を震わせた。

「はは、こいつびびってらぁ」

続けて、最初のとは違う別の声が発せられた。

どこから入ってきたのか、部屋の中には二人の男がいた。彼は背に壁を付け、その二人の闖入者達を交互に見る。

一人はスーツのようなデザインの服を着込み、その上から大きいコートを引っ掛けていた。そして頭に紳士帽子を被っている。

もう一人の格好はかなり対照的で、まるでその辺のゴミ捨て場から拾ってきたような、汚らしいぶかぶかのシャツとズボン。そして白く伸び放題の髪。まるで浮浪者のようだ。

「……誰だ、手前ら」

彼は低く押し殺した声で尋ねた。

「そんなに警戒しなくてもいいのでは？」

紳士帽子の男が、おどけたような声を吐き出す。

「とりあえず服を着てください。男同士とはいえ、見ていて気持ちが良いものではありませんから」

そう言って、足元に散らばっている衣服を拾い、それを彼に手渡した。

目の前にいる連中に聞きたいことが山ほどあるが、確かに裸のままではこちらも気恥ずかしいので、とりあえずこの場は黙って服を着ることにした。

「お前らいつの間にここに入ってきたんだ？」
ズボンに足を通しながら、二人に尋ねる。
「つい先程です」
紳士帽子の男が答える。
「鍵は掛かっていませんでしたよ？」
「……なるほど」
シャツのボタンを留め終え、再び二人を交互に見る。
「そういえばさぁ、さっき綺麗な女が出て行ってたよなぁ？」
先程から部屋をキョロキョロと見回していた浮浪者のような男が呑気な口調で話しかけてきた。

一章　造神？

「……それがどうした？」
「いやぁ」
そいつは汚らしい笑みを浮かべた。
「あの女とはどういう関係なんだ？　教えてくれよぉ」
「……」
彼が無表情のまま黙っていると、そいつはさらにしつこく聞いてきた。
「なぁ、なぁ、どうなんだ？　もうやったのか？」
彼は、ふう、と息を吐いた。そして一歩、そいつに近付くと――思いっ切りぶん殴った。
「んがっ！」
そいつは汚らしい悲鳴を上げ、その場にぶっ倒れた。
「手前、いきなり何すんだよ！」
そいつはそう言うなり、すばやく起き上がり、身構えた。
「いいぜ。手前がその気ならぶっ殺してやるぜ！」
その男はまるで獣のように歯をむき出しにしてこちらを威嚇してきた。彼は黙って男を見つめる。
男はこちらを睨み続けてくる。いつ襲い掛かろうか考えているのだろう。そして、男がこちらに踏み出そうとした瞬間――
「スザーノ」
静かな――よく通る声に、男は、ビクッと体を震わせ、動きを止めた。
「やめなさい」
紳士帽子の男は、相方に顔を向け、冷たくそう言い放った。
男は何か言いたそうに口を開くが、結局、紳士帽子の男の迫力に負けたのか、そのまま何も言わずに、ふてくされたようにその場に座り込んでしまった。

「失礼しました、イザーナ殿」
紳士帽子の男は、こちらに顔を向け、大して悪びれた様子も無く言った。だが、その言葉に彼は、一瞬眉をひそめる。
そんな彼の変化に気付かずに、そいつは続ける。
「こいつは本能、本質、本心によって生まれた者。ですから時にはこのように失礼なことを口走ってしまうのですよ。そこのところはご了承ください」
やれやれ、と言わんばかりにそいつは肩をすくめながら頭を振る。
「今ここにはいませんがアテラと言う女性もいます。彼女はコイツほどではありませんが、感情的になると何を仕出かすか……全く、まともなのは私ぐらいです」
そう言って、男はにこりと微笑んだ。しかしそれは、ぎこちない不気味な笑みだった。

一章　造神？

「……ちょっと待て」
彼は両手を前に広げ、そいつの言葉を止めさせる。そして先程頭の中に浮かんだ一つの疑問を口に出す。
「今さっき、俺のことをなんて言った？」
その質問に、そいつは首をかしげた。
「私、何か失礼なことを言いましたか？　もしそうならば謝罪しますが」
「違う。今さっき俺のことをなんか言っただろ」
「……？」
そいつはあごに手をやり、ふむ、と考え込んだ。
そのまましばらく待ったが、そいつは考え込むだけで、何も返してこない。
「……」
彼は息を吐き、なんとなくもう一人の男に視線を向ける。
スザーノと呼ばれていた男は、何事もなかったように棚を物色していた。また殴りたい衝動に駆られた。
視線を再び、前の男に戻す。まだ考え込んでいた。
ため息が自然と漏れる。このまま時間が無駄に過ぎてしまいそうだったので、彼は別の質問を口に出した。
「なぁ、最初の質問に答えてくれないか。お前らは誰だ」
その質問を聞いた途端、そいつは眉をひそめ、うしろで棚を漁っていたスザーノに顔を向けた。
「スザーノ。どうやら早すぎたみたいですね」
その言葉に、スザーノは振り返り、不満そうに言葉を漏らす。
「……なんだよ、それ」
そう言って、スザーノはぼりぼりと頭をかきながら、大きくため息を吐く。

「だから言ったじゃねぇか。早すぎるって。少しは俺の言うことも信じてほしいぜ、兄貴」
「……？」
突然始まった二人のやり取りに彼は眉をひそめ、何のことだ、と尋ねるが、二人は彼を無視して、話を続ける。
「あなたの言うことは、いつも間違っていますからねぇ。信じられないのも無理はありません。まぁ、ちょっとした行き違いですから気にしなくてもいいでしょう」
「……何言ってんだよ。明らかに兄貴のミスだろ」
「違います。そもそも私がミスをするなんて理論上ありえませんよ？」
「そりゃあ兄貴理論じゃ、ミスしてもそれをミスと認めなければ、ミスにはならねぇだろ。でもさ、自分のミスを認める純粋さも俺は欲しいと思うぜ」

一章　造神？

「ぐ……あ、あなたに諭されるなんて……屈辱です」
「屈辱？　何言ってんだよ。これだから理性、知性、ついでに高慢から生まれた兄貴は」
「最後は余計です。大体今の言葉はイザーナ殿も高慢だと言っているようなものじゃないですか」
「高慢で合ってんじゃあねぇの？　なんか見た目がそんな感じじゃ――んがっ！」
　先程の思惑通り、彼はその男をもう一発殴った。大きく息を吐き、苛立たしげに口を開く。
「おい、お前ら質問に答えろって、さっきから言ってるだろうが！　何なんだ手前ら！　泥棒か！？」
「……」
　そんな彼の様子に、兄貴と言われていた男は、やれやれ、とため息を吐く。
「面倒ですね、二度も説明するのは」
「二度？」
　そいつは、はい、と頷くと、近くのソファに腰を下ろし、ゆっくりと口を開いた。
「時間が経てば戻るのですが……まぁ、軽く説明することにしましょう。そのほうがあなたもおとなしくなるでしょうから」
「もったいぶってないで早く言え」
　自分も同じように腰を下ろし、あごで促す。
「分かりました。言いましょう。今現在あなたは――」
　そいつは顔に不気味な微笑みを浮かべ、はっきりとした口調で言った。
「神様です」

「……」
沈黙。
だが彼の沈黙には全くお構いなしに、そいつはさらに語る。
「そして私達はあなたの体より生まれ、肉体の保存を兼ね、あなたを導くために存在します」
「……」
「呼び方は自由です。私達にもそれぞれの名がありますが、導き手と言うのも一つの名ですから。まぁ、アテラは導き手と言われるのはあまり好きじゃないと言っていましたが……」
「……」
「そしてここが重要です。あなたは不死身です。ですが死なないだけで肉体は元の治癒力を超えて再生することはありません。その辺はあとでスザーノに説明してもらいましょう」
「……おい、ちょっと待て」
「はい？」
彼はひとまず口を挟み、訳の分からない説明を一旦止めさせる。

一章　造神？

「つまりだな……」
彼は頭をぼりぼりとかきながら、先程男が言った言葉を確認する。
「俺は神様だって？」
「はい、そうです」
そいつは真剣な顔で頷いた。
「それで不死身だって？」
「その通りです」
もう一度頷く。
「信じてもらえませんか？」
男の語尾に、やや心配の念が浮かぶが、彼は構わず頷く。
「信じられないね。そこまで人生に絶望していない……と思いたいが、俺はその手の話は嫌いなんだ」
そうであってほしい、と彼は思った。
何故なら、彼はまだ自分の記憶が定かではなかったからだ。おそらくこの二人は彼のことを知っているのだろうが、妙なことを平然と口走るような奴と知り合いだとは思いたくない。
ここで一つの考えが、彼の頭に浮かんだ。
こいつらはお互いを神様と言い合って喜んでいる脳のイカれた集団。そして俺はこいつらの仲間……。
――絶対に嫌だ。
「そうですか……」
そいつは目を瞑る。そして何かを決心したのかのような顔つきになり、おもむろに立ち上がった。
「スザーノ、準備をしなさい！」
「分かったぜ、兄貴！」
その突然の命令に、何が楽しいのか、スザーノは顔中に笑みを貼り付けて、そう叫んだ。

「なら、さっさと土を持ってきなさい！　イザーナ殿が神であることを証明させる！」
大して離れてもいないのに、紳士帽の男は、またも大声で叫び返す。
その言葉を聞くと、スザーノは、ふん、と鼻を鳴らす。
「また俺を馬鹿にしやがって！　いつも適量持ち歩いてるって言ってただろうが！」
「そうですか、それならいいのです」
スザーノの言葉に男は態度を豹変。すっかり落ち着いた雰囲気で、こちらに体ごと向ける。
「それでは、ご自分をよく見ておいてくださいね」
そいつはそう言うなり、右手をコートの中に入れ、そこから取り出した何かをこちらに向けた。

一章　造神？

「あん？」
向けられたそれが何か、確認しようと眼を凝らす。その瞬間――
轟音と同時に、額に殴られたような衝撃が走った。
「がっ……！」
くぐもった悲鳴が口から漏れた。衝撃で頭が後方にやられ、首がズキズキと痛む。無意識に右手を持っていき、首をさする。倒れた後頭部をゆっくりと戻していく。
彼が顔を前に戻すと、紳士帽の男は、両腕を組んで不気味な笑みでニヤニヤしていた。
「手前、いきなり何しやがる……」
突然の痛みで苛立ちが生まれ、やや怒気がこもった口調になる。
こちらの苛立ちを無視し、そいつは不気味な笑みをますます歪め、言った。
「生きていますか？」
「……は？」
突然の訳の分からない問いに、彼の口元からは空気が漏れたような音しか出なかった。その彼の態度を、聞き逃した、とでも思ったのか、今度はゆっくりと、きっぱりとした口調で男は言った。
「あなたは、今、生きていますか？」
「……」
やはり訳が分からない。その変な質問にどう答えれば良いのか分からず、彼は頭の中で最初に浮かんだ、一番オーソドックスな回答を答える。
「見れば分かるだろ」
その言葉を聞くと、そいつは左手をコートに入れ、そこから手鏡を取り出した。
「ご覧ください。今のあなたです」

何をやりたいのかサッパリ分からず――だからと言って自分も何を言っていいのか分からないので、とりあえず促されるままに鏡を見る。

そこには先程見たときと変わらない――だが、何度見てもやっぱり胡散臭いと思う男が映っていた。

だが、一つ違和感があった。

額から鼻筋を通る一本の赤い線。無意識に指で拭い、これまた無意識に舌で舐める。思ったとおり鉄の味がした。

「……」

視線を一瞬さまよわせ、眼前の男が右手に持つ物に合わせる。そして、改めてそれが何か、確認する。

その黒光りする物体は――拳銃だった。六連発のシンプルな銃。

ここで、先程の衝撃を思い出す。

一章　造神？

「おい、もしかして、さっきそれで……」
その問いに、そいつは大きく頷き、きっぱりと答えた。
「察しの通り、あなたを撃ちました」
彼は全くの無表情で口を開く。
「その場所は、もしかして……」
「察しの通り、あなたの額です」
「……」
額を指先で撫でる。確かにボッコリと凹んでいる箇所があり、凹みに指先を入れようとすると、電気が走るような痛みが走った。
「俺さぁ、今……喋ってる……よな？」
「はい、喋っています。それはもう元気いっぱいに」
「元気いっぱいか……」
彼は軽く息を吐き、眼を瞑る。口が左右に引っ張られ、笑みの形が出来上がる。
「そうかそうか――」
そうかそうか、と何度も呟く。だんだん顔が俯いてくる。
「……ゆ――」
「夢ではありませんから」
言葉を先に取られてしまい、彼はそのまま黙り込む。
束の間の静寂。そして彼は一息吐く。笑みの形のまま口元が動く。
「なんじゃこりゃあああっ！！」
「……」
その反応に、男は顔をしかめ、両手で耳を塞いだ。
「うるさいですよ」
「うるさい――じゃねえよっ！」

立ち上がり、そいつの襟首を掴みあげ、叫ぶ。
「何だよ、これっ！　何で俺は生きてるんだよ！？」
その様子に、そいつは呆れたように、ため息を吐いた。
「人の話を聞いていなかったのですか？　あなたはもう人間ではありません。神様なのですよ。か、み、さ、ま。分かります？」
「か……み……？」
だが、そんな言葉で納得出来るわけも無く、ますますきつく締め上げる。

一章　造神？

「何だよ、神って！？　そんなこといきなり言われて、はい、そうですかって言えるか！」
「それもそうですが……」
そいつは再びため息。
「まだ思い出せないのですか？　話したではないですか」
「なっ？　話したって……いつ？」
その問いにそいつはキッパリと答える。
「昨夜です」
「昨夜……」
彼はここで、昨夜の記憶が全く思い出せなかったことを思い出した。
その不安から、さらに疑問が爆発する。
「おい、答えろ！　昨夜何があった！？　俺は一体誰なんだ！？」
ズキン、と頭が痛み出す。彼は思わず左手で頭を抑える。
そいつは襟首をつかんでいた手を払いのけ、毅然とした態度で口を開いた。
「記憶を封じ込めたことに関しては謝罪します。あなたはあの時錯乱していましたから、仕方がなかったのです。しかしすでに能力は解除しました。あとはあなた次第、と言ったところでしょう」
「封じ込めた……？　解除した……？」
頭の痛みが増し、彼は両手で抱えるように頭を抑える。
「ぐ……頭が……痛ぇ……」
頭痛がますます酷くなり、無意識に脚から力が抜け、その場に跪く。
「な、なぁ、大丈夫なのか？　兄貴……？」
先程まで黙って傍観していたスザーノだが、彼の様子にさすがに心配になったのか、そう口を出した。

「大丈夫。多少頭痛が酷いだけです」
「そう、なのか……？」
スザーノはそう小さく呟き、彼のほうに視線を向ける。
彼は額を地面にこすりつけ、必死に痛みに耐えている。そのたびに、銃創から漏れた血液が床を汚している。
「あぁ……がっ、くっ、ぐあ……ああ……」
頭痛の痛みが増しているのか、呼吸は乱れ、口からよだれを垂らし、苦しげな声を漏らしている。
スザーノはそんな彼の様子に眉をしかめ、一瞬目をそらした。すると――

一章　造神？

「……スザーノ」
「……ん？」
突然名前を呼ばれ、スザーノは紳士帽の男のほうに顔を向ける。
「何？」
「何ですか？」
スザーノの言葉に男はそちらに顔を向け、聞き返す。その男の言葉に、スザーノは怪訝な顔をした。
「今呼んだだろ？」
その言葉を聞くと、男は、はっ、としたように目を開き、倒れている彼に顔を戻した。
「……？」
スザーノは、その行動を不可解に思い、再度尋ねる。
「なぁ、ツズファ兄貴。一体何なんだ？　何か用があるんじゃあないのか？」
「……」
痛みが治まったのか、もうピクリとも動かない彼を見て、ツズファと呼ばれたそいつは、ただ一言。
「私は呼んではいません」
「……」
スザーノはその言葉の意味が分からず、ただ黙り込む。
「いいですか、スザーノ」
ツズファは口元に不気味な笑みを貼り付け、言葉をつむぐ。
「……始まったようです」
「……何が？」
「それは――」
「神の使命」

その言葉はツズファの口から出たものではなかった。
ツズファはますます笑みを大きくし、スザーノは大きく目を見開いた。
「何を驚いてんだ、スザーノ」
その言葉と同時に、彼はゆっくりと体を起こし、ベッドに腰掛けた。
「あぁ、くそったれが。頭がまだ痛むぜ」
彼がそう言って、首を回している姿を見て、ツズファは笑みを貼り付けたまま、その場に跪いた。
「お待ちしておりました。イザーナ殿」
「……何のマネだ」
ふん、と鼻を鳴らし、彼――イザーナは軽く自分の肩をさする。

一章　造神？

「な、なぁ……」
スザーノがゆっくりと口を開いた。
「全部思い出したのか？」
その言葉に、イザーナは、口の両端を持ち上げ、笑みを作る。
「あぁ、思い出しちまった……。昨日のことを、何もかもな」
「そうか……」
その言葉にツズファの瞳に、やや憂いを帯びた色が浮かぶ。
「それで、あなたは……どうなのですか？」
イザーナはその質問の意味が分からず、尋ね返す。
「何が？」
ツズファは、いえ、と小さく言い、発言する。
「これからの心境ですよ。大丈夫と思いますか？」
イザーナは軽く鼻で笑い、腕を組みながら言った。
「お前のその鼻に付く話し方――それを聞くとマジで実感できるぜ」
ため息を吐く。そして自分にゆっくりと言い聞かせるように言った。

「俺が一度死んだってことがな」

鼻を鳴らし、自嘲気味に笑う。ツズファは頷きながら口を開く。
「ええ、そうです。それなら、もう分かっていますよね？」
ツズファは微笑んだ。
「使命……か……」
「はい――」
そうです、と言うと、手に持つ拳銃をこちらに差し出す。
「それでは行きましょう。もうそれほど時間がありません」
「……」

イザーナは差し出された拳銃を見つめる。
「これは……俺の銃……？」
その言葉に、ツズファはゆっくり頷く。
「えぇ。あなたが自分の頭を撃ち抜いた」
イザーナは視線をツズファに向ける。
「……これが必要なのか？」
「時には」
「……」
イザーナは口を閉ざし、拳銃を受け取る。そしてそれをズボンに挟み込んだ。

一章　造神？

「おっと焦るな。治療していかねぇと」
立ち上がろうとしたイザーナに、スザーノが子供のような笑みを浮かべて、言った。
「……あぁ、任せた」
イザーナはそう言って目を瞑った。
やるぜ、とスザーノが言うと同時に、じゃり、とした感触と痛みが額に走る。だが、その痛みは、だんだんと薄れていき、やがて完全に消えていった。
「どうだ、俺の力は？」
目を開けると、スザーノがツズファの手鏡をこちらに向けていた。そこに映る自分の顔を凝視。額にあった弾痕が、まるで最初から何も無かったかのように綺麗に治っていた。
「さすがだな。お前の力」
「当ったり前だ。まさに自然を愛するが故の力だぜ」
褒められたのが素直に嬉しいのか、ふふん、とスザーノは鼻を鳴らす。
「力自慢はその辺でいいでしょう。イザーナ殿、行きましょう」
「それもそうだな」
ベッドから立ち上がり、玄関に向かう。
「ちょっと待てよ。この俺の自然講座はまだ終わってない――」
「黙ってろ」
「黙ってなさい」
「……分かったよ」
二人に同時に返され、スザーノはしぶしぶ、といった様子でその場に座り込んだ。
「兄貴、俺は留守番してるよ」
スザーノはそのまま寝転がり、背中越しにツズファに呼びかける。

「えぇ、お願いします。アテラが帰ってくるかもしれませんから」
おう、と短く返事すると、スザーノはそのまま静かになった。
「騒がしいやつだな、こいつは」
寝転がるスザーノを見て、イザーナはそう言った。ツズファは微笑みながら口を開く。
「それでもどこか憎めないでしょう？」
その答えにイザーナは、さぁな、とだけ答えた。
「イザーナ殿」
靴を履き、ツズファの前に立つと同時に、突然名前を呼ばれた。
「……何だ？」
「逃げないで下さいね」
「……何からだよ」
そう尋ねるとツズファは、いえ、と小さく呟き、玄関のノブに手を掛ける。

一章　造神？

「なんでもありません。気にしないで下さい」
ツズファはそう言うと、にいっと不気味な笑みを作った。その反応に、イザーナは目を細め、鼻を鳴らした。
「だったらさっさと導け。時間が無いんだろうが」
「言われなくても」
ツズファは笑みを貼り付けたまま、廊下に出る。イザーナもそのうしろを歩く。
――逃げるな……か……。
ふと、友人の姿が目に浮かんだ。
――いいか、逃れることを真に理解している奴はいない。世界に存在する限り、生きていようと死んでいようと逃げるということは、そちら側に進むことなんだ。だから逃れるという言葉は、その言葉自身で進む、という言葉を否定していると言っていい言葉なんだ。
いろいろと訳の分からない論議を並べるのが、あいつの癖だった。
――言い方を変えれば全ての言葉は素晴らしく聞こえるだろう。だが裏を返せば全てが上っ面だけの詭弁と化す。君はそれでも、なんでもいい。何かを信じることは出来るか？
――うるせぇ、アホ。その意見で言うなら、手前の言葉も上っ面だけの詭弁じゃねえか。アホらしい。
ふ、とイザーナは自嘲気味に笑みを作った。友人の言葉が懐かしく耳に響く。
「どうしました？」
笑みを浮かべているのを不審に思ったのか、ツズファが尋ねてくる。
「いや――」
何でもない、と言おうとしたが、やめた。
「ちょっと友人のことを思い出していただけだ」

「そうですか」
ツズファは、どうでもいい、と言わんばかりに背中を向ける。ふん、とその背中に向け、鼻を鳴らす。
「過去に浸るのもいいですが、今も見てくださいね。しっかりと」
「分かってるよ」
「これからどんどん忙しくなりますからね」
イザーナたちが階段を下りている途中、別の部屋の住人とすれ違った。だが、住人はこちらを一瞥しただけで何も言わず、通り過ぎていった。
「無愛想な住人ですね」
ツズファは住人に対して、率直な感想を述べた。
「皆こんなもんだ。下手に他人とは関わらない」
その言葉に、ツズファは何も返事を返さずにアパートの玄関に手を掛ける。
古臭いその扉を開くと、ひんやりとした空気が体中に纏わりついた。
「急ぎましょうか。雨が降りそうです」
ツズファにそう言われ、なんとなく空を仰いだ。
空は灰色だった。
「……そうだな」
嫌な感じがした。

一章　造神？

「ここはどんな町なのですか？」
「自分で調べろ」
ツズファの言葉に適当に返し、イザーナは煙草を取り出し、口にくわえる。
「……私は煙草の臭いが嫌いです」
「俺は煙草の匂いは大好きです」
ライターで火を付け、口にくわえたまま、ふぅ、と煙を吐き出す。
「こっちに向けて吐き出さないで下さい。刺激臭で吐き気がします」
「こっちに向けて戯言吐くな。気持ち悪くて吐き気がする」
そう言って、お互いに、ふん、と鼻を鳴らす。
今、彼らはアパートから少し離れた路地に隠れるように立っていた。イザーナが煙を吐く。
「時間が無いとか言っといて、随分のんびりだな」
吐き出された煙を鬱陶しそうに手で払いつつ、ツズファは答える。
「いろいろと知っておきたいことがありますから。お互いに」
「何を？」
ツズファは、いいですか、と前置きし、口を開く。
「私たちは昨日――あなたが死ぬと同時に生まれました。これは分かりますね？」
「あぁ」
イザーナは頷く。
「私たちは導き手として生まれました。それは何故か、分かります？」
ツズファの問いに、イザーナの、眉根が寄せられる。
「使命をちゃんとやるか見届けるためじゃないのか？」

その答えに、ツズファは首を横に振る。
「それも一つです。しかし、それ以外に最も大事なことがあります」
にいっと不気味な笑みを作る。
「その笑顔、気持ち悪いぞ」
「ほっといてください。そして話に横槍入れないでください」
いいですか、と前置きし、ツズファは続ける。
「私たちはですね――あなたの肉体を持っているのです」
「ほぉ」
「……なんですか、その気の無い返事は」
イザーナの反応に不満があるのか、ツズファは眉をしかめる。

一章　造神？

「もう少し驚いてくださいよ」
「何で？」
「面白くないじゃないですか」
「だったら手前で面白い話の振り方考えろ」
イザーナは、ふぅ、と呆れたように煙を吐き出し、口を開く。
「大方予想は出来る。今の不老不死の体が俺の体じゃないってことぐらいな」
「……さすがですね」
感心しているのか、していないのか、分からない微妙な反応を返され、一瞬場に沈黙が下りる。
しばらくの間、そのまま時間が過ぎていったが、イザーナも待つのに飽きてきたので、こちらから話を切り出すことにした。
「ところで――」
「なんでしょう？」
まるで待っていたかのような早い返事。
「……なんで俺の元の体をお前らが持ってるんだ？」
「おや、やはり気になりますか？」
イザーナは煙を苛立たしげに吐き出すが、ツズファは構わずに続ける。
「体を持っている――という表現は少し違いましたね。正確には宿している――と言いますね」
「……どういう意味だ？」
その問いに、クックック、と不気味な声を漏らし、ツズファは答える。
「つまりですね。導き手がこの世に生まれる際、あなたの肉体を媒介として、生まれてくるわけなのですよ」
ツズファは笑みをますます強める。

「あなたが死亡したとき、あなたの体は三つに分けられました」
ツズファは自分の手を首元に持っていき、水平に構える。
「まずは首から上――頭」
す、と横に手をやり、首を切る仕草をする。
「次は腰から上――上半身」
腰に手を持っていき、同じように切る仕草をする。
「そして残り最後――下半身」
クックック、と再び不気味な声を漏らす。
「お分かりですか？　頭、上半身、下半身。これらが私達の媒介となります。頭の知性から生まれたのが、この私。上半身の本能から生まれたのが、スザーノ。下半身の欲望から生まれたのが、アテラ」
お分かりですか？　と同じことを、もう一度言った。

一章　造神？

「……つまり俺はこの不死身の肉体で生まれ変わり、お前らは俺の元の肉体から生まれたってことなのか？」
「まぁ、そんな感じですが――あなたの不死身の体については少し違いますね」
少し間をおき、続ける。
「あなたが先程申し上げたとおり、今の体は元の体とは違います。簡単に言い表すなら、神の体、と言いましょうか」
「ひねりがねぇな」
「……横槍入れないでください。では肉体そのものが違うのに、何故あなたは元の体で生きていたときの記憶があるのでしょうか？実はその体――あなたの体のコピーなのです」
「コピー？」
ツズファは、はい、と頷くと、話を続ける。
「髪の毛一本、細胞一つに至るまで、全てを完璧にコピーしております。ですから筋力の衰えも無ければ、記憶障害も無く、生前と全く変わらない姿でいられるのです。これぞまさに、神のなせる業、と言ったところでしょう」
「コピーねぇ……」
イザーナは、なんとなく自分の手のひらを見つめ、軽く動かしてみる。
「驚きでしょう？」
「……で、何でお前らが俺の肉体を宿す必要があるんだ？」
「質問に質問で返しますか」
ツズファは呆れたようにため息を吐き、再び説明を始める。
「それはあなたがあの世に向かうのに必要だからです。神の体はあなたの意思を持っているとはいえ、別の体ですから。元の肉体がないと人はあの世に向かえないのです」

「何で？」
「人を構成するのは魂ではなく肉体ですから。肉体が腐り果ててしまえば、あなた自身が消滅してしまいます。それは嫌でしょう？」
その言葉には何も返さず、煙草を地面に放り、足でもみ消す。
「マナーぐらい守ったらどうですか？」
再び新しい煙草を取り出し、火を付ける。
「肺ガンで死にますよ」
先程からのツズファの声を無視し、路地の奥に目をやる。
鼻につく臭いが漂う路地の奥に、随分年を取った、一人の浮浪者がいた。
寝ているのか、毛布にくるまって、身動きしない。
「本当に救いようの無い町だよな」
無意識にそう呟いていた。

一章　造神２１

ツズファが同じく路地の奥に目をやる。
「この町では珍しくないのですか？」
「あぁ。奥に行けば死体も転がってるらしい」
「……」
ツズファが不快気に目を細める。
「この町はどんな町なのですか？」
ツズファが再度尋ねてくるので、鬱陶しそうに煙を吐き出し、イザーナは町の説明を始めた。
この町の名はオウングロウ。
本国から少し離れたところにあった小さな島を埋め立て、拡大して出来上がったのがこの町だ。
本国からの入り口を先頭に、第一区画、第二区画と全部で五区画までである。
周りは海に囲まれており、町を出るには本土から伸びる、やたらと巨大で長い橋を渡っていかなければならない。つまり入り口も出口も一つということだ。
一応この町は観光名所の一つとして挙げられているが、それは二区画までの話。三区画からどんどん治安は悪くなり、一番奥の五区画に行く奴は頭がイカレた犯罪者か、自殺志願者だけだ、とまで言われている。
「ちなみにここは第三区画。まだ治安はいいほうだ」
「よくこんなところに住めますね」
「恋人にも言われたよ」
そう言って、煙を吐き出す。そして浮浪者のほうへ足を進める。
「追いはぎでもするつもりですか？」
「やらねぇよ」
浮浪者の前で腰をかがめる。浮浪者は、こちらの存在に気付いた

のか、目を薄く開けている。
「よぅ、元気か？」
イザーナは口元に軽い笑みを浮かべ、煙草を取り出す。
浮浪者も、最初は怪訝な顔をしていたが、出された煙草を見て、ほぉ、と声を漏らす。
「イザーナじゃあないか。久しぶりだねぇ」
そう言って、煙草を一本抜き取る。
「そう言うあんたも相変わらずだな。煙草の銘柄で思い出すなよ」
そう返しつつ、ライターで火を付けてやる。
「……知り合いですか？」
二人のやり取りを見ていた、ツズファが問う。
「ん？　あぁ」
イザーナは肩越しにツズファを見る。

一章　造神２２

「結構前からここに住み着いているじいさん。よく差し入れとか持ってきてやっているんだ」
「ほ、ほ。随分と生意気になったのぅ、若造が」
老人は、煙を吐き出しながら笑う。
「そうでしたか」
ツズファは、口元にやや柔らかい笑みを浮かべ、老人に向き直る。
「初めまして、ツズファと申します」
帽子を軽く持ち上げての挨拶。その仕草に老人は目を細めて微笑む。
「随分礼儀正しいのぉ、イザーナ」
イザーナのほうへ、顔を戻す。そして笑みを浮かべたまま、言った。
「お前の導き手とは思えんわ」

イザーナの笑みが凍りついた。
その隣のツズファは、変わらない笑みを浮かべたまま口を開いた。
「やはりあなたも神でしたか。どういった使命で？」
老人は、煙を吐き出しつつ、答える。
「何、簡単なことじゃ。ここにいることだけが、わしの使命じゃからのぉ。退屈じゃが、ここにはよく人が来る。まだマシなほうじゃ」
「そうですか。こちらは人助けですよ」
「それは大変じゃのぉ。じゃが、導き手がいるのじゃ。苦悩はするじゃろうが、退屈はせんじゃろう」
まるで普通の世間話をしているかのような二人の口ぶり。イザーナはそれをどこか遠い国の言葉のように聞いていた。
「ところで……あなたの導き手はどうしました？　どんな使命でも

導き手はいるはずですが」
ツズファがそう尋ねると、老人はニヤリと笑い、そして自らを覆う毛布を一気にめくり上げた。
それが何か、確認したとき、ツズファの顔が不快に彩られた。
そこには灰色の肉の塊があった。蝿や蛆がたかり、異臭を放っている。
「……これまた酷いことをしましたね」
その反応に、老人は先程と変わらない、柔らかい笑みをこぼす。
「わしも狂っておったよ。導き手はコイツ一人じゃったから、もう死ぬことが出来ない」
「……生前もこんなことを？」
老人は毛布を戻し、短くなった煙草を指でもみ消す。
「後悔はしておらん。この先苦しもうとも、絶望に嘆こうとも、わしは後悔せんよ……」
そう言って、イザーナのほうへ視線を戻す。
「イザーナ、頑張りなさい。たとえ何があろうと、導き手だけは殺してはならん。わしが言えるのはそれぐらいじゃ」
未だに――信じられないといった表情で、彼は老人を見ていた。
「さぁ、行きましょうか。もう時間がありません」
ツズファはイザーナの腕を取り、路地の外へ足を運ぶ。
「そんな……神……じじいも……」
イザーナは呆然とそう呟いていた。
「イザーナ殿」
ツズファはため息を吐きつつ、口を開く。
「早くしませんと、あなたの望みどおり死ぬことが出来なくなりますよ？」
イザーナはうつろな目でツズファを見上げる。
「……神って何なんだ？」
「それはあなたであり、あの老人でもあります」
ツズファの答えは答えになっていなかった。

一章　造神２３

煙草に火を付けると、気分がだいぶ落ち着いてきた。
「心配しましたよ。神の説明受けたときのような錯乱をしないかと」
「俺も大方分かってきたからな。ただ――少しばかりショックだっただけだ」
二人は今、大通りの真ん中を並んで歩いていた。車の通りが少ないため、文句は言われない。
「しかし使命なんてこなしても、この町は何も変わらないと思うぞ」
煙を吐き出しつつ、皮肉気にそう言うと、
「何も変える必要はありません。ただ使命をこなせばいいだけです」
さらりと返される。イザーナの眉が不快気に動く。
「なんだよ、そりゃ」
イザーナは足を止め、言葉を吐き出す。
「それじゃあ、俺が神になる意味が無いんじゃないのか？」
「別に意味はありませんよ？」
ツズファはくるりとこちらを向くと、無表情のまま続ける。
「あなたにとって今大事なのは、こんなくだらない会話を続けることではなく、使命をこなすことです」
そのツズファの言葉に、さらに眉が不快気に動く。
「さっきから使命、使命って、なんなんだよ、その使命ってのは！？」
イザーナは語尾をやや上げて返す。
「昨日言いませんでしたか？」
先程と全く変わらない表情でツズファは言った。
「あなたの使命は、千五百人の命を救うこと、です。何度も言わせないで下さい」

「そういうことを聞いてんじゃねぇ！」
イザーナはそう叫ぶなり、自分の拳を壁に叩き付けた。
「骨折れますよ」
「話をすり変えようとしてんじゃねぇ！」
そう返すと、ツズファは心外だと言わんばかりに肩をすくめる。
「ただ心配しただけですよ。酷い言いがかりです」
「いいから答えろ！」
イザーナは一呼吸おいて口を開く。
「これは昨日聞いても答えなかったよな」
先程からいろいろありすぎて、苛立っているのか、無意識に言葉に怒気がこもる。
「何でしょうか？」
イザーナは煙を吐き出し、言った。
「何で罪を犯して死んだ奴は神になるんだ？」
「それは償いです」
ツズファは即答する。

一章　造神２４

「償い？」
思わず聞き返した言葉に、ツズファは頷く。
「よく宗教などで言われる地獄。簡単に言えば、これはそう言ったものになりますね。使命をこなさない限り永遠に死ぬことが出来ないのですから」
「地獄……って、神になることが？」
そう尋ねると、ツズファは呆れたように、ため息を吐く。
「全くあなたは……いえ、すべての人間もそうですけど、神という言葉を完全に勘違いしています」
ツズファは、いいですか？　と人差し指を胸の前で振り、目を瞑った。
「神はあらゆる宗教でその形、また教えが違っていたりしますが、ほぼ共通していることがあります。それは世界の創造主であること。それによって、神は畏怖、また崇拝され、人間に禍福をもたらすものと言われてきました。ですがこの表現、半分は合っていますが、半分はハズレです」
「何だ？　神なんか本当はいないとでも言うつもりか？」
「黙ってください。説明中です」
「……」
またもイザーナの眉が不快気に動く。ツズファは説明を続ける。
「まず正解の部分を答えましょう。神はいます。この世界を造った神は、本当にいます。しかし人間を導き、教えを説き、禍福をもたらすような神は存在しません。本当の神は――そうですね……見ているだけ――いえ、観察……良い言葉が思いつきません」
「傍観者か？」
その言葉に、ツズファは口元に笑みを浮かべる。いつもの不気味な笑みだった。

「お詫びします。あなたを馬鹿で小さい元人間とずっと思っていました。が、さすがに私の元となった御方。それなりの言葉はそれなりに知っているようで安心しました」
「殴るぞ、手前」
「お断りします」
そう言って、ツズファはククッと笑う。
「話がそれました。つまり神は傍観者。たとえ誰がどこで苦しもうと幸福になろうと一切神は無関係です。あなたが神と言われているのは償いとして人々を救っているので、その名が付いただけです。そのまま文字通り神になったわけではありません」
「ほう、それじゃ今から宗教団体に教えに行くか？」
イザーナがそう茶化すと、ツズファの目が僅かに細められた。
「話の論点をずらさないで下さい。確かに宗教的な神は存在しませんが、わざわざそれを否定する必要もありません。当てつけ、として神はこれ以上に無い存在ですから。全ては神のお導き、とでも言えば不正も正統性を持ちます」

一章　造神２５

「都合のいい神様ってか？」
「人間は、なにかしら保身を求めます。肉体的にも精神的にも。そして他者にすがることでしか、それらを保持出来ない弱い者には空想であっても神は必要なのです。中には馬鹿らしいと思う人間もいるかもしれませんが、彼らも何かしらにすがって生きていて神を必要としていないだけです。なので、そう言う人間こそ馬鹿らしいです。自分が何かにすがって生きていると気付いているなら、そんなことは言いませんから。自覚が足りません。愚かです。死ねばいいのに」
　だんだんと愚痴に近くなってきている気がする。
「てか、論点ずれてるぞ」
「ずらした張本人が言わないで下さい」
「ずらされた間抜けが口答えするな」
「……分かりました、続きを言いましょう」
　ツズファは返す言葉が見つからなかったのか、苦々しげな顔をして続ける。
「神はこの世界を造ったあと、あるシステムを作り、置いていきました。神はそのシステムの出来に大層お喜びになり、また新しい世界を創造するために、この世界をあとにしました。めでたし、めでたし」
　そう言ってツズファは鼻を鳴らした。
「……いきなりすごく簡略的になったな。まぁ、いいけどさ」
　イザーナは煙を吐き、口を開く。
「つまり神にとって、プラモデルみたいなものか？　創造ってのは」
「まぁ、部品も自分で作るというなら近いですかね。子供の遊びみたいなものです。今自分の力でどれほどの世界が造れるか、と言う」
「……」

イザーナは眉をひそめ、押し黙る。
「不快ですか？」
「すごく、な」
イザーナは大きくため息を吐いた。
「自分達はただのお遊びで生まれたと言われて、喜べる奴がいたら尊敬するな。自己と世界は絶対に裏切らない話し相手、と思っていたんだがな」
「友達の少ない奴が言いそうな言葉ですね。世界に話しかけても何も返ってきませんよ」
「黙れ」
「少しなら」
「永遠に黙ってろ」
「それは無理です」
「殴られたいか？」
「殴り返されたいですか？」
「……お前、性格悪いって言われるだろ」
「私はあなたです。あなたがそう言われたことがあるのなら、はい、と答えましょう」
「……」
グッと、一瞬言葉に詰まる。

一章　造神２６

「おい、使命のほうの説明がまだだぞ」
「話をそらしましたね。私の勝ちです。どうでもいいですが」
ツズファは再び不気味な笑みを口に浮かべる。
「それで使命でしたね。余計な事とは思いますが、一応答えましょう。使命とは全ての神が持つ、神の証と言えるものですね」
「あ――」
「いちいち聞き返さないで下さい」
「……」
口を開いた瞬間に、先手を取られてしまったので、イザーナは仕方なく口を閉じた。
「それではまず証とは何か、ですね。実は世界には償いとしての神以外にも様々な神がいます。例えば、一種の芸術を極めた人。そういった人は死ぬには死にますが、普通の人間より死ににくい体になります。これは半端な神でヒールと言われています。一部ではハーフアンドハーフとか言われていますが」
そこで言葉を区切り、こちらの目を見る。質問どうぞ、という意味なのだろう。その態度にやや不満を覚えつつも、質問をする。
「神様は芸術好きなのか？」
ツズファは何かを考えるように視線をさまよわせつつ、答える。
「さぁ、詳しいことは分かっていませんね。ただ、絵には魂が宿るとか、どこかで言われていますが……関係無いですね。それでは続きを」
ツズファは軽く息を吐き、再び口を開く。
「その証で、その神が償いの神なのか、そうでないのかが分かるわけです。ではどうしてわざわざ証を付けるのか。それは不要な神と必要な神とを分けるためなのです――いい学習能力です。聞き返さなくなりましね」

イザーナの眉がまたも不快気に動く。
「……俺を猿か何かと一緒にしてんのか手前は。てか、お前聞き返されなくて本当は寂しいんだろ？」
「それでは不要な神とは何か、を説明しましょう」
無視かよ、と呟く。
「今現在、神は世界に数え切れないぐらい、大勢います。それはもう、ゴキブリ並みに」
こちらをちらっと見る。そのまま黙っていると、何かを諦めたのか、説明を続ける。
「一番多いのは償いの神です。それ以外の神なんて、ごく一握りです。そして償いの神は、元が罪人であるからなのか、使命を果たそうとせず、不死身なのをいいことに犯罪に走りやすいのです。ですが、そんな彼らを処罰するシステムがあります。その時のために証は必要なのです。ヒールか償いの神か分からないじゃ、話になりませんから。ちなみに処罰の対象となるのは……」
思い出そうとしているのか、目を瞑り、続ける。

一章　造神２７

「まず一つ目は、使命以外の不要な殺人。ですが、使命において必要な犠牲の場合には黙認されます。これはあまり厳しくありませんので神経質にならなくても結構です」
「そこは神経質のほうがいいと思うぞ」
「思うだけなら発言しないで下さい」
反論するツズファの口元が微妙に笑みの形を作っている。どうやら突っ込んで欲しかったようだ。
「他には性交、自分の導き手の殺害――あぁ、言っていませんでしたけど、導き手は神ですが不死身ではないのですよ。特殊なヒール、造神です。導き手が普通の人間ではないというのはもう分かりますよね？」
その言葉にイザーナは、あぁ、と頷く。
「導き手がそれぞれ持っている変な力のことだろ？　スザーノが俺の額の穴を治したような」
ツズファは、コクンと頷く。
「えぇ、その通り。私達には神をサポートするために、それぞれ不思議な力を持っています。あなたの傷を治したスザーノの能力は、土を様々な物質に変えることです。もちろん成分すらも変えることが出来るので、土で食事を作ることも可能です。ちなみに私の力は……気になります？」
「別に」
「本当にひねりの無い返答しかしませんね」
「……さっさと説明を終わらせろ」
イザーナは鼻を鳴らし、促す。ツズファは不気味な笑みを浮かべたまま、続ける。
「あとは使命のミス、放棄。もう一つありますが……これはあまり関係ないので、知らなくても大丈夫です。禁止事項はこれぐらいで

すね。ちなみに処罰がどのようなものなのかは教えられません」
「ケチだな」
「知らないから教えられないのです」
「ああ、そうかい」
そろそろ説明を聞くのがだるくなってきた。
「そして俺は使命を果たさねぇと死ぬことが出来ない。そうだろ？」
「はい、説明は終わりです」
ツズファはそう言って、ぱんっと手を叩いた。イザーナは大きく息を吐いた。
「しかし、神になった奴で真剣に死にたいと思って使命をこなす奴なんかいるのか？」
何気無い言葉。だが、その言葉を聞くと、ツズファは急に真剣な表情を作った。
「……あなたは成り立てですから、まだ分からないのですよ」
イザーナはこちらに背を向け、ライターを手で弄んでいた。その背中を見据え、ツズファはそっと呟いた。

一章　造神２８

「……この先の地獄はあなたを狂わせるでしょう。そして何もかもが消えていく。あなたは怒り、嘆き、絶望する。すべての娯楽は虚無を生み出し、すべての快楽は失望を生み出す。そして後悔するでしょう。永遠に終わらない命を得てしまったことを。あなたの心は暗黒に包まれ、そして捧げられる」

ツズファは、ふぅ、と息を吐き、目を細める。

「それでも……それでもあなたは最後には笑うのですよ。自分や神を含むすべてのものを笑うのです。満たされた幸福に包まれて……」

帽子を被りなおし、悲しいものですね、と言葉を吐き捨てる。

「ん？　なんか言ったか？」

イザーナが肩越しにこちらを見る。

その顔を見ていると、自然と笑みがこぼれてきた。

「いえ、ちょっと使命について言っておきたいことがありまして。あなたが救わなければならない人間は、残り一四九三人です」

その言葉にイザーナは眉をひそめる。

「あ？　ちょっと待て。俺はまだ一人も救ってないぞ」

その疑問の声にツズファは、あぁ、と何かを思い出したような言葉を漏らす。

「忘れていました。それは他の神が救ったやつです。さすがに一人では無理なので協力してもらっているのですよ」

「赤の他人にか？」

「使命のダブりですよ。あなたの使命だって何人かの神とダブっているのです」

「そうか……」

「じゃあ俺がやらなくてもいいか、とか思いましたね」

ツズファは笑みを強め、言葉を投げかける。

「……思ってねえよ」

「否定するところが怪しいです」
「じゃあ肯定しろってか？　それじゃあ無実を証明できないだろ」
「疑いをかけられた時点であなたの負けですよ」
「どういう理論だ」
「そういう理論です」
「その答え方、頭が悪いことをアピールしているだけだぞ」
「あなた今、自分で自分を馬鹿と言っていますよ」
イザーナが我慢の限界に達し、本気で殴ろうとした時、来ましたよ、とツズファが呟く。
「何が？」
一応拳を収め、ツズファの目線の先に顔を向ける。

一章　造神２９

そこには全身を黒ずくめのスーツで統一した、肥満体の男がいた。何故かガマガエルを思い出す。
「誰だ、あのガマガエル」
そのまま口に出して言う。その言葉にツズファは呆れたように返す。
「失礼な人ですね、あなたも。あの男は、その筋にはそれなりに顔は知れ渡っているマフィアの下っ端の下っ端の下っ端ですよ」
「……つまり、あいつ自身はそんなに知れ渡っていないってことだろ？」
「正解です。よく分かりました」
「……で、誰なんだよ？」
「使命ですよ」
質問には答えず、ツズファは続ける。
「そしてそろそろ……あぁ、あの男です」
別の一角を指差す。
そちらに顔を向けると、今度は対照的に、がりがりのミイラのような男が路地から、こちらに歩いてきていた。目だけがギラギラとしていて不気味だ。
「よく行動が分かったな」
そう呟くと、ツズファがこちらに不気味な笑みを向けてくる。
「導き手ですからね。仕事はしっかりとやるのですよ。ちなみに何故分かったか、という質問ですが――私の力で事前に調べておいたのです」
ツズファは自分の額を指で叩きつつ、そう答えた。
「未来予知？」
「近い――ですかね。私はこの力を、晦と呼んでいます」
そして間をおいて、口を開く。

「さて、それでは使命のほうですが――」
「大方の見当はつく」
イザーナは煙草を吐き捨て、足でもみ消す。
「まず、あのミイラ男。多分ガマガエル野郎に復讐かなんかを企んでいる。そして返り討ちに遭い、死亡。それを阻止。こんな感じか？」
ツズファは、満足気な顔をするイザーナに、やや侮蔑をこめた視線を送る。
「返り討ち決定ですか。酷い人ですね。ちなみに人の話を聞かない奴は早死にしますよ。名言です」
ツズファの皮肉を無視し、イザーナは口を開く。

一章　造神３０

「とりあえずあのガマガエルをぶっ殺す。それでいいんだろ？」
「人の話を聞けと言っているのです」
「聞いているって。てか、人じゃないんだろ、お前」
「黙りなさい。いいですか――」
言葉に怒気をこもらせ、イザーナを黙らせる。ふん、と鼻を鳴らし、イザーナは口を閉じる。ツズファは静かになったことを確認すると、前方の二人を交互に確認して言葉を紡ぐ。
「あのガマガエルがどんな奴か知っていますか？」
そう言って、こちらを背中越しに、見る。その探るような視線に苛立ちながら、イザーナは低い声で返す。
「……知らないって言っただろうが。大体今頃になって――」
知りたくもない、と呟いた。
「おや、それは何故？」
ツズファは、そのままの姿勢で、尋ねてくる。
「……今から殺す奴のことを知ってどうするんだよ」
「……あの男はですね――」
ツズファは顔を前に戻し、語り始めた。
「先程も申したとおり、どこにでもいる小悪党です。金貸しも行っているそうですが――利子が一週間で借りた額の三倍近くに跳ね上がります。無茶苦茶です。言うまでも無く、悪徳業者です」
「分かったからそれ以上言うな。気分が悪くなる」
イザーナは吐き捨てるように言う。
「とにかくガマガエルを殺す。余計なことを言うな」
「ああ、それは困ります」
「……？」
イザーナは眉をひそめ、ツズファを睨む。
人の話は最後まで聞くものです、とツズファはこちらに顔を向け

る。
「すみません、肝心なところをお教えしていませんでした」
ツズファは、ぎこちない不気味な笑みを浮かべて、言う。
「救うのはミイラ男のほうでなく、あちらのガマガエルのほうですよ」
「……は？」
一瞬、イザーナは呆けた声を出した。
「あんな――」
――あんな屑を助けろと？
「ええ、そうです」
考えていることを悟ったのか、ツズファは不気味な笑みをますます大きくする。
「それが使命です。出来なければ死ぬことが出来ませんよ？」
「ふざけるな」
イザーナは不快感そのままに言葉を発する。

一章　造神３１

「あいつは悪党なんだろ？　そんな奴をどうして助ける必要があるんだ？」
「酷い言い方ですね。どんな生き方をしようと、あのガマガエルは命を持っていて、それが今、奪われようとしているのですよ？　それを助けようとは思わないのですか？」
「思うわけがない。自業自得だ」
「そういった考えをしますか。まぁ、そのせいであなたは神になったのですからねぇ……」
　冷ややかな目と共に吐き出されたその言葉に、イザーナは目を細め、ゆっくりと言った。
「手前、何が言いたい……？」
「馬鹿だと言いたいのですよ」
　ツズファは真顔に戻り、言葉を続ける。
「何故、殺すという手段しか思いつかないのですか？　それ以外にもいろいろとあるでしょうに」
「なっ、俺はそういう――」
「な、なんだ、貴様はっ！？」
　突然の騒がしい狼狽の声に、振り返ると、細身の男が、肥満体の男にナイフで襲いかかろうとしていた。
「やめろ！」
　そう叫ぶが、こちらを見向きもせずに、細身の男は突っ込んでいく。
「くそっ」
　走っても間に合わない。そう判断し、銃を取り出し、ナイフに狙いを定め、引き金を引く。
　発砲音。
「あああああああああああああああ！」

路地に悲鳴がこだました。腕に命中したらしく、細身の男は腕を押さえてうずくまった。
イザーナは、しまった、と内心舌打ちする。
「何を殺そうとしているのですか」
「黙れ！」
イザーナはそう叫び、銃を手に持ったまま、男の元に走る。
「おお、助かったぞ」
肥満体の男が、ガマガエルのような声で話しかけてくるが無視。まず細身の男の様態を見る。出血は酷いが、急所は外れており、弾も貫通しているようなので、命に別状はないだろう。
「まだ息があるようだな」
ひとまず応急処置をしようと、上着の裾を破こうとしていると、うしろから肥満体の男が喋りだす。
「お前何をやっている。そいつは私が殺す」
そう言って、にやにやと汚い笑みを出しながら、男は銃を取り出した。

一章　造神３２

「……」
一瞬動きを止め、イザーナは男の持つ銃をじっと見つめた。
――なんで、こいつの命を助けないといけないんだ。
先程の思いが再び頭の中に浮かぶ。それと同時に体が動き出し、銃を持つ男の手首を掴む。男の驚愕した顔と同時に、自分の体をひねり、相手の腕ごと持ってきて、銃のフレームを掴み一気にひねり上げる。
「がっ！　き、貴様っ！」
手を離すと、肥満体の男は濁った目をこちらに向け、後退りした。今、銃はイザーナの手の内にあった。
「……こいつは殺すな。命を助けてやるんだから言うことを聞け」
そう言って、奪った銃を遠くに投げる。これで大丈夫だな、と息を吐く。と、同時――
銃声。
「！！」
イザーナは額に衝撃を受け、勢いのまま、後方――細身の男の上に倒れこんだ。
「馬鹿が。銃は二丁持っているんだよ」
そう言って、肥満体の男はげらげらと笑った。
「この私に偉そうなことをほざきおって。蛆虫が」
イザーナは男の言葉を聞きながら、額から流れる血を感じていた。
――マジで死なねぇな……。
改めて、自分が不死身だということを確認する。変な感覚だが、痛みを除けば、それほど悪い感じはしない。そして、体はそのまま、視線だけを動かし、肥満体の男を確認する。
――さて、こいつをどうしてやろうか。死なない程度に痛めつけるか……？

「さて、そっちの死に損ないも」
イザーナの目が動いていることには全く気付かずに、イザーナのうしろに倒れている細身の男に銃口を向ける。
――痛めつけるにしても、タイミングが大事だが……。
いつでも体を起こせるように、自分の腕と男の銃に意識を集中させる。その時――
「――――」
何かが、聞こえた。
「ん、何だ？」
肥満体の男にも聞こえたらしく、キョロキョロと辺りを見回す。
聞こえてくるのは――音だ。
それは、ゆっくりと流れ、自然の音にうまく溶け込み、曲となっていた。初めて聞く曲だが、どこか懐かしい感じもする。

一章　造神３３

「貴様、何をしている」
そう言う男の視線の先に、ゆっくりと顔を動かす。
そこにはツズファがいた。その手には、どこから取り出したのか、筒状の物があり、それを口元で横に構えていた。
「おい、貴様！　笛を吹くのをやめろ！」
その言葉で、それが東洋の古い笛ということを思い出した。
「おい！　やめろと言っているんだ！」
男が逆上し、銃をツズファに向ける。
「十六夜」
銃を向けられているというのに、まったく動じず、ツズファは静かな、落ち着き払った声で言った。
「あなたは好きではありませんか？」
「訳が分からんことをほざくな！　殺すぞ、貴様！」
その言葉に、ツズファは笑みを浮かべる。
「それは嫌ですね」
「貴様っ！」
ツズファの笑みを挑発と受け取ったのか、男の顔は赤く、まるで茹蛸のような顔になった。元が丸いからそっくりだ。
――チャンスだ。今なら奴を取り押さえられる。
腕に力を入れ、半身を起き上がらせる。
「イザーナ殿」
「あ？」
突然名前を呼ばれ、体の動きを止める。
「よく見ていなさい」
ツズファはそれだけ言うと、再び笛を口元に当て、音色を奏で始めた。
よく通る音が重なり合い、一人で奏でているとは思えない奇妙な

曲が鳴り響く。最初はなんとなく楽しい感じに聞こえるが、しばらく聞いていると、曲は全く変化が無いのに、何故か悲しく聞こえてくる。

「十六夜」

そう呟き、ゆっくりと笛を口から離す。

「意味はためらいです」

ツズファは深く息を吸う。途端、笛を強く吹き鳴らした。

「取り払ってあげましょう」

イザーナは一瞬、そのツズファの演奏に見とれていた。

一章　造神３４

耳の奥、さらに奥、脳が突き破られるような錯覚を覚えてしまうような――普通とは違う、狂った響き。麻薬のように甘美で、危険な音がいつまでも鳴り響く。

「――イザーナ殿」

再び名前を呼ばれ、はっと我に返ると、ツズファはすでに演奏を終え、こちらに顔を向けていた。

「見なさい」

ツズファは目の前の男をあごで示す。

「これが私の力」

そう言って、にいっと不気味な笑みを浮かべた。

「……」

そのツズファの笑みに、嫌な予感がした。

視線を肥満体の男へと動かす。いつの間にか、男は銃を下ろし、だらんと腕を伸ばしていた。何があったのか、と眉をひそめていると、突然男は銃を自分のこめかみへと持っていく。

「なっ！？」

男の動作に目を見開いたと同時に、男の指が曲がり、シリンダーが回転。

「さようなら」

銃声。

そして男は――そのまま地に伏せた。

さらに男が倒れた衝撃で引き金が引かれたのか、再び発砲音。その弾道はイザーナ背後に倒れている男の頭部へと流れていった。

「……」

イザーナは目を見開き、前後の倒れた男達を見る。二人の男の頭部からは血がじわじわと広がり始めていた。すでに息絶えているのは明白だ。

立ち上がり、男の死体から目をそらし、ツズファに視線を合わせる。
「……お前が」
やったのか？　と、呟きにも近い声で問う。
「そうです」
ツズファは不気味な笑みのまま答える。
「私が殺しました。私の導き手としての力で。正確には死ぬように仕向けた、ですが」
イザーナは体を起こすと、早足にツズファに近付き、襟を乱暴に掴んだ。
「……何故殺した？」
体が小刻みに震えている。この感情は怒りなのだろうか。
「それは――」
ツズファは表情を変えないまま、少し間を空け、言った。

一章　造神３５

「あなたの姿を見られるとまずいのですよ」
「姿……」
頬を伝った血があごからポタリと地面に吸い込まれる。
「……最後の禁止事項を教えておいたほうが良かったみたいですね」
そう言って、ツズファは笛をコートの中に仕舞う。
「最後の禁止事項。それは神を知りすぎた人間、教えすぎた神です。ちなみに処罰は神のほうが優先的に行われますから、ご注意を」
「……だからって」
さらに反論しようとするイザーナに、ツズファは冷たい視線を送る。
「何故殺してはいけなかったのですか？」
「何故――だと？」
ツズファの問いに、何かを答えようと口を開くが――何も言葉が出てこない。
「……ちゃんと分かっていますね。先程自分で言った言葉が」
――あいつは悪党なんだろ？　そんな奴をどうして助ける必要があるんだ？
「……」
「それなのにあなたは今、命の大切さ――ですかね？　それを語った。矛盾していますよ。大人なら自分の言葉に責任を持ってくださいよ。それだから――」
「俺は神になったと？」
イザーナは先に言葉を取り、ツズファを黙らせる。
「勝手に解釈をするな。お前は自分で言っただろ。こいつを助けるのが使命だと。それを聞いているんだ。何故救うべきこいつを殺した？」
「あぁ、彼は救うべき人間ではありませんよ」

「は？」
突然の言葉に、間の抜けた声を出す。
「ですから彼は救うべき人間ではないので、死んでも構いません」
「なっ、じゃあ、何で――」
「試したのです」
質問が出る前に、ツズファは答えた。
「あなたが例えこれから救いようのない輩を救うことがあっても、ちゃんと使命をまっとう出来るかどうかを。あなたの性格を考えると、少し心配でしたから」
「おい、じゃあ――」
「どうやって殺したか、ですか？　それとも、まだ何故殺したか、が知りたいのですか？」
「……両方だ」
イザーナは言葉を先に取られ、仕方なくぶっきらぼうに答える。

一章　造神３６

「分かりました。では、まずどうやって殺したか、を教えましょう」
ツズファは、ゴホン、と軽く咳払いをし、コートから先程の笛を取り出す。
「私の力はこの笛を使い、さまざまな力を持った音色をかもし出すことが出来ることです。その音色によっては、人を癒すことも出来ますし、未来を見ることも、人の記憶を奪うことも出来ます。あなたの記憶もこの笛の音で封じました。そして先程の曲は、十六夜といいまして、指定した人間一人を自由に操ることが出来る音色なのです」
「……それで奴を殺したのか？」
「ええ」
その問いに、ツズファはあっさりと答える。
「何故だ？」
「……あなたはあくまでそっちを聞きたいのですね。いいでしょう」
ツズファは一呼吸置いて、口を開く。
「一言で言えば、私は奴が気に入らなかったのですよ。あいつはたいした力も持っていないくせに、マフィアの権力を自分の権力と勘違いし、好き勝手に商売や金貸しを行っていたのです。気に入らない奴は女だろうが子供だろうが容赦ありません。最低最悪の屑ですよ」
女だろうが子供だろうが――その言葉にイザーナは眉をしかめた。
「まぁ、あいつは最近組織の金にも手を出していましたから、私が手を下さずとも、いずれ組織に消されていたでしょうが」
吐き捨てるようなツズファの言葉に、そうか、とイザーナは呟き、襟を掴んでいた手を離す。
「……そうか――だけですか？」
ツズファは僅かに眉をひそめ、問う。

「ん、何が？」
「いえ……」
ツズファは少し言いよどんでから、口を開いた。
「絶対そんなの理由になるか――とか言ってくると思っていましたから」
その言葉に、イザーナは軽く鼻で笑う。
「言えねえよ」
ツズファに背中を向け、ゆっくりと言葉を吐き出す。
「俺だって、同じような理由で――」
人を殺しちまったんだからな、と呟きに近い声で言った。
「そう――なのですか？」
「知らなかったのか？」
イザーナは意外そうな顔をして振り向く。

一章　造神３７

「あなたのことは簡単なプロフィールぐらいしか頭の中には入っていないので、神になった理由は知らないのですよ」
その言葉にイザーナは、そうか、と呟いた。
「知っていると思ってた」
「何故？」
「……別に」
イザーナは大きく息を吐いて、だがな、と言って、ツズファを睨みつける。
「次は許さねえからな」
「……承知しました」
ツズファは帽子を取り、それを胸元に持っていき、深く一礼する。そして、その帽子をイザーナの前に差し出した。
「傷が目立つでしょう。どうぞお使いください」
「……」
イザーナは黙ったままそれを受け取り、目深にかぶった。
「ところで……偶然か？」
「何のことです？」
イザーナは足元に倒れている細身の男をあごで示す。
「あぁ、その男のことですか」
ツズファは帽子の跡が付いた髪を弄りつつ答える。
「偶然ですよ。その男は適当に返すつもりでしたから」
「……」
ツズファの顔を見る。その顔からは、真偽は測れなかった。
「運の無い奴だな」
「悲しいものですね」
ツズファは不気味な笑みを浮かべる。
「帰りますか。使命までは、まだ余裕があります」

「……そうだな」
イザーナは血が固まり始めた額を、指で弄りつつ、細身の男に視線を向ける。
「……」
この男は何故あの男を殺そうとしたのか。どちらも死んだ今となってはどうでもいいことなのだろうか。
「スザーノに治療してもらいましょう」
ツズファはそう言って踵を返し、歩き始めた。
イザーナは、すまなかった、と小さく呟き、ツズファのあとを追った。

一章　造神３８

「あっ！」
ツズファと共に街道沿いに歩いていると、いきなりうしろから声が発せられた。何事か、と思い、二人同時に振り向く。
そこには一人の少女がいた。
「あ、あの……」
その少女は、彼らを交互に見つつ、しどろもどろに何かを呟くが、よく聞き取れない。
少女は男物のシャツとジーンズだけという、非常に寒そうな格好をしていた。肩まで伸ばした亜麻色の髪と、そこから覗く、燃えたぎるような赤い瞳が印象的だ。
その少女とは初対面のはずなのに、何故か初めて会った感じがしなかった。何か声を掛けるべきかと悩んでいると、突然、隣のツズファが目を見開き、大声を張り上げた。
「なっ、お前、アテラ！　こんなところで何をしているのですか！？」
「アテラ？」
聞き覚えのあるその名前に、イザーナは眉をひそめる。
「え、いや……その……買い物？」
「何が買い物ですか！」
ツズファの叫びに、少女はビクっと体をすくませる。
「これは遊びではないのです！　時間には集合するようにと言っておいたはずです！」
ツズファのすごい剣幕に、少女は何も言い返せないのか、何かをこらえるような顔で上目遣いにツズファを睨んでいる。
「なぁ、ツズファ。一ついいか？」

そう、イザーナは尋ねた。
「何ですか？　くだらない質問はしないで下さいよ」
ツズファがこちらに顔を向ける。珍しく怒っているようだ。
「こいつ誰だ？」
少女を指差して言った。その質問にツズファは一瞬考える仕草をしたあと、やれやれ、と言わんばかりに首を振る。
「そういえば、あの時、ちゃんと自己紹介をしたのは私とスザーノだけでしたね……」
無言で睨んでくる少女を横目に見つつ、ツズファは口を開く。
「彼女の名はアテラ。先程の話の中に出てきた三人目の導き手ですよ」
確かにツズファの長ったらしい説明の中にアテラの名が出ていた気がする。
「何で俺の導き手に女がいるんだ？」
ふと疑問に思ったことを口に出して言う。途端に、ツズファの眉が一気にひそめられた。

一章　造神３９

「……知っているでしょう？」
「知らないから聞いているんだよ」
その言葉に、ツズファは顔をアテラの方に再度向ける。
「まさか教えていないのですか？　アテラ」
アテラはいまだにツズファを睨んでいたが、しばらくすると、わずかにツズファから目をそらした。その様子にツズファは、全く、とため息を吐く。
「呆れて物も言えませんよ。これは使命であって、我らの存在意義でもあるのですよ？　それをあなたは――」
こちらの質問には答えずに、くどくどと説教が始まった。
イザーナも初めは傍観していたが、説教が長引くほどに、アテラの眼が涙目になってきたので、なんとなく可哀想になってきた。
「おい、その辺にしといてやれよ」
「甘やかしてはいけません」
ツズファは、こちらに冷たい視線を向けてくる。
「叱る時に叱る。これ大事です」
「やりすぎは良くねぇぞ」
「これぐらいやらないと駄目なのですよ、こいつは」
「てか、俺の質問の答えはどうなったんだよ」
今度はツズファとイザーナの口論が始まった。
アテラはツズファを見て、自分が意識の外に出たことを確認する。そして言い争う二人を交互に見比べたあと、こっそりとイザーナのうしろに隠れるように移動した。
「だからですね――って、何をやっているのですか、アテラ」
アテラは口を閉ざしたまま、イザーナの肩越しにツズファを睨む。そしてはっきりとした口調で言った。
「死ね」

「……いい度胸です」
ツズファは不気味な笑みを浮かべ、コートから笛を取り出し、口に当てる。
「……おい、ツズファ。何をやる気だ」
そう言いながら、ツズファの様子に嫌な予感がしたのでアテラから離れようとする。だが、アテラに服をしっかりと掴まれていて、動くに動けない。
――なっ、この女、俺を盾にするつもりか！？
「おい、ツズファ、落ち着け！　冷静になれ！」
イザーナの言葉にも、ツズファの笑みは変わらなかった。

一章　造神４０

「生意気な女は放っておくと、どんどん付け上がります。ここでビシッと躾とお仕置きを」
「変態、馬鹿、傲慢、マゾ」
盾を得たことで気が大きくなったのか、アテラはさらに暴言を吐き続ける。ツズファの笑みがますます不気味なものへと変貌していく。
「アテラ？　仕舞いには――」
「スケベ、キザ、童顔、ホモ」
ツズファは、ゆっくりと息を吐き、静かに言った。
「……三日月。この意味分かりますか？」
「……すみません、ごめんなさい、悪かったです」
ツズファの言葉と同時に、突然アテラはヘコヘコと謝りだした。
「……？」
突然の事態の収束にイザーナは眉をひそめた。
「おい、ツズファ。三日月って何だ？」
イザーナは訳が分からず、勝ち誇った顔をしたツズファに尋ねた。
「さぁ、何でしょう？」
ツズファはそう言って、いつもの不気味な笑みを浮かべ、笛をコートに仕舞った。
「……」
答えを得られないかと、うしろのアテラを見る。アテラは不満気にツズファを見ていたが、こちらの視線に気付くと、挙動不審に辺りを見回し、何か言いたげにこちらを見つめてきた。
――言うときはビシッと言うくせに、変なときは内気だな。
そう思いながら、こちらから口を開く。
「どうした？」
「……あの……」

ちらちらと横に目をやる。
その視線を辿ってみると、それなりに賑わっている飲食店が目に映った。入り口には『ラージムーン』と書かれた看板が飾られている。
「……腹減ったのか？」
その問いに、アテラはコクコクと頷いた。
「アテラ、説教はまだ終わってないのですよ」
腕を組んだツズファがそう言うと、アテラは少し考える仕草をしたあと、ツズファの目の前に勢いよく、人差し指を立てた右手を突き出した。
「ふむ、そうですね……」
新しい挑発かと思ったが、どうやら何かのメッセージだったらしい。

一章　造神４１

ツズファはその指を見て、次にアテラの顔、そしてイザーナの顔と視線を動かしていき、最後に大きく頷いた。
「いいでしょう。それでも別に構わないでしょう」
そう言って、不気味な笑みを浮かべた。
「……お前ら、頼むから第三者にも分かるコミュニケーションをとってくれ」
イザーナは呆れたようにため息を吐きながら、そう言った。
「ねぇ、おなかすいた」
イザーナの裾を引っ張り、アテラが催促してくる。その仕草に、イザーナは疲れたようなため息を吐くと、アテラは、さらに激しく引っ張ってきた。
「……分かった、分かった、なんか食わしてやるよ」
イザーナがそう言うと、アテラは、はにかみながらも、にっこりと微笑んだ。ツズファとは似ても似つかない、かわいい笑みだ。
「ツズファはどうする？」
顔を前に戻し、尋ねる。
「私ですか？」
ツズファはしばらくこちらを見て、考えた後、
「別に構いませんよ。傷もそんなに目立たないようですし」
相変わらずの不気味な笑みを浮かべて、言った。
「じゃあ、行くか。えっと、今どれくらい金あったかな、と」
上着のポケットから財布を取り出し、中身を確認しようとすると、
「あ、これ」
呟きのような声を出しながら、アテラは自分のジーンズのポケットから、くしゃくしゃに丸められた紙幣を取り出した。
「ん？　あぁ、構わねぇよ。奢ってやるから」
手を振って、口元に笑みを浮かべる。するとアテラは顔をうつむ

かせ、
「いえ、違……くて……」
しどろもどろに、こう言った。
「お金……返します」
「返――えっ！？」
アテラの言葉の意味を理解し、慌てて財布の中身を確認する。その中は――物の見事にすっからかんだった。
「……いくら使った？」
アテラの手から、金をむしり取り、残金を数える。

一章　造神４２

「一、十……って、五千しかねえじゃねえか！　最初、五万はあっただろ！　どこやった！？」
「これ」
アテラは、両手で抱えている、大きな袋を見せる。
「……何だ、それは？」
「ゲーム」
「はぁ！？」
意味が分からず、頓狂な声を出す。
「ゲームに四万五千も使ったのか、お前は！」
「家にあるやつ古いんだもん」
アテラは、悪びれた様子もなく、しれっと答える。
「それに兄貴が好きに使っていいって渡したから」
「……あぁ？」
首をぐるりと回し、ツズファを見る。
こちらの視線に気付いたツズファは、訳が分からない、とでも言うように首をかしげていた。いつもの笑みで。
「……」
最悪だ、と呟き、ため息を吐く。それと同時にむなしく腹が鳴った。思えば今朝から何も食べていない。
「イザーナ殿。いつまでうなだれているのですか。早く行きましょう」
顔を上げると、ツズファがあごで催促してきた。
「この野郎……」
「あなたもおなかがすいているでしょう？」
「勝手に推測するな」
「今朝から何も食べていないじゃないですか」
「俺はな――」

「ねぇー早くー」
二人の様子から、また言い争いが起こると思ったのか、アテラが二人の肩を掴み、揺さぶってきた。
「おなかすいたー」
「アテラ、はしたないですよ。そもそもこの原因を作ったのはアテラでしょうに」
「……兄貴でしょ」
「お前だろ」
「……」
イザーナとアテラ、二人に指摘され、ツズファは、やれやれ、と額に手をやる。
ツズファの様子に、二人は満足気に鼻を鳴らす。
「さて、いい感じにツズファを負かしたから、行くか」
「だね」
共通の敵を倒したことで、二人はすっかり意気投合していた。その二人の様子に、ツズファは苦笑を漏らすしかなかった。

二章　死神？

「たく、あの馬鹿は……」
彼女はそう悪態をつきながら、鏡の前で髪を櫛でといていた。
「こっちも忙しいところを来てあげたのに、記憶喪失したとか、ふざけすぎよ」
櫛を置き、ピンで留める。
「あぁ、もう忙しい……。あの馬鹿がもう少し出世したらねぇ……」
ブツブツと彼氏の悪口を言いながら、化粧を済ませる。
ふう、と一息。
鞄の中に財布や携帯電話などを詰め込んでいく。
鏡で再度容姿確認。
「さて、急がないと」
玄関で靴を履き、ドアノブに手を掛けた、その時――
「……」
彼女はぴたっと動きを止めた。そして、ゆっくりと深呼吸をし、彼女はその場で、いきなり振り向いた。
突然の行動。端から見れば、おかしな行動。しかしその場には彼女一人しかいないので、その行動の理由を問うものはいないはずだった。
「……」
彼女はゆっくりと部屋の中を見回す。何度も見た玄関からの部屋の風景。違和感は無い。しばらく見回したあと、ふぅ、と深呼吸をした。
「勘違いみたいね……誰かいるような気がしたんだけど」
安堵の声を漏らし、うしろ手にドアノブを掴もうと伸ばすと――
その手を誰かに握られた。

「っ！！」
ビクッと肩を震わせ咄嗟に振り返る。
視線を、自分の手を握っている手、腕、と上らせていく。
「……」
驚きで目が見開かれた。
玄関前――先程まで誰もいなかったはずのその場所に、そいつは静かに立っていた。
そいつの第一印象は黒だった――実際には全身を覆う黒のレインコートを着ているだけなのだが、フードを被っていて顔が良く見えず、まるでそこにぽっかり穴が開いてしまったかのように見えてしまう。
「……こんにちは」
とても低い声が発せられた。

二章　死神？

彼女はそいつの顔があるであろう、フードの穴の奥を凝視する。
「……あなたは誰……なの？」
そう言いつつ握られた手を振り解こうとするが、そいつは力が強く、離そうとしない。その間、そいつの頭が前後に動いた。何かを一人で頷いているのだろうか。
「……あなたは誰なの？」
再度尋ねる。
「答えなさい！」
恐怖からなのか、語尾の上がった声が無意識に吐き出されていた。
その言葉にそいつは、頷くのを止めた。
「あなたは不幸だ」
不快感を催す低い声が再び発せられた。
「神ではなく、あなたのほうを私は先に見つけてしまった」
そいつの肩が突然、全身を包む布地を持ち上げるほど大きくドクンと脈打った。
「私にとっては幸運なのでしょう。絶望と後悔しかない私にとっては……これ以上に無い幸運なのでしょう」
今度は彼女の手を握っているほうの腕が、ドクンと大きく脈打った。
「……！！」
彼女はそいつの異常さに肩を震わせ、再び手を振り解こうとするが、そいつの握る力はますます強くなっていった。
「っ！　あっ……ぐ……！」
握られている手に痛みが走り、苦しみの声が喉の奥から漏れる。
「本当に不幸です。あなたは本当に不幸です」
彼女の様子に動じず、変わらない調子のまま、そいつは喋り続ける。

「でも仕方が無いのですよ。あと少しなんです。あともう少しなんですから」
「――――っ！！」
パキッという軽い音と彼女の悲鳴が重なった。
「恨むべきは私ではない。神だ。こんな訳の分からない規則を作った神を恨むべきなんだ」
鈍い音が走り、彼女の手からは血が滴り始めていた。
「あぁっ！　てっ、手を、はな……してっ！」
彼女は必死に叫び、もう片方の手で、そいつの握る手を離そうとするが、そいつの力はさらに強くなる。
「私はただ救われたい。それだけなんだ……」
そいつはそう言うと、彼女の手を開放し、再び一人で頷き始めた。

二章　死神？

「う……うぅっ……」
彼女は震えながら自分の手――元の形を失い、ひしゃげてしまった手を見つめる。指はあらぬ方向へと曲げられ、突き出した骨が見える。その骨に突き破られた皮膚からは血が溢れ、手首を伝って肘まで流れ、そこから床に水滴を落としていた。
「ど、どうして……」
言葉尻に嗚咽が混じり、語尾が震えていた。
「どうして……こんな酷いことをするの……？」
彼女の問いに、そいつは首を左右に振りながら答えた。
「心配は要りません」
そいつの腹部がドクンと脈打つ。
「絶望しても、いつかは救われます」
そう言った途端、そいつの体中が不自然に膨らみ、それぞれの箇所がドクンドクンとバラバラに脈打ち始める。まるで沢山の生き物が一度に生まれたかのようだった。
「――――っ！！」
彼女は言葉にならない悲鳴をあげ、床を這って後ずさりをする。
その間にも、そいつの体は異常に膨れ上がっていく。
「い、嫌……。誰か、助けて……」
必死に懇願するが、この部屋にはその声を聞いてくれるものはいなかった。そして、とうとう背中が壁に行き当たった。それはもう逃げ場が無いことを示していた。
「来ないでぇ……」
玄関はもう、そいつの異常に膨れ上がった体で埋め尽くされ、黒く塗りつぶしたようになっていた。
その時、視界の端に一つの写真立てが映った。
玄関の異様な光景とは違う――いつも見ている写真立て。その写

真には彼女自身ともう一人、彼女の肩に手を置く男性の姿があった。
「あっ……うぅ……」
彼女の頬を涙が伝う。先程まで一緒にいた彼氏のことを思い出したのだ。
「さぁ、行っておいで……」
低い言葉と同時に、黒を覆う布から、いくつもの影が飛び出した。ものすごい速さで彼女に迫る。
だが彼女はその影には目もくれず、その写真を見つめていた。
いくつもの影が、一斉に彼女に飛び掛かる。
「イザーナ……」
途端に、視界が影で覆われた。

二章　死神？

「あまり高いのは頼むなよ」
メニュー――特に特大パフェとか書いてある箇所――を食い入るように見つめているアテラに、イザーナは言った。
「この店はそれなりにいい値段だからな」
「先程まで奢ってやるとか言っておきながら――ケチですね」
「文句があるなら、お前が払え」
「私が現金を持っていると思いで？」
ツズファは水をがぶ飲みしながら、こちらを挑戦的な眼で見据えてくる。
「貧乏を自慢するなよ」
「自慢ではなく――えっと……」
言葉を考えているようだ。アホか。
しばらくしてウェイトレスが注文を受けに訪れた。イザーナはアテラが口を開く前に、三人分の注文をした。
「――以上で宜しいですか？」
「宜しい。早く下がってくれ」
何かを言おうとするアテラの口を塞ぎながら、早々に立ち去らせた。
「……」
アテラが不満気のこもった視線を投げかけてくるが、受け流す。
「しつこいでしょうが――ケチですね」
「いい加減黙ってねえと、その胡散臭いツラめり込ますぞ」
「胡散臭い……あなた自分の顔ですよ？」
注ぎ足された水を一気に飲み干し、こちらをやれやれ、と言わんばかりの目で見据えてくる。

「あなたの元の肉体は、頭、上半身、下半身とそれぞれ三つに分けられているのは、説明しましたよね？」
「確かな」
「そして私が、あなたの頭を媒介とし、知性、理性などを持っているのも言いましたね」
「私も理性はある……」
アテラが抗議の声を上げるが、ツズファは無視して続ける。
「つまり……何が言いたいんだ？」
「あなた、とことん馬鹿ですね。つまり、私は頭を媒介としているので、顔の作りは、あなたとほとんど変わらないのですよ」
ツズファの言葉と同時に、イザーナの眉は一気にひそめられた。
「……嘘だろ」
「何ですか、その嫌そうな顔は」
ツズファの言葉を無視し、その顔をまじまじと見つめた。

二章　死神？

――そういえば部屋にあった写真に写っていた男――てか、俺――とそっくり……というか同じじゃねえか！

「……」

「腹が立ちますね、その眉をしかめた顔」

「あぁ、気持ち悪い。その顔で気障ったらしくため息を吐くな」

「失礼な」

「お前のその一つ一つの動作が俺に対しての、名誉毀損だ」

「あなたは……こ……」

ツズファは何かを発言しようと口を開く。だが言葉が出てこないようで、そのまま何かを考えるように唸るが、

「……お手洗いに、行ってまいります」

結局何も思いつかなかったらしく、憮然とした顔で、席を立った。

「お前も便所行くんだな」

「当たり前です。あなたも行くでしょうに」

何気ない一言を、少々腹立たしげに、返してきた。

「あぁ、そうかい」

適当に返し、見送る。

そして、まだ未練がましくメニューを見ているアテラに視線を送る。

「アテラ」

名を呼ぶ。

メニューから視線を外し、こちらに向けてくる。

「何？」

「ちょっと聞きたいことがあるんだが……」

そう前置きし、言葉を紡ぐ。

「えっと……俺は不死身なんだろ？」

アテラはコクンと頷く。

「それがどうしたの？」
「どういう原理なんだ？」
アテラは首を傾げる。
「……どういう意味？」
「つまり、どうして不死身なんだ、俺は」
「神だから」
「……」

二章　死神？

だからな、と前置きし、
「どういった原理――つーか、仕組み？　が働いている、って聞いてるんだ。こう、科学的にどうこう、みたいな。分かるか？」
アテラはコクンと頷く。
「分かる――けど」
アテラはしばらく考えた後、グラスの氷を取り出して言葉を発する。
「これは氷。分かる？」
「ん？」
突然の問い。
「それがどうしたんだ？」
「この氷は溶けるよね？」
特に答える言葉も見つからなかったので、とりあえず頷いておいた。
アテラはたどたどしい口調で言葉を紡ぐ。
「この氷が溶けるのは温度が上がって分子が離れるから。簡単に言えばこうだよね？　それじゃあ分子とは？　原子とは？　そう言って、どんどん細かくしていけば、目で見て手で触れるものは、どんなことも科学的に表せる。もちろん神も幽霊とは違って目で見て手で触れるから表せるらしいけど……」
「けど？」
「……無理なの。確かに表すことは出来るよ。でも神の体は細胞が死なない、それだけだから。何故死なないか。この世界の科学で表せるかもしれない。でも細胞が死なないのは神の特別な力が働いているからで……えっと、だから――」
アテラは言葉が思いつかないらしく、そのまま黙り込んでしまった。どうやら相当難しい質問だったらしい。

「……そういう物だと思うしかない、てか？」
イザーナがそう言うとアテラは、そう、と言って何度も頷いた。
「なんじゃそりゃ……」
「そういう、モノなの。兄貴は神になることを、神のシステム、もしくは――」
「神のプログラム、ってか？　アイツらしいな」
「あなたらしい」
「あ？」
眉をひそめ、何がだよ、と問う。
「自分で気付いてない？」
そう言って、アテラは小さく微笑む。
「あなたも兄貴も、一つの物事を無理矢理いろんな物に例えようとしてるってこと」
「……そうか？」
アテラの言葉に、イザーナは今までの自分の言動などを思い出そうと、考え込む。そんなイザーナの様子にアテラはクスクスと笑い始めた。

二章　死神？

「イザーナさん……ですよね？」
笑うアテラに眉をしかめていると、突然後方から、自分の名前が発せられた。
「だから先程から申しておりますが、違います。人違いです」
それと続いて、聞き覚えのある、別の声が聞こえてきた。この声は――ツズファだ。
「でも……」
「あなた意外と頑固ですね。私の名はツズファ。あなたの望む人物ではありません」
振り返ると、やや不機嫌な顔をしたツズファの前に、この店のウェイトレスらしき女性がいた。少し背の高めな女だった。
その二人のやり取りを眺めていると、ツズファと目が合った。
「あちらでしょう？　あなたの望む人物は」
ツズファは、こちらをあごで促す。それに反応し、ウェイトレスがこちらを振り向いた。
「あ……」
ウェイトレスが呟きにも近い声を漏らす。
「ん？」
目を細め、そのウェイトレスの顔を確認する。
「……お、覚えていますか……？　私――」
「ウーノ？」
その声を聞くと、そのウェイトレス――ウーノは目を大きく開き、満面の笑みで頷いた。すらりと長く伸びた手足と、長く透き通るような銀髪が印象的で、背の高さも合わさって、凄く目立つ容姿だ。
「覚えていてくれたんですね！　うれしいです！」
「知り合い？」
少し低い声でアテラが尋ねてくる。その少し怒りが混じった視線

は気にしないことにする。
「あぁ、彼女は、その……仕事で」
「あなた仕事していたのですね」
「うるせい！」
ツズファは軽口をたたきながら、席に座った。
「その節はお世話になりました」
ウーノはそう言って頭を下げる。
「あぁ、あれからはもう大丈夫なのか？」
「はい、おかげさまで」
ウーノは頭を上げ、視線をツズファのほうに移動させた。
「ところで、そちらの方々は？」
その問いに、イザーナは一瞬言葉を詰まらせる。まさか導き手とは言えない。

二章　死神？

助けを求めるように、ツズファに視線を送ると、それに答えるように、ツズファは不気味な笑みを浮かべた。顔はいけ好かないが、こちらの意思は伝わったようなので、よしとする。
「どうも初めまして。私はイザーナのいとこでありまして、名前は先程も述べましたが、ツズファと申します。そして――」
隣のアテラを指差し、
「コイツは私の妹のアテラと申します。ほら、アテラ、ご挨拶」
ツズファは兄貴ぶってアテラを促す。
「……アテラ……です」
人見知りが激しいのだろう。聞き取りづらい、ぼそぼそ声でアテラは答えた。
「そう、初めまして。ツズファさんとアテラちゃん」
「アテラさん……」
ウーノの言葉に、アテラが抗議の声を上げる。
「アテラちゃんのほうがかわいいわよ？」
「アテラさん」
「つまらないことに拘るのは、やめなさい、アテラ」
いつまで続くかと思ったが、ツズファがさっさと場を収めてしまった。さらにこちらに視線を向けてくる。
どうせ、ボケっと見て、私にこの場を収める役を押し付けるな、とか何とか言ってくるに違いない。
ここでイザーナも口を開き、アテラと何かを話しているウーノに、こう言った。
「ウーノ、仕事は？」
「え？　あぁ、いけない！　店長に怒られる！」
ウーノはそれだけ言うと、こちらに一礼し、店の奥に入っていった。

イザーナは、どうだ、と言わんばかりに、ツズファを見る。その視線に気付いたツズファは、
「何アホ面こちらに向けているのですか」
「……」
イザーナは苛立たしく息を吐いた。

二章　死神？

しばらくして注文した料理が運ばれてきた。
「なかなかの料理です。値段がいいだけはあります」
早速料理に手を付けているツズファに、何か言ってやろうかと口を開くと、タイミングよく、その口にパンが押し込まれた。
「ん……が？」
パンが口に押し込まれているため、くぐもった声しか出せなかった。
「あなたの行動パターンは分かり安すぎですよ」
目の前でツズファが必死に笑いを堪えている。
――この野郎。タイミングよくパンを押し込みやがったな。
「て……手前」
なんとかパンを飲み込み、それだけ発することが出来たが、さらに運ばれてきた料理に次の言葉を失った。
「ご注文の特大パフェでございます」
「ありがと」
アテラが軽く礼を言う。
イザーナは一瞬我が目を疑った。
その三十センチはあろうかという容器に、これでもかと言わんばかりに、詰め込まれた、フルーツや生クリーム。そしてその物体に、さも当然のようにスプーンでつついているアテラ。
「おい、コラ」
アテラの腕を、がしっと掴み、言う。
「いつ頼んだ？」
「さっき」
「どうやって？」
先程から一緒にいたのだ。頼むチャンスは無かったはず。

「ウーノさんに」
「ウーノ？」
記憶を巡らせる。
そういえば何か話していたような……。
「いいじゃないですか、これぐらい」
ツズファがパンをかじりながら、涼しげに言った。
「あのな……」
イザーナは何か言おうと口を開くと、再びタイミングよく口にパンが押し込まれた。今度はアテラだ。
「……」
――こいつら兄妹は……。
イザーナは、口を塞ぐパンを味わいながら、疲れたように、ため息を吐いた。

二章　死神？

料理も粗方片付き、イザーナはウェイトレスに食後の珈琲を注文した。
「どうもご馳走様でした」
ツズファは水を飲みながらそう言った。
「……さっきからお前、水の飲みすぎだろ」
イザーナの言葉に、ツズファは再び水の追加を注文しながら答えた。
「先程力を使いましたから、のどがカラカラなのですよ」
注ぎ足された水をまたも一気に飲み干し、ゆっくりと口を開く。
「私の力は笛を奏でるだけで人を殺すことも出来ますからね。その分デメリットもあるのです」
ウェイトレスが訪れ、珈琲が運ばれてきた。イザーナはそれに口をつけながら、ツズファの言葉に耳を傾ける。
「私の力のデメリットは、力を使えば使うほど、体の中の水分が消費されることです。まぁ、ミイラになるわけではありませんが、脱水症状で倒れることはあります」
「そのままくたばれば良かったのにな」
「すみませんでしたね。死ななくて」
こちらの軽口に、不気味な笑みで返してきた。
そうしてお互いに鼻を鳴らしていると、
「その珈琲美味しいでしょ？　私がいれたんですよ」
その言葉に振り向くと、私服姿のウーノが立っていた。
「ん、もう仕事終わり？」
「はい。今日は午前までなんで」
ウーノはそう言って、イザーナの隣に腰掛けた。そのウーノの行動に、ツズファは僅かに目を細め、口を開いた。

「ウーノさん、一つ宜しいですか？」
「はい？」
ツズファは一瞬イザーナを見て、問う。
「彼とはいつ知り合ったのですか？」
「え？　いつ――ですか？」
ツズファは黙って頷いた。
「えっと確か、去年の冬、でしたよね？」
イザーナに同意を求めるようにウーノは視線を向ける。
「あぁ、合ってる。去年の冬、君から通報があった」
「通報？」
眉をひそめるツズファに、ウーノが補足する。

二章　死神？

「ガレイドさんは警察官なんですよ。知らなかったんですか？」
ツズファがふんふんと、しきりに頷く。
「あぁ、なるほど。だから自殺――」
「えっ――」
「いえ、自生活がなっていません」
ツズファは、さすがにまずいと思ったらしく、慌てて言葉を取り繕った。
「……？」
首を傾げるウーノに、ツズファはさらに質問をする。
「で、二人はどういった、ご関係で？」
「えっ、関係……って言われても……」
「おい、ツズファ。お前さっきから何を聞いてんだ？」
イザーナの言葉に、ツズファは不気味な笑みを浮かべる。
「いいじゃないですか、別に。で、どういった関係で？」
「え、その……」
「関係は？」
「おい」
あまりにもしつこすぎるツズファの問いに、イザーナの声に怒気が混じる。
「何がしたいんだ、お前は」
「暇つぶしです」
イザーナは無言でツズファを睨む。ツズファも負けまいと、こちらを睨んでくる。そしてしばらくの間、お互いに無言のまま睨み合った。息が詰まる沈黙。それに最初に終止符を打ったのはウーノだった。
「す、すいません。私、用事を思い出したから帰りますね」
ウーノは引きつった笑みを浮かべながら、鞄を持ち、立ち上がる。

「あ、あぁ……」
イザーナは、苛立ちからか、呟きにも近い返事しか返せなかった。
「やれやれ」
ツズファはそう呟きながら、店から出て行くウーノのうしろ姿を見つつ、息を吐く。
「あれはわざとか？」
「何ですか？　そんなに睨まないで下さいよ」
ツズファは肩をすくめつつ、口元に軽く笑みを浮かべる。
それでも睨んでいると、観念したのか、笑みが微妙に変化した。失笑しているようだ。
「えぇ、そうです。まだ大事な話があるので、あの女は邪魔でした」
「それでも、あれは酷いだろ。あの子はな――」
「あなた」
「あ？」
ツズファが突然真面目な顔を作ったので、その後の言葉が出てこなかった。

二章　死神？

「何だ？」
語尾がやや上がる。ツズファはその顔のまま口を開く。
「何か特別な感情でも抱いているのですか？　あの女に」
「……なっ、俺は」
イザーナは拳を握り締め、何か言おうと口を開ける。だが、何も出てこず、数秒視線を彷徨わせた後、ゆっくりと息を吐きながら、口を閉じた。
結局何も言い返せず、認めるような形になったが、それに対してツズファも何も言わず腕を組んで沈黙を守っている。
「……」
アテラも食事の手が止まり、ウインドウ越しに外を見ている。
長い静寂。周りの声や音楽も風景として溶け込み、今この場の沈黙のみが、残っていた。
「俺は……」
何度経験しようと、慣れることは無いだろう。そう思いながら、沈黙を破る言葉を吐き出していく。
「確かに、あの子には、一種の特別な感情を抱いている」
ツズファは無表情にこちらを見ている。
「だが、恋愛感情なんかじゃない。この感情は別の――」
「娘」
突然の声。その声の発生源――アテラに顔を向ける。
相変わらず窓の外を向いていたが、こちらの視線に気付くと、横目で返してくる。
「それか妹、でしょ？」
その言葉に、イザーナは軽く口元に微笑を浮かべ、頷いた。
「あぁ――」
そんな感じだ、と言い、瞑目する。

「それまた何故？」
今度はツズファが問うてくる。
「……お前、この町がどんな町か、分かるだろ？」
「えぇ、救いようの無い町です」
「あぁ、そうだ」
遠慮のかけらも無い言葉に、頷く。そしてゆっくりと言葉を発する。
「実は俺は、警官になることが子供の頃からの夢だったんだ。警官は腐敗しきっていて意味が無いと友人に言われたが……それでも憧れたさ。こんな町だけど、俺は命をかけて、守りたいと思った」
「……それで、彼女は？」
「彼女――ウーノは、この町には似合わないほど、純粋な子なんだ」

二章　死神？

「……通報があった、と言っていましたが――」
あぁ、と相槌を打ち、言う。
「ストーカーだよ。それもかなり悪質な」
「ストーカー？　この町にしては珍しいですね」
その物言いに、軽く微笑む。
「そうだな。とにかく俺は通報を受け、彼女のアパートに向かったよ。そして部屋に入ったとき――」
それは酷い有様だったよ、とため息混じりに言う。
「家具はほとんどが盗まれたらしく、部屋はまさに、もぬけの殻って感じだった。その代わりなのか、部屋中に彼女の盗み撮った写真が貼ってあった。チョークのようなもので書き殴った、好きだ、愛している、といった文章と共にな」
この言葉に、アテラが眉根を寄せ、うわぁ、と小さく呟く。
「それで犯人は？」
「捕まえたよ。そのアパート近くの下水道の中で――死体でな」
ほう、とツズファが呟く。
「これまた意外な結末ですね」
「まあな。下水で死んでいるなんて誰も予想付かねえよ。ちなみに死因は薬物を使った自殺らしい」
「それでは時間が掛かったのですか？　解決までに」
その問いに、あぁ、と力無く返事をする。
「そしてその間、彼女の話を聞いたりしているうちに――」
「情が移ってしまったと？」
「……そうだな」
息を吐く。
「あとは言わなくても分かりますよ」
ツズファは、ふ、と軽く笑う。

その顔を見ると、相変わらず不気味な笑みだが、どこか柔らかくなった気がした。
「何だよ？」
「いえ、」
ツズファは再び軽く笑うと、言った。
「初めてじゃないですか？　ここまで自分のことを話したのは」
「あぁ？」
その言葉に眉根を寄せる。

二章　死神？

「何言ってんだ、手前は」
「恥ずかしがる必要はありませんよ？　お互いに分かり合ったような感じがしません？」
「しねえよ」
ぶっきらぼうにそう返すと、ツズファはクックック、と不気味な声を漏らす。
「あなたが自分のことを話してくれたのですから、私も大事な話をしましょう」
真っ直ぐにこちらを見据え、窓の外を指差す。
「あちらを御覧下さい」
言われるままに外を見る。三人組の見るからにガラの悪い連中が黒塗りの車に乗り込んでいるところだった。
「あれがどうしたんだ？」
顔を前に戻し、尋ねる。
「忘れましたか？」
ツズファは不気味な笑みをさらに不気味に歪ませ、ゆっくりと言った。
「あの連中」
「……あぁ」
「二十分後ぐらいですかね」
「……あぁ？」
「人を殺しますよ」
「……」
イザーナは再び窓の外に顔を向けた。
「早く止めませんと」
黒塗りの車はやたらに響くエンジン音を吹かせて、発進した。
「……て、手前っ！」

イザーナはそう叫ぶと、急いで店から飛び出していった。
「アテラ」
イザーナの背中を見送りながら、ツズファはアテラの名を呼ぶ。
「何？」
「日が照ってきたようですよ？」
ツズファの言葉に、アテラは窓の外から空を見る。曇り空の一部分から僅かに日の光が覗いていた。アテラはしばらくその光を眺めたあと、
「うん、行ってくる」
そう言って立ち上がり、店の出口へと歩いていく。
「ちゃんと説明するのですよ？」
「……分かってるよ」
ツズファの言葉に、アテラはぶっきらぼうに答え、外に出て行った。
「……さて」
一人になったツズファは、軽く息を吐き、窓の外に顔を向けた。
「頑張って下さいね、イザーナ殿。頑張って――私を恨んで下さいね」
ツズファはやや悲しげに目を細め、もう一度息を吐いた。

二章　死神？

「くそっ！」
イザーナはそう悪態付きながら、走り去る車に視線を送る。そして、タクシーか何かはないかと、辺りを見渡し始める。だが早々にそんな都合のいいものは現れなかった。
何か手はないかと、道路を行きかう車を交互に見やる。それらを数秒眺め、深く息を吐く――決意した。
「おい！　止まれ！」
イザーナはそう言うなり、拳銃を取り出し道路に飛び出した。
こちらに向かってくる一台のオープンカー。それに乗る若い運転手が驚いた顔をしている。
「止まれ！」
彼はもう一度叫んだ。拳銃を握り締め、それを運転手に向ける。
そして――
跳ね飛ばされた。
「がっ！」
腹部に衝撃が走ったと感じたとき、すでに勢いよく吹き飛ばされており、道路をごろごろと転がっていた。
「……」
体が止まり、道路に寝転がった状態でしばらく痛みに耐える。無意識に頭を撫でると、強く打ち付けたのか、手にべっとりと血が付いた。
「……痛」
そう呟き、なんとか体を起こそうと、うつぶせに転がる。
「一体何があったの？　事故？」
「さぁ？　でも男のほうから車道に飛び出したらしいよ」

周りから野次馬らしきものの声が聞こえてくる。
「それじゃあ自殺？」
「確かにあの男冴えない顔してるよね」
――余計なお世話だ。
体の節々が痛むが何とか体を起こし、立ち上がる。周りから、おお～まだ生きてたぞ、と声が聞こえてくる。
「くそ……」
――もっと早く教えてもらえば、楽に出来たってのに……。
イザーナは、この原因であるツズファのほうに無意識に顔を向ける。
その当人は、窓越しにこちらを指差して大笑いしていた。
――絶対あとで殺す！
顔をツズファから、律儀にその場に残っていた運転手に移動させる。
「おい」
そう話しかけると、その運転手はビクリと肩を震わせた。幽霊に遭遇したかのように顔が真っ青だ。

二章　死神？

「車を貸して欲しい」
「な、何言ってんだよ、アンタ」
「いいから貸せ」
イザーナは強引に運転手を降りさせ、車に乗り込む。
「おい、いい加減にしろよ！　跳ねちまったのは謝るからさ」
「治療費だ。こいつをその片に貰う」
「おい、何で借りるが貰うになっているんだよ！？　これ買ったばっかりなんだよ！」
「人の命が懸かっているんだ。協力しろ」
それだけ言って、アクセルを踏もうした瞬間、突然隣に誰かが乗り込んできた。
「私も連れてって」
隣に顔を向けると、仏頂面のアテラがシートに座り込んでいた。
「何やってんだ、お前？」
「……」
アテラは何も返さず、何を思ったのか、突然イザーナの足ごとアクセルを踏みつけた。
「おいっ！」
突然急発進した車に驚きつつ、素早くハンドルを切り、車と車の間を抜き去っていく。
「早くしないと見失う」
「もう少しやり方があるだろ！」
何とか車を安定させ、安堵の息を吐く。アテラの言葉は正論なのだが、さっきの行為のせいで、危うく事故を起こしかけた。
「……ごめんなさい、ちょっと焦ってた」
アテラは少し俯いて、言った。
「どうしても言いたいことがあったから」

「言いたいこと？」
イザーナはスピードを上げて、車を走らせる。すると先程の黒塗りの車が信号停止しているのが目に留まった。見失わずに済んだようだ。
「何だ？　言いたいことって」
ブレーキを踏み、車の列に並ぶ。
「……何で導き手に女がいるか、の答え」
「……あぁ、それか」
信号が青になり、今度はゆっくりと車を走らせる。
「何でだと思う？」
イザーナはちらりとアテラのほうに視線を向ける。アテラは顔を外に向けており、その表情は見えない。

二章　死神？

「分からないから聞いたんだろ」
「……そだね」
黒塗りの車とは付かず離れずの距離をうまく保ちながら、再びアテラに視線を送る。
「言いたくないなら別に言わなくてもいいぞ」
イザーナがそう言った途端、くるりとアテラは振り返り、その瞳をこちらにまっすぐに向けてきた。
「……？」
アテラの目を怪訝な顔で見返す。
「ねぇ」
アテラは無表情のまま、静かに口を開いた。
「私、かわいい？」
「……は？」
イザーナは表情を変えずに尋ねる。
「今、何て言ったんだ？」
「……だから」
アテラは頬を赤らめ、こちらを睨みながら、もう一度はっきりとした口調で言った。
「私、かわいい？」
「……」
イザーナはその質問にどう答えようか数秒迷い、最終的に一番簡単な答えを口にした。
「かわいいぞ」
イザーナの言葉を聞くと、アテラは驚いたように目を見開き、さらに顔を真っ赤にする。
「う、うん。ありがと……」
アテラは小さくそう言って、こちらから視線をそらした。

「……」

――何なんだ、この会話は……。

イザーナは顔を前に戻し、うんざりした表情を浮かべる。そして視線を前方の黒塗りの車に戻し、深く息を吐く。

――今は使命が優先だな。

そう考えながら、車のスピードを上げる。すると突然、首元に生暖かい何かが巻きついてきた。

「？」

それが何か確認しようと、視線を下げる。それと同時に、頬に何か柔らかいものが触れる。

「……」

眉をひそめ、顔をゆっくりと横に向けると、そこには微笑を浮かべたアテラの顔があった。いたずらを考え付いた子供のような目をしている。そこでやっと、アテラがイザーナの首に抱きついていると分かった。

二章　死神？

「……」
イザーナは無言のままアテラに視線を送る。
「私は――」
アテラは微笑を浮かべたまま、ゆっくりと口を開く。
「こうするためにあなたといるの」
アテラは右手をそっと動かし、イザーナの太ももに被せる。
「……どういう意味だ？」
自分のものの内側に指を這わせようとするアテラの手を払いのけ、尋ねる。
アテラは挑発的な目でこちらを見据え、ゆっくりと口を開く。
「神は性交を許されていない。今から何十年――もしかしたら何百年も生き続けなきゃいけないのに。それじゃあ辛いでしょ？」
イザーナは顔を、アテラから前方に戻し、運転に集中する。途端にアテラの手が伸び、顔を戻される。
「最後まで聞いて」
そう言うアテラの表情は真剣そのものだった。
「何を聞けって言うんだ。突然馬鹿みたいなこと言いやがって」
「馬鹿じゃない。これが私の存在理由なの！」
そう強く訴えるアテラの気迫に一瞬圧倒され、イザーナは返す言葉を失う。
「怖いの」
アテラは何かをこらえるようにぽつぽつと語る。
「私は……あなたに好意を抱いている。もちろんこれも――あなたの言うプログラム。神の欲望から生まれる導き手は、神を絶対に愛していなくてはならない。もし神が望んだなら……私は応じなければならない。それでも……どんな形にしろ、私は神を愛しているから構わない。でも、もし望めるなら――」

「愛していると言ってほしいか？」
イザーナの言葉に、アテラは口をつぐむ。
イザーナは顔を前に戻し、深々とため息を吐いた。
「……変かな、こんなこと言うの」
その言葉にイザーナは顔を前に向けたまま、静かに口を開いた。
「知らねぇよ。俺は哲学者でも論理学者でもないんだ。人を満足させられる言葉が言えるわけねぇだろ」
「……」
アテラは顔を俯かせる。
「ただ一言、お前に言えるとすれば――」
え、とアテラは顔を上げる。そこには、にやりと笑みを浮かべたイザーナの顔があった。
「男を誘うの、下手くそだな」
アテラはぽかんとした顔でイザーナを見やる。そして数秒の間を置いて――
「はぁ！？」
アテラは顔をしかめて、声を張り上げる。

二章　死神？

「何、下手くそって！？　わ、私がどれだけ恥ずかしい思いで打ち明けたか……」
　みるみる顔を真っ赤にして、アテラは次々に怒りを吐き出していく。
「だ、大体そういう知識は必要最低限しかないんだから、そんな、上手な誘い方なんて知っているわけないでしょ！」
その突然の変わりように、イザーナは口に手を当て、肩を揺らして笑う。
「くく、はははははっ！　お前ついに地が出たな。いいぜ、そっちのほうがずっとかわいいぞ」
「な、何言ってんの。いきなり……」
　かわいい、と言った途端、今までの勢いが嘘のように、急におとなしくなった。その様子にイザーナは目に涙を浮かべ、さらに笑う。
「……笑いすぎ」
　そう言ってアテラが上目遣いにこちらを睨んでくる。
「そう睨むなって。つまり俺が言いたいのはな――」
　アテラの頭にぽんと手を置き、小さい子供をあやすように撫でる。
「そんなに気張るなってことだ。存在理由なんか無くてもいいんだよ。全員が全員、やたらすごい使命やら生きがいやら持ってるわけじゃあねぇんだからさ」
　そう言ってアテラの頭をぽんぽんと叩き、手をハンドルに戻す。
「それに、いいじゃねぇか。一方通行が嫌だってことは、人間誰しも考えるさ。自分は導き手だから、なんて考えは捨てな。お前、今が楽しいか？」
　イザーナの質問に、アテラは数秒考えたあと、うん、と呟いた。
「ならそれでいい。それで十分。はい、この話はおしまい、と」
　その言葉にアテラはクスクスと笑った。

「うん。ありがと」
アテラの言葉にイザーナは微笑んだ。
「それにしてもあいつら、どこまで行くつもりだ？」
視線を前方の車に向け、軽く息を吐く。車内の時計を見ると、店を出たときから十五分が経過していた。周りを見ると、どうやら第四区画に近付いているようだ。
「これ以上奥に行くのは少しまずいな……」
どうしようか、と考えを巡らせていると、前方の車が突然スピードを緩め始めた。イザーナは尾行がばれないよう、そのまま横を走りぬけようと、車に近付いていく。
「おい」
その車の横に並んだとき、突然声を掛けられた。横に顔を向けると、開いた助手席の窓からサングラスをかけた男がこちらに笑みを向けていた。車は平行に並んで走っていく。
「何だ？」

二章　死神？

イザーナがそう尋ねると同時に、男の腕がこちらに伸びた。その手には――銃が握られていた。
「！」
イザーナがブレーキを踏むのと男が銃を撃つのは同時だった。けたたましいブレーキ音が鳴り響き、車内が激しく揺れる。
周りに車が無かったのが幸いだった。イザーナの運転する車は何かにぶつかることも無く、停車することが出来た。
「くそっ！」
車が止まると同時にイザーナは悪態付いた。
「……大丈夫？」
アテラに顔を向けると、その額から血を流していた。先程の衝撃でぶつけてしまったらしい。
「お前こそ大丈夫か？　血が出てるぞ」
そう言って、アテラの額に手を伸ばす、が――
「？」
伸ばした手は、むなしく空を切った。
イザーナが怪訝な顔をすると、アテラの顔が悲しげに歪む。
「どうしたんだ？」
そう尋ねると、アテラの手がイザーナの右の頬に触れる。視線を下げるがアテラの手は見えない。
「……目が」
その言葉でやっと、自分の右目が見えていないことに気付いた。先程の銃弾が右目に命中したらしい。
「くそ、あいつら……」
イザーナがそう舌打ちすると同時に――突然フロントガラスが砕け散った。とっさにアテラの頭を抱え、ガラスの破片から守る。
「おい、降りろ」

その声に視線を上げると、車の周りをガラの悪い三人組が取り囲んでいた。
「ラージムーンからずっと俺たちを尾行していただろ？」
どうやら尾行はばれていたらしい。アテラを抱えたまま、イザーナは車から降りる。
「俺たちに何か用か？」
ボンネットに座り込んだ男――こいつがフロントを叩き割ったようだ――が薄い笑みを貼り付けて聞いてくる。
「……あぁ、えっと」
イザーナはアテラを自分のうしろにやり、視線をさまよわせながら、必死に言葉を考える。

二章　死神２１

「なぁ、こんな奴ほっといて行こうぜ」
黒塗りの車の近くに立っていた男が口を開く。
「早くしないと逃げられちまう――」
「それだ！」
イザーナはその男を指差し、叫ぶ。男の逃げられる、という言葉を聞いて、この場で時間を稼げばこいつらを相手にしなくてもいい、という考えが浮かんだ。
だがイザーナの突然の言葉に、男達は怪訝な顔をしている。
「いや、その……俺はあんたたちに時間を教えてもらおうと思っていたんだ」
イザーナは愛想笑いを浮かべて、場を取り繕うとする。
「ちょっと道に迷って、それであんた達を追いかけて――」
「とぼけやがって。俺たちがやろうとしていることを知っているんだろ？　お前ら警察か？」
ボンネットに座っている男が睨んでくる。ここで変にごまかすと逆に怒りを買うかもしれないので、ここは正直に話しておいた。
「元警官だ。今は違う。だから見逃してくれ」
イザーナがそう言った途端、ボンネットに座っていた男が立ち上がり、イザーナの肩に手を置く。
「なるほど、元警官か。それで時間と場所が知りたいんだったな」
男は自分の腕時計を見やる。
「今は十二時三十二分だ。そしてここはオウングロウの第四区画。満足か？」
その言葉を聞いて、イザーナは息を吐く。
――あと六分……。
「それで？　他に頼みたいことはあるか？」
男は歪んだ笑みをこちらに近づけてくる。

「……そうだな、煙草を一本くれ」
愛想笑いを浮かべながらそう返すと、男の笑みが消えた。
「それとコーヒーもあると最高だな――」
「ふざけやがって」
その言葉と同時に、男の拳がイザーナの顔に打ち込まれた。ふざけすぎて怒りを買ったようだ。
男は格闘技をやっていたのか、その拳は重く、イザーナはなすすべもなくそのまま地面に倒れ、後頭部を思い切りぶつけてしまった。
「おい、これぐらいで気絶するなよ？」
男は視線をアテラに移動させ、仲間に、おい、と声を掛け、アテラをあごで示す。その指示に男二人は下卑た笑みを浮かべ、アテラを取り囲む。

二章　死神２２

「おい、何をする気だ！」
イザーナはそう叫んで立ち上がる。そして自分を殴った男に襲い掛かる。
「いいねぇ。まだ意識があった」
男は大きな笑みを浮かべ、ボクシングのようなファイティングポーズをとる。
イザーナは男との距離を近づけると、一瞬の間を置いて拳を放つ。その拳は簡単にかわされるが、姿勢を低くし、その勢いのまま相手の腹部目掛け、体当たりをする。背中に相手のひじが落とされ、一瞬息が詰まるが、ひるまずに相手の襟首を掴み、その顔を力一杯ぶん殴る。
「おい、どうした！　もう終わりか！？」
男の腹部に膝を叩き込み、前のめりになったところにひじを落とし、その場に跪かせる。これでも元警官なのだ。少しだが格闘技の心得はある。
「手前！」
アテラを取り囲んでいた男の一人が叫ぶ。イザーナは視線をそちらに向ける。と同時に――
轟音。
「……」
轟音と同時に、イザーナは無意識に腹部を押さえ、その場に跪いた。
「……あんた結構やるじゃねぇか」
視線を最初の男に戻すと、そいつは大型の銃を握り、こちらに向けていた。その銃口からは硝煙が立ち上っている。次に視線を自分の腹部へと持っていく。
シャツが血に染まっていた。自分の手でしっかりと押さえられて

いるが、血がとめどなく溢れてくる。
「手前がどこの組織の使い走りか知りたかったが……これじゃあもう助からないな」
男は銃を仕舞い、立ち上がる。
「急ごう。ちょっと遊びすぎた」
「女はどうします？　殺しますか？」
仲間の一人がそう尋ねると、男はアテラを一瞥し、次に視線をイザーナに持っていく。イザーナはうずくまった状態で男達を睨んでいた。男の顔に笑みが浮かぶ。
「そんな怖い顔で睨むなよ」
そう言って、煙草を取り出し、くわえる。
「安心しなよ。女はお前の分まで楽しんでやるからよ。早く楽になっちまえよ」
火を付け、煙を吐く。イザーナは歯を食いしばり、男を睨む。
男はイザーナに背を向け、自分の車のほうへ歩き始めた。二人の男がアテラの腕を掴んでその後に続く。どういう訳か、アテラは何の抵抗も見せず、空をボーっと眺めながら、男たちにされるがままになっている。
――くそったれ、逃がすか！

二章　死神２３

男たちの姿が車に遮られて見えなくなると、イザーナは銃を取り出し、車の陰に移動する。傷の出血は酷いが意識は寸前のところで何とか保たれている。

顔を車体に押し付け、慎重に覗き見る。男たちは車に乗り込もうと、ドアを開けている。イザーナは銃を持つ手をゆっくりと持ち上げ、狙いをタイヤに合わせる。

その時、不意にアテラが振り向いた。立ち止まり、こちらに顔を向け、首を左右に振る。

「……？」

その行動の意味をはかりかね、アテラの目を見返す。男の一人が、突然立ち止まったアテラに眉をひそめ、その腕を強く引っ張る。途端――

男の腕が吹き飛んだ。

「！！」

イザーナは目を見開いた。今、目の前で何の前触れもなく男の腕が根元から切断されたのだ。

男は自分の身に何が起きたのか理解できず、呆然とした表情をしていた。だが、やがてその表情が徐々に強張っていき、口からうめき声のような悲鳴を上げる。

「おい、どうした？」

先に車に乗り込んでいた仲間が窓から男の様子を伺う。そして男の腕があるべき場所に無いのを目撃すると、顔を強張らせ、車から降りる。

「おい、誰にやられた！？」

仲間の言葉に、腕を失った男は顔をそちらに向け、何か言葉を発

しようと震える口を開く。
「酷いな……なんてこった」
リーダー格の男がそう呟きながら、地面に転がる腕を見て、視線を男の顔に戻すと――何故か男の顔が無かった。
「……」
ゴトッという音に視線を下げると、そこには先程言葉を発するのを待っていた男の顔があった。
「……なんてこった」
リーダー格の男は再びそう呟くと、素早く振り向き、背後のアテラの襟首を乱暴に掴む。
「おい、女ぁ。お前の仕業か？」
銃を取り出し、その銃口でアテラのあごを持ち上げる。
「おい、死体を車に積んで、先に行ってろ。俺はこの女を殺して――」
男はそう言いながら、肩越しに振り返ると――男の言葉は最後まで出てこなかった。
男の背後にある腕と首を失った仲間の死体。その上に覆いかぶさるようにもう一つ、首を失った死体が転がっていた。足元を見ると、言葉を投げかけた仲間の首がこちらを見上げていた。

二章　死神２４

その表情は恐怖に歪んでいた。
「女ぁぁぁぁ！！　何しやがった！？」
男はそう叫ぶと、アテラに銃底を叩きつけようと腕を振り上げる。
その時、突然何かが蒸発するような音が鳴り、腕に痛みが走る。
「……ぐっ！」
男はうめき声を上げ、振り上げた状態の腕を見やる。
視線で腕を辿っていくと――手首から先が途切れていた。
「あ、あぁぁ……」
腕をゆっくりと下げ、自分の前まで持っていく。手首の傷口は所々が黒くこげ、肉が焼ける臭いを発していた。視線を下げると、銃を持った手が地面に転がっている。
視線をアテラに戻す。アテラは男を見ずに、空を見ていた。雲の隙間から日が照っている。
「良かった。雲に隠れなくて」
そう言ってアテラは――にっこりと微笑んだ。その姿は光に照らされ、一種の神々しさを感じさせた。
「……お前、まさか……悪魔――死神か……？」
男の言葉は少し震えていた。アテラは首をゆっくりと左右に振り、
「違う。神様」
とだけ言った。その子供のような物言いに男はふっと微笑んだ。
「なるほどねぇ……。天罰が落ちたって訳だ」
「うん。そう」
アテラがそう言って頷くと、再び何かが蒸発するような音が鳴り響き――男の首は宙を舞った。
「……」
イザーナは顔を強張らせ、アテラを見ていた。アテラは口を閉ざしたままこちらに近付いてくる。その顔は無表情だ。

「おい、アテ――がっ！」
イザーナがアテラの名前を呼ぶと同時に、腹部に激痛が走った。顔をしかめ、視線を下げると、傷口が焼けただれ、嫌な臭いを発していた。
「ちょっと強すぎた？」
アテラがそう言って、イザーナの前にかがみこむ。
「でも血は止まったでしょ？　立てる？」
イザーナは質問には答えず、顔をアテラに向ける。
「……さっきのは……導き手の力か？」
その質問にアテラは軽く頷く。

二章　死神２５

「どういう力なんだ？」
アテラは顔を上げ、空を見る。
「日の光」
イザーナも、つられて空を見る。
「私の力は、日の光で――何でも焼くことが出来ること」
アテラは顔をイザーナに向ける。
「傷を焼くことも出来るし、人を焼き切ることも出来る。相手が日陰にいると出来ないけど、少しでも日に当たっていれば――そこから切断できる。好きなように、徹底的に」
淡々と語るアテラ。イザーナは先程にっこりと微笑んでいたアテラの顔を思い出していた。
「……えげつない――恐ろしい力だな」
イザーナが自虐的な笑みを浮かべると、アテラは小さく微笑んだ。
「それが――あなたの欲望」
イザーナは車に寄りかかり、息を吐く。血を失いすぎたせいか、突然強い眠気に襲われた。アテラの言葉がとても遠くに聞こえる。
「普段はおとなしくて内気なんだけど、時折背筋が凍るほどの残虐性を見せる。まるで……獣」
イザーナは体の欲求に従い目を閉じる。
「さすがに殺す気は無かったけど……仕方が無いよね。これが簡単で確実だし。あなたも酷いケガしちゃったし」
イザーナは顔を伏せ、完全に意識を失っていた。アテラはイザーナの顔を覗き込み、その頬にそっと手を触れる。
「気を失っちゃった……？　お疲れ様。これからも頑張ってね」
そう言って、軽く頬に口付けをした。

二章　死神２６

ゆっくりと目を開ける。
天井でぐるぐるとファンが回っている。どうやら自分の部屋らしい。
「起きた？」
「ん」
声のするほうに顔を向ける。
そこにはアテラがいた。こちらに背を向け、何かを一生懸命やっている。
「何やってんだ？」
「ゲーム」
相変わらずの単語だけの返答。どうやら部屋にあった一昔前のゲームをやっているようだ。
「ラスボス」
「ん？」
体を前に乗り出し、テレビ画面を見てみる。画面では十人程の勇者が一人の魔王を囲んで遠慮無しに攻撃していた。正義って卑怯だな。
「クリア」
あっという間に魔王を倒し、エンディングが流れる。
「次」
ソフトを取り出し、別のソフトを入れる。
「あれ、そんなソフトあったか？」
「買った」
「……」
呆れと共にため息が漏れる。

「一緒にやる？」
こちらを振り向き、そう尋ねてきた。
「二人用じゃないだろ」
「一緒に謎解き」
「一人でやれ」
「楽しいよ」
「……」
しつこく誘ってくるアテラに、しばらく迷った後、
「それじゃあこいつをやろう。これなら二人で出来る」
そう言いながら、棚から格闘ゲームのソフトを取り出す。なんだかんだ言ってゲームは好きなのだ。
「……それ嫌い」
「まずはやってみろ。文句はそれから言え」
ソフトをゲーム機にセットし、ゲーム開始。テレビ画面でキャラクター同士が戦いを始める。

二章　死神２７

「上手いもんじゃないか」
アテラはコントローラーを見ながらだが、的確にキャラを操作していく。
「……疲れる」
「頑張れ、頑張れ」
アテラの初々しい動きに微笑みつつ、アテラのキャラに容赦なく技を決めていく。その結果――
「俺の勝ちだな」
数秒でアテラが操作していたキャラは地に伏せていた。
「……」
アテラはぶすっとした顔で、コントローラーを放り投げる。
「おもしろくない」
そう言って、その場に寝転んだ。
「ふて寝か？」
「違う。疲れた」
「そうかい」
こちらに背を向け、寝転がるアテラに苦笑を漏らしつつ、ゲームをリセットし、今度は一人で始める。
「懐かしいな。ゲームをするのは」
「いい大人が」
「うるせい」
軽口を適当に返す。
「そういえば、ツズファの野郎はどこ行ったんだ？」
「ん、兄貴？」
コロンと転がり、こちらに顔を向ける。
「たしかスザーノと一緒に買い物行くとか言ってたけど」
「スザーノって、あの薄汚い奴のことか」

この部屋を出る前に会った、ホームレスのような男の顔を思い出す。
「うん。その汚いの」
「あの汚いのか」
「誰が汚いのだよ！」
突然大きな声に割り込まれた。その方向に顔を向けると、玄関に薄汚い男が立っていた。
「汚い」
「うるせい！　汚くて悪かったな！」
軽口のつもりが本気で怒ったようだ。しかし大して怖くはなく、子供が必死に大声で自己主張しているようにしか見えなかった。

二章　死神２８

「これスザーノ、静かになさい。ここは集合住宅なのですよ」
そのうしろから、胡散臭い面をしたツズファが姿を現す。手には買い物袋を提げている。
「だってよぉ、兄貴。こいつ身体再生してやったのに、俺のこと汚いなんて抜かしやがるんだぞ！　恩知らずにも程がある！」
身体再生と聞いて、イザーナは自分の体を確認する。あの男に撃たれた目も、アテラに焼かれた腹部の傷も、完璧に元通りになっていた。スザーノの能力はやはり不思議でならない。
「我慢なさい、それぐらい。大体私からも言わせてもらいますが、確かにあなた汚いです。一緒に並んでいると、私にまで軽蔑の視線が――」
ツズファは、そこで言葉を切り、スザーノを見る。
スザーノは顔を真っ赤にし、体を震わせていた。今にも泣き出しそうだ。
「うあああああああああああ！　兄貴の馬鹿ああああああああああああああああ！」
泣いた。
そのまま部屋に上がりこみ、涙を撒き散らしながら、アテラに飛び掛かる。
「姉貴ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
アテラは一瞬眉をしかめ、体を起こすと、飛び掛かってくるスザーノに綺麗なアッパーをかます。
「がふっ！」
見事にあごに決まり、スザーノはその場で仰け反り、倒れた。
「……」
そして動かなくなった。
「静かになりましたね。よかった、よかった」

ツズファは例の不気味な笑みを浮かべつつ、部屋に上がる。
「お前酷いな……」
「何がです？」
ツズファは不気味な笑みのまま、何を言っているのか分からない、とでも言うように首を傾げる。
「いい年をして、ゲームなんかやっているニートに言われたくないですねぇ」
「誰がニートだ、手前」
そう返しつつも、なんだかばつが悪くなったのでゲームの電源を切り、部屋の隅に放る。
「ところで身体はもう大丈夫ですか？」
「お前でも一丁前に人の心配が出来るんだな」
「今後の使命の心配です」
「あぁ、そうかい」
ふう、と息を吐く。
「ところで次の使命はいつだ？」
立ち上がり、ツズファの肩に手を置く。

二章　死神２９

「先に教えとけよ」
置いた手に力を込め、ゆっくりとそう言った。
「分かっていますよ。私は導き手なのですから、サポートはしっかりとやるつもりですよ？」
ツズファは、クックック、と不気味な声を漏らす。
「……兄貴顔怖いよ」
「アテラ、そういうことは本人の前で言わないように。私だって傷つきますよ」
「お前のせいで俺は文字通り傷ついたんだけどなぁ……」
「気のせいでしょう」
「……」
イザーナは呆れたように息を吐き、玄関のほうへ足を運ぶ。
「おや、どちらへ？」
ドアノブに手を掛け、肩越しに返す。
「どこでもいいだろ。ちょっと行きたいところがあるんだ」
そう言う彼にツズファは言葉を投げかける。
「夕方までには帰ってきてくださいね」
「使命か？」
「夕飯です」
「知るか」
適当に返し、廊下に出る。
「イザーナ殿」
名前を呼ばれ、振り返る。
「何だ？」
ツズファは玄関近くの電話を指差して、言った。
「何かありましたらお電話を。すぐに駆けつけましょう」
「何かって何だよ」

「教えられません」
「……」
「聞き返さなくなりましたね」
「やかましい」
鼻を鳴らし、そう吐き捨てる。
「おみやげよろしくね」
アテラの声を無視し、ドアを閉める。
壁の『煙草を吸う人間は有害物質と変わりません』と書かれたポスターに顔をしかめつつ、階段を下りていく。

二章　死神３０

アパートの古いドアを開き、外に出ると、湿ったアスファルトの臭いが鼻についた。
「雨は……大丈夫だろう」
空を眺めながら、煙草を口にくわえ、火をつける。
「ガレイドさん？」
隣の人の声を聞き流し、ふぅ、と煙を吐き、車の行きかう道路を眺める。そして先程発せられた言葉を頭の中で反芻する。
「……ガレイド？」
そう呟き、そこでやっと自分の姓だと思い出し、慌てて振り返った。
アパートの入り口。そこには少し背の高い綺麗な女性がいた。イザーナは彼女を知っている。
「ウーノじゃないか。どうしたんだ？」
その言葉に、彼女――ウーノは、うっすらと微笑んだ。
「いえ、ちょっとガレイドさんに用がありまして」
「ガレイドさんは止せって。他の奴と同じようにイザーナでいい。友人の似非哲学者が付けた変なあだ名もあるしな」
そうなんですか、と彼女は柔和な笑みを浮かべた。
「……それと、あの時はすまなかったな。あいつ――ツズファが変なこと聞いちまって」
いえ、とウーノは首を軽く振る。
「大事な話をしていたみたいですし――勝手に私が話に割り込んでしまったんですから、私のほうに非がありますよ」
すまなかった、とイザーナはもう一度謝った。
「ところで用事って何？」
話の本筋を戻し、そう尋ねる。ウーノは、えっと、と呟きながら、持っていた鞄の中から、紙切れを二枚取り出した。よく見ると、表

面に今人気の映画のタイトルが印刷されていた。どうやら映画のチケットのようだ。
「その……もし良かったら、今から一緒に見にいきませんか？」
そう言って、上目遣いにこちらを見てくる。その視線にイザーナは、喉の奥で軽いうめき声を漏らす。
――この映画は確か……。
イザーナは目の前の映画に関する記憶を、手繰り寄せる。
この映画はどこにでもある恋愛ストーリーだ。確か警察官と娼婦の恋愛がテーマだったはず。
「いや、悪いけど……」
もう見た。恋人と。と続けることが出来ず、語尾を濁した。
しかし、それだけでも十分にウーノには通じたようだった。
「あ、はい。分かりました……」
ウーノはそれだけ言うと、チケットを鞄に仕舞う。

二章　死神３１

「こういったものは苦手ですか？」
残念そうに肩を落とし、ウーノはそう尋ねた。
「え、まぁ、嫌いではないけど、苦手ではあるね」
咄嗟に口から言葉が発せられる。
「なんていうか、こういった作品は感情移入が出来るからこそ、面白い作品だからさ。俺はもうそんな年じゃないっていうか、合わないっていうか……」
「……ようするに嫌いなんですね」
「まぁ……そうなるね」
最後は結局認める形になってしまった。
ちょうどその時、タクシーの姿が目に映ったので、左手で拾う。
「悪いね、また今度」
ウーノは、まだ何か用事があるような顔をしていたが、これ以上話しても余計に気まずくなりそうだったので、早々にここから立ち去ることにした。
イザーナはタクシーに乗り込み、運転手に行き場所を告げる。そしてドアを閉め、窓越しに手を振った。ウーノも寂しそうな顔をして手を振り返してくれた。
イザーナの乗ったタクシーは、渋滞にも遭わず、比較的スムーズに進んだ。そして第一区画に差し掛かったところで、先程のウーノの寂しげな顔が浮かんだ。
――悪いことしたかな……。今度俺のほうから誘ってみるか。
流れる景色を見ながら、イザーナはそう思った。

二章　死神３２

「……」
姿が見えなくなっても、ウーノは、まだタクシーが走り去った方向を見つめていた。そしてしばらく経ったあと、おもむろにチケットを取り出すと――それをまとめて破り始めた。
「……ちっ」
ウーノは小さく舌打ちをして、ただの紙くずとなったチケットを放る。
「何でなんだろう……」
今度は鞄の中から一枚の写真を取り出す。そこには今よりは少し若いイザーナの姿が写っていた。
「私の何が悪いわけ？」
ウーノは目を細め、その写真を自分の口元に持っていく。
そして――ベロリと嘗めた。
「ふ、ふふ……」
ウーノは小さく笑い、もう一度――ゆっくりと味合うように写真を嘗め回していく。両手で写真を押さえ、あたかも恋人との接吻を楽しむかのように、ゆっくりと。
「はぁ……うん……」
口から漏れた唾液が首筋を通っていく感触に、性的興奮を覚えたのか、頬が上気し、息遣いが粗くなる。
「んんっ！　あ、ん……」
「すみませんがお取り込み中でしょうか？」
背後からの突然の声。
だがウーノは慌てるでもなく、ゆっくりと行為を中断し、ベトベトの写真をそのまま鞄に仕舞い、振り返った。

「何か用？」
その振り返った先には、やや引きつった笑みを浮かべた男が立っていた。見覚えのある顔に、ウーノは目を細める。
「……あなた確か、ツズファさんでしたよね？」
「はい。私がツズファさんです」
イザーナと顔が似ていたので、すぐに分かった。目の前の男は、彼と喫茶店に来ていた奴だ。
「で、何か用？」
「確かに用件はありますが……」
ツズファは必死に自然な笑みを作ろうとしているが、やはりぎこちない不気味な笑みにしかならなかった。
「先程見てしまったものは、私の記憶から消したほうが良いのでしょうか？」
先程、というのは彼女が写真を嘗め回していたことだろう。その質問に彼女は柔和な笑みを浮かべ、答える。

二章　死神３３

「別に構わないわ。言わなければいいだけでしょう？」
「それもそうですね」
「特にある人には――言わなくても分かるわよね」
彼女の笑みは変わらないが、その目はいつの間にか危険な光を帯びていた。
「私も自分では自分のことを馬鹿だとは思っていないので、ご安心ください。しかし――」
あごに手をやり、その視線が彼女を品定めするかのように上下に動く。
「その視線。セクハラって言うんじゃない？」
その言葉に、ツズファは、ククッ、と笑い声を上げる。
「いくらあなたが美人の部類に入るとはいえ、アレを見たあとには、さすがにそんな気は起こりませんよ。それにしても、恋は女を化けさせる、とはよく言いますが……」
化けるにも程がありますね、とツズファは言った。
ウーノは、ふふ、と笑い、
「表立って純粋無垢とか言うのは、男の勝手な妄想。女はそんな簡単なものじゃないわ」
馬鹿な男なんかよりはずっとね、と彼女は再び笑う。
「ふむ。それでもあなたはあの冴えない男が好きなのでしょう？」
「好き――じゃない」
彼女の笑みが大きくなる。
「愛しているのよ」
「ほぅ……」
そう感嘆の声を漏らしつつ、ツズファは右手をコートの内ポケットに入れる。
「一つ言ってもいいでしょうか？」

ツズファは、コートの中の物を感触で確かめ、質問する。
「あなたは単純な恋心のつもりでしょう。しかし強い執着は、時に人を獣に変えることがあります」
ウーノは、ふふっと笑う。
「そんな回りくどい言い方しないで、はっきり言いなさいよ。今のあんたはストーカーと変わらないって」
ツズファも笑みを強める。
「いえいえ。あなたはまだ大丈夫です。ギリギリですけどね」
「……あなた性格悪いわね」
「その言葉、私にとっての最高の褒め言葉です」
そしてお互いに、声を漏らして笑う。
「まぁ、あなたは大丈夫だと私は思っていますよ。一度被害に遭われたのでしょう？」
「ストーカーのこと？」

二章　死神３４

ツズファが頷くと、ウーノは突然顔を大きく歪め、ついには声を張り上げて笑いだした。
「ふふふふ、あはははははははは！　最高ね！」
そう言って、さらに笑う。
「本当にどこまで馬鹿なのかしら、男って！」
「……どういうことですか？」
眉をひそめ、そう尋ねる。
「まさか作り話、とでも言うのですか？」
「違うわ！」
大きな笑みを貼り付けたまま、ウーノは答える。
「私はストーカーに付け狙われている、と警察に通報したのは本当。それで彼が来て、世話になったのも本当。嘘なんかじゃないわ」
「……死体が見つかったというのは？」
「本当よ。汚らしい格好で下水に浮かんでいたわ。でもね、その死体はストーカーなんかじゃない」
両手を左右に広げ――まるで教祖のように、高らかに叫んだ。
「私が愛していた男よ！」
「……ストーカーだったのは、あなたのほうなのですね」
ツズファは目を細め、ウーノを見据える。
「救いようのない人ですね」
「救いようのないのは、あの男のほうよ！」
目を見開き、言葉を吐き出していく。
「私は……彼を誰よりも愛していたの。知り合ったときに感じたわ。この人は私の運命の人だって。だから私は彼に自分をアピールしたの。メールや写真をたくさん送ったわ。なのに……あの男は私にな

んて言ったと思う？　気持ち悪いからやめろって言ったのよ！　この私に向かって、気持ち悪いと！　許せなかったわ。だから――」
ウーノはそこで口を閉じた。その顔からは笑みが消えていた。
「……それであなたは死体を下水に捨て、現場を作ったわけですね」
ツズファは左手をあごに持っていき、ふむ、と唸る。
「そういえば、この町の警官はずさんな捜査ばかりで信用がないと聞きましたからねぇ。あなたが作った現場も気付かれなかったのでしょうね」
「正解よ、ツズファさん。まぁ、用心として担当の奴に賄賂払ったんだけどね」
ツズファは再び唸り、ウーノに顔を向けたまま、沈黙する。

二章　死神３５

ふぅ、と息を吐き、ウーノは髪をかきあげる。
「ところでツズファさん」
ツズファは返事を返さず、視線だけを送る。ウーノは静かに、ゆっくりと口を開いた。
「そのコートの中に隠してる物――どうしてさっきから私に向けているの？」
「……」
ツズファはまたも返事をせず、視線だけを彼女に送り続ける。
そのツズファの様子に、ウーノは呆れたようなため息を吐き、その場に手を上げる。タイヤと地面が擦れる音と共に、彼女の隣にタクシーが停車した。
「怖い人ね。顔は彼にそっくりなのに。もったいない」
それだけ言うと、彼女はタクシーに乗り込み、その場を去っていった。
「……」
彼女が去ってからも、ツズファはそのままの姿勢で立ち尽くしていた。そして目を瞑り、呼吸を整える。
「……怖い……ですか……」
呟きの声と同時に、右手を引き抜く。その手には――イザーナの銃が握られていた。
「そうなのかもしれませんね。私は――怖いのでしょうね」
自嘲気味な笑みを漏らし、銃をコートに仕舞う。
「最低最悪ですね。私は今ここで彼女を殺すべきだったのでしょう。そうすれば、あのようなことをせずに済んだのに。なんとも――言えませんね」
クックック、と肩を揺らし、顔を上げる。
「雨が降りそうですね」

その顔は笑みを浮かべていたが、彼の拳は硬く握り締められていた。何かを堪えるように。
「神……とはなんとも……」
帽子を深く被り、顔を俯かせる。
「胸糞悪いですね」

二章　死神３６

「くそったれ、雨降ってきやがった」
タクシーから降りて数分歩いていると、突然の豪雨に見舞われてしまった。あまりにも酷いので、近くの店で雨止みを待つことにした。イザーナはコンビニの入り口で、缶コーヒーを飲みつつ、ぶつぶつと悪態をついていた。
今、彼はオウングロウから鉄橋を渡った本国、ヨヅモにいる。その理由は、恋人に会うためだ。今朝は喧嘩別れみたいなことになってしまったから謝ろう。そう彼は思っていた。
だが突然の豪雨で足止めされるとは思わなかった。
「くそったれ。俺に行くな、とでも言いたいのか」
飲み終えた缶をゴミ箱に投げ捨て、ふぅ、とため息を吐く。
「……止みそうにないな」
空を見上げ、再びため息。
「……仕方がない、走るか」
舌打ちをしつつ――しかし恋人に早く会いたいと願う自分に呆れつつ、彼は走り出した。恋人の住むマンションへ。

十分程経過したとき、目当ての建物が目に映った。七階建てのマンションだ。
「あぁ、ちくしょう。びしょ濡れ」
イザーナは急いでマンションに入り、上着を軽く絞った。
「すっかり体が冷えちまった」
濡れた前髪を上げ、マンションのドアを開け、中に入る。そして入り口近くのエレベーターに乗り込んだ。
「確か三階だったな」

そう呟きながら、ボタンを押す。もうすべて思い出せる。彼女の名前も。
「驚くか、呆れるか。まぁどっちでもいいか」
独り言を呟きながらエレベーターから降りて、廊下を歩いていく。
そして目当ての部屋の前に到着した。
目を瞑り、深呼吸をする。気持ちが急いている。そんな自分の様子に、呆れたように笑みがこぼれる。
そして――ゆっくりドアをノックした。
「……」
しばらくして、もう一度ドアを叩く。しかし返事はなかった。

二章　死神３７

「……留守か？」
――もう仕事は終わっていると思うが……。
そう考えながら、ドアノブに手を置いて、捻る。きいっと金属の擦れ合う音が響き、ドアはゆっくりと開いた。
「……無用心だな」
そう呟きながら、開いたドアから部屋の様子を伺う。そろそろ暗くなる頃合いだというのに、部屋には電気が点いておらず、薄暗い。そして――嫌な臭いがする。
「……誰もいないのか？」
部屋の奥に向かって、言葉を投げかける。それにも返事は無く、部屋の中は静かだった。
「……」
無意識に視線を下げる。玄関先、そこには大きな黒いシミが出来上がっていた。こんなものは記憶に無い。
「……何なんだ？」
イザーナは部屋の中に入り、ドアを閉める。そして部屋の奥へと足を進める。
「……ミナ」
恋人の名前を呟きながら、リビングのほうへ向かう。
すごく静かだ。外の雨音も聞こえない。嫌な予感がする……。
「……」
リビングに通じる扉を開け、とりあえず電灯のスイッチに手を伸ばす。
「……点けないで」
「っ！！」

突然発せられた声に肩をビクッと震わせる。
「誰かいるのか！？」
薄暗い部屋の中を見回す。すると、その中に一箇所、黒く浮かび上がったような部分があった。
そこに視線を固定し、息を整えていく。
「ミナ……か？」
それは身動きする。よく見ると、それは黒いレインコートのようなものだった。
「ミナなのか？」
その黒い物体に一歩近付く。それと同時にそいつが叫んだ。
「来ないで！」
そいつはブルブルと震え、部屋の奥に逃げていく。

二章　死神３８

「おい、ミナだろ？　何やってんだ？」
逃げるミナを追う。
「いやぁ、来ないで！」
ミナは必死に声を張り上げる。しかし狭い部屋の中、あっという間にミナは部屋の隅に、追い詰められた。
「……どうしたってんだ、俺だぞ？」
彼女は部屋の壁際で、肩を揺らしていた。泣いているようだった。
「……何があったんだ？　大丈夫か？」
彼女の肩に手を伸ばす。
「触らないで！」
触れた手を払いのけ、彼女はこちらに体を向ける。フードを被っているため、顔は良く見えない。
「もう終わりよ、何もかも！　何で私がこんな目に遭うの！？　何が仕方ないよ！　何が不幸よ！」
頭を振り、叫ぶ。

「何が神よっ！」

「なっ！！」
イザーナは目を見開き、彼女の肩を揺さぶった。
「おい、神だと。一体誰がそんなことを言ったんだ！　一体何があったんだ！？」
肩に置いた手に無意識に力がこもる。気のせいか、肩がいつもより細く、冷たく感じた。
「何があったんだ！？」
ミナはその場にへたり込み、声を上げて泣き出した。
イザーナは、さらに追及の声を上げようとしたが、そのミナの姿

に何も言葉が出てこず、ただ静かに見つめていた。
しばしの沈黙。やがて、落ち着いたのか、ミナはぽつぽつと喋り始めた。
「信じてもらえないかもしれないけど……あれは……死神、だった……」
「死神……？」
フードが前後に動いた。おそらく頷いたのだろう。
「……その死神は……私を処罰に来たって……言ってた……」
――処罰。
イザーナの脳裏に、ツズファの言葉が浮かんだ。
――そんな彼らを処罰するシステムがあります。
「禁止事項……」
彼は額に手をやり、必死に思い出す。あの時、ツズファは何と言ったか……。

二章　死神３９

――不要な殺人。使命放棄、ミス。神を知りすぎた人間、教えすぎた神。導き手殺害。そして――

「……その死神は……言ったわ」

ミナはフードの奥の顔をこちらに向け、言った。

「神との性交がお前の罪だと」

「……」

彼女はゆっくりと立ち上がる。そして白い手をフードに掛ける。

その突然の行動に、イザーナの中に無意識に恐怖が芽生えた。

「……イザーナ、私はあなたを信じているわ……」

彼女はゆっくりと近付いてくる。

「嘘……よね？　これは全部いつもの冗談なんでしょう……？」

イザーナはゆっくりと後退し、背が壁に触れる。口がわなわなと震えている。

「イザーナ……答えて……神とか罰とか、全部くだらない冗談なんだと……」

呼吸が速くなり、足が震えだす。何も言葉が思いつかない。

「ねぇ、イザーナ」

彼の目の前に彼女がいる。こちらに向けているフードの奥は暗くて見えない。

「嘘なんでしょう？」

フードに掛けられた手に力がこもる。

「この姿も全部嘘なんでしょう！？」

彼女は一気にフードをめくった。

フードを握る彼女の白い手。そしてフードの中から彼女の顔が出てきた。綺麗な亜麻色の髪がその顔を覆っている。その下に浮かぶ

白い肌。剥き出しの歯とこちらを見つめる赤い目。
――違う。
髪についた黒い汚れ。鼻につく異臭。髪の隙間から覗く、ぎらぎらとした赤い光。剥き出しの歯――笑っているのか――違う。
――あるはずの唇が無い。
「……あぁ……」
白い手。白すぎる。それは――皮膚を失った――骨を剥き出しにした手だ。
白い顔。所々が赤黒い。歯の奥の赤い肉――舌だ。粘着質な液体で濡れている。頬が――鋭利なもので削ぎ落とされたような傷跡を残している。
ぐるんと何かが動いた。
朱肉に囲まれた丸い物。隣に空洞が開いている。本来二つであろうその物体は必死にこちらに焦点を向けている。
彼女の――目だ。
「イザーナ……」
歯が上下に動き、その奥の舌がうごめく。
「これは――嘘なんでしょう？」
彼女の手がイザーナの肩に伸びる。
「……ねぇ」
舌が動き、彼の名を呼ぶ。
「イザーナ」
そして彼は――
悲鳴を上げた。

三章　導神？

人が倒れていた。
壁にもたれかかるようにして、腹部を押さえていた。血が染み付いているから、そこをケガしたのだろう。
俺は、そいつに話しかけた。そいつはこちらを見て、軽く笑った。それにつられて俺も笑った。
何を話したかは、よく覚えていないが、多分普通の世間話だったろう。
しばらくすると、そいつが煙草を吸ってみたいと言いだした。俺は意外そうな顔をして、煙草を取り出した。手が使えない、と言うので、くわえさせ、火を付けてやった。
途端に、そいつはむせて、煙草を吐き捨てた。
俺は笑った。そいつも笑った。
「くそまずいな。こんなものよく吸えるぜ、イザナギ」
そいつはそう言うなり、目を閉じた。
それから俺が何を話しかけても、反応は返ってこなかった。

三章　導神？

「今日の天気は最悪ですねぇ」
壁にもたれかかり、濃い雲が広がる空を眺めて、そう呟く。
「だよなぁ。こんなジメジメしてるときに外に出るもんじゃあないぜ」
それに賛同する別の声。
「まぁ、文句を言っても始まりません。気長に待ちましょう、スザーノ」
「待つって言ってもさぁ、兄貴……。何で待たなきゃいけないかが、分からないからイライラすんだよぉ」
仰々しくため息を吐き、スザーノはくどくどと文句を垂れる。
今、ツズファとスザーノの二人は、アパートから少し離れた雑貨店の入り口に立っていた。入り口の左右を陣取っているため、店の主人はさぞ迷惑な顔をしているだろう。
「大体何だ、あのイザーナって野郎。どこまでも自分勝手に振舞いやがって。俺は、ああいった奴が一番嫌いなんだよ」
「……まぁ、確かにあの性格は難有りですねぇ。その所為か、私も無意識に嫌がらせしてしまうんですよねぇ」
「……それは兄貴の性格があいつと同じぐらい悪いからだよ」
「……あなたも言いますね」
ツズファは笑みを引きつらせ、目を細める。
「あぁ、暇だ。兄貴、煙草吸ってもいいか？」
スザーノはそう言うなり、ポケットから小さい透明な袋を取り出した。その中身は土だ。スザーノはその中に指を突っ込み、土を適量掴んで持ち上げた。すると、持ち上げられた土がスザーノの指を中心に、徐々に一本の煙草へと変化していった。

「……あなた、もう少し周りを見て力を使いなさい」
「いいじゃねぇか、これぐらい」
スザーノはそれを口にくわえ、土が入った袋をポケットに仕舞った。
「なぁ、兄貴。火ぃ持ってない？」
「はい？」
スザーノの質問にツズファは頓狂な声を上げた。
「何を言っているのですか？　自分で作ればいいでしょう？」
そのツズファの言葉に、スザーノは眉をひそめて言った。
「あれ、兄貴知らねぇの？」
「……何がですか？」
ツズファの問いに、スザーノは下卑た笑みを浮かべて、口を開いた。

三章　導神？

「俺は土があれば銃も作れるし、大砲も作れるし、もしかしたら核弾頭も作れるかもしれない。そして、どんな傷だって足りない分を作って、つなぎ合わせることも出来る。だけどな、兄貴。そんな無敵の俺でも作れないものがあるんだぜ」

「そうなのですか……？」

スザーノは大きく頷いた。

「おうよ。それの一つが火だ。前に試したから分かるんだ。他には水とか、空気とか。とにかく、形がしっかりとしていない物は作れないんだ、俺は」

「……それ初めて聞きましたよ？」

「おう。だって言ってないもん」

「……」

スザーノの言葉に、ツズファは呆れたように息を吐いた。

「あなたねぇ……。アテラもそうですが、もう少し導き手としての自覚というか……覚悟というか……」

「あぁ、もう兄貴の説教は聞き飽きたよ！　今度からはちゃんと教えるからさぁ。見逃してくれよ！」

そのスザーノの態度に、ツズファは再び呆れたように息を吐いた。そこでふと、それならライターを作ればいいのでは？　と思ったが、煙草を吸われると気分が悪いのでそのまま黙っておくことにした。

「……まぁ、仕方がありません。今回は許しましょう」

ツズファの言葉を聞くと、スザーノは満面の笑みでガッツポーズを取った。

「今はとにかく待ちなさい。もうすぐ来ますから」

ツズファは、やれやれ、といった感じでそう言った。その言葉にスザーノは態度を一変。一気に気の抜けたような顔でツズファを見る。

「……だから俺達は何を待ってるんだ？　もう一時間は経つぞ」
　そのスザーノの言葉にツズファは何も返さず、車道に目を向ける。行きかう車を一つ一つ目で追っていく。そんな彼に突然スザーノが肩を揺さぶってきた。
「おい、兄貴！　とうとう雨が降ってきたぞ！　今、俺に落ちてきたから間違いない！」
　そう言って、さらに揺さぶりを強める。
「酷くなる前に帰ろうぜ、兄貴！　俺は濡れるのは好きだが、風邪をひくのは嫌いだ！」
「雨は最初に馬鹿の上に降ってくる、という話は本当だったのですねぇ」
「誰が馬鹿だ！　俺は敏感なんだよ！」
　なおも耳元で大声を張り上げるスザーノに、ツズファは眉をしかめつつ、地面に目をやる。確かにぽつぽつと歩道が濡れている。

三章　導神？

その時、一台の車が車道に乗り上げ、停車した。赤の軽自動車だ。運転手が車から降り、二人が入り口を陣取る雑貨店の中へ入っていった。車の鍵を付けたまま。

「ビンゴです、スザーノ。お待たせしました。行きましょう」

そう言って、ツズファは肩を揺さぶるスザーノの頭を軽く小突き、そのまま車へと乗り込んだ。

「ほら、早く乗りなさい。運転手が帰ってきますよ」

「……」

スザーノはその行動を見て、呟いた。

「……泥棒するために待ってたのかよ」

「泥棒とは失礼な」

ツズファは、いつもの不気味な笑みを浮かべた。

「ちょっと借りるだけですよ」

「ふぅ、今日は散々な日だった……」

男はそう呟きながら、自動ドアを超える。少し顔が俯き気味だ。

「人をはねちまうは、そいつに買ったばっかりの車取られて、しかもフロント割られるわ。警察に呼ばれるわ……最低最悪の日だった」

軽く自嘲気味な笑みを漏らす。

「まぁ、これだけ悪いこと起きたら、もう起きないだろう。車は修理すればいいんだ」

そう言って顔を上げると同時に――

目の前の自分の車が発進した。

「……」
男は先程まで車があった空間を見つめていた。そしてしばらくして小さな声で一言、こう呟いた。
「……俺が何したって言うんだよ」
雨はますます強くなっていった。

三章　導神？

気付いたとき、イザーナは走り出していた。階段を駆け抜け、マンションの外に飛び出す。雨は強くなっていた。

大粒の雨が体を包み込み、厚いジャケットが重みを帯びる。それでも休むことなく息を切らし、走り続ける。道路を横断し、近道の路地に逃げ込む。ゴミの臭いが漂う道を走りぬけ、右手に見えてきたドアに入り込む。飲食店の裏口だった。驚いた顔をしている店員が何か言ってきたが、無視して入り口から外へ出る。するとヨヅモとオウングロウを結ぶ、鉄橋の入り口が見えた。

そこで彼は振り返り、店内を見渡す。そして追跡者の影を探す。

「……まいたか？」

激しく脈打つ心臓の音を抑えようと、左胸に手をやる。視線はいまだ店内を見ている。店内には、こちらを不思議そうに見ている店員や客の姿しかなかった。

「……大丈夫みたいだな」

大きく息を吐き、安堵の表情を浮かべる。

その時――突然誰かに肩を叩かれた。

ビクッと体を震わせる。

「……あなた大丈夫？」

振り返ると、そこにはビニール傘を差した中年の女性がいた。買い物帰りなのか、フルーツなどが入った袋を抱えている。

「……え、何が……？」

突然のことで気が動転してしまい、思うように返事が出来なかった。

「何が、じゃありませんよ。こんな強い雨の中、傘も差さずに立ち往生なんてして。風邪引きますよ」

その言葉を聞いて、彼は息を吐き、心を落ち着かせた。どうやら、ただのおせっかいなおばさんのようだ。
「最近、この辺り冷え込んでいるんだから。若いからって無理しちゃだめよ」
彼は口元に微笑を浮かべ、そうですね、と相槌を打ち、顔を上げ――

目が合った。

中年の女性とではない。そのうしろ、女性の肩にしがみついている物。
イザーナは顔を引きつらせ、あとずさりする。その行動を女性は不思議そうに見ていた。自分の肩にしがみついている物は見えていないらしい。
「どうしたんですか？　顔色が悪いですよ」
イザーナはもう女性のほうは見ていなかった。その肩にしがみつく黒い影から目をそらすことが出来なかった。心臓が再び高鳴り始める。額に脂汗が浮かび、それが風を受け、体がブルッと震える。彼はゆっくりと、視線をそらさず、路地のほうまで足を運んでいく。そして踵を返し――一目散に駆け出した。
「ギャァァァァァァァァァァァァァガァァァァァァァァァァァッ！！」
背後から人の声とは思えない叫びが発せられた。

三章　導神？

「まずいですね……」
ツズファはそう呟いて、車を車道に乗り上げさせる。
「ん、兄貴、事故った？」
ラジオの音楽に合わせ、大声で歌っていたスザーノが呑気な声を漏らす。
「……あなた今の声が聞こえなかったのですか？」
ツズファの質問に、スザーノは数秒考え、
「何も聞こえなかったぞ。大体俺は兄貴みたいに耳良くないし」
自信気にそう答えた。
ツズファは呆れたようにため息を吐き、フロントの先を指差した。
「スザーノ、この先に公衆電話がありますから家に電話をし、アテラに迎えに来てもらいなさい」
その言葉に、スザーノは顔を強張らせる。
「何だよ、いきなり！　俺が足手まといだとでも言うのかよ！」
「言うことを聞きなさい」
スザーノはビクッと肩を震わせた。こちらに顔を向けたツズファの顔が、いつものふざけた調子ではなく、全くの無表情だったからだ。スザーノは、彼がこんな顔をするのはマジなときだと知っている。
「……分かったよ、兄貴」
スザーノはふてくされたように呟き、車から降りた。
雨の中を走っていく弟の姿を見届け、車のアクセルを踏む。
「……スザーノ、分かってください」
小さくそう呟きながら、車を走らせる。
しばらく進むと信号が赤を示したので、停車する。

そこでふと足元に目をやると、煙草の箱が落ちていた。この車の持ち主のものであろう。どうしようか、と考えながら、それを拾い上げる。信号はまだ赤だ。
しばらくそれを眺め、なんとなく箱から一本取り出し口にくわえてみた。ついでに車内を物色するがライターは出てこなかった。
ツズファは自嘲気味な笑みを浮かべて息を吐き、煙を吐く振りをする。
「これは私が蒔いた種ですからね。私が身を持って彼を助けなければいけないのです」
信号が青に変わった。煙草を灰皿に放り込み、ツズファは車を走らせた。

三章　導神？

イザーナはうしろを振り返ることなく逃げ続けた。とにかくがむしゃらに走り続けた。

「くそ……やばい。あいつが……来る」

荒い息を吐き、辺りを見渡す。視線の先に一つの洋服店が移った。とにかく身を隠そうと、その店に入り込んだ。

「畜生……」

何度も同じ言葉を呟き、入り口近くに身を隠す。店内に目をやると、客と店員が突然の闖入者を訝しげに見ていた。イザーナは近くに掛けてある洋服に目をやり、ここがどこか理解した。そこは――婦人服売り場だった。

「……」

イザーナは、こちらに視線を送る女性たちに軽く愛想笑いを浮かべた。予想通り、皆一斉に目を背けた。ただ一人を除いて。

「どうしたんですか、ガレイドさん？」

イザーナは聞きなれた声に目を丸くし、彼女の名前を呼ぶ。

「ウーノ……何でここにいるんだ？」

その言葉に彼女――ウーノは怪訝な顔をした。よく考えれば場違いなのは自分のほうだ。

「ガレイドさんこそ、何でここにいるんですか？　自分で……着るために来たわけじゃないですよね？」

その言葉に客の何人かがこちらを伺いつつ、苦笑を浮かべていた。

「……俺はそんな趣味無いから」

こちらも苦笑を浮かべつつ、そう返す。すると――

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「っ！！」

イザーナは振り返り、車道に目を凝らす。そこには豪雨の中、奇声を上げながら車道をゆっくりと這って近付いてくる黒い物体があった。
「……畜生」
イザーナは、そう悪態付くと、踵を返した。
「あの、どうしたんですか？」
ウーノが、こちらの袖を掴んで、尋ねてくる。
彼女を見て、振り放そうか一瞬迷う。そして小さく悪態付くと、無言のまま、彼女の手を握り、一緒に走り出していた。
「あ、ちょっ、どうしたんですか！？」
彼女の言葉を無視し、店の奥まで行くと、裏口を勢いよく開け放つ。そしてそのまま外には出ずに、近くの物置部屋の中に二人で隠れた。

三章　導神？

「あ、あの、これって……？」
さらに言葉を紡ごうとする彼女の口を左手で覆う。目を丸くし、体を強張らせる彼女に、耳元で一言、追われているんだ、と呟いた。その言葉で彼女も少し落ち着いてきた。
「アァ……」
息を呑み、物置の入り口に視線を固定する。口を閉じ、必死に鼻で呼吸をする。廊下を歩いているのか、ぴちゃぴちゃと液体質の音がする。
「……」
恐怖のためか、無意識にウーノを強く抱きしめていた。まるでぬいぐるみに必死にしがみつく子供のように。
「アァァァァァァ……」
液体質の音は目の前の扉の前を通っていく。そして、そのまま迷うことなく、裏口から気配は出ていった。
「……」
気配が消えてからも、しばらく息を潜めていた。どれぐらい時間が経ったか、呼吸も落ち着いてきた頃、イザーナは、やっと自分が彼女を強く抱きしめていることに気が付いた。自分の首元に彼女が顔をうずめているその状態に、急に羞恥心が込み上げてきた。
「あっと……その、すまん……」
彼女の両肩に手を置き、ゆっくりと引き離す。暗くてよく見えないが、ウーノは、うっすらと微笑んでいた。
「すまないな、こんなところに連れ込んじまって。もう大丈夫だから――」
続きの言葉は彼女の唇で塞がれた。
「……！」
イザーナはしばし呆然とした。ウーノが彼の首に腕を回し、口付

けをしていたからだ。
「イザーナさん……」
ゆっくりと唇を離しながら、ウーノは微笑んだ。
「追われているんでしょ？　それなら私の家に来ませんか？　すぐ近くなんです。服もこんなにびしょ濡れだし、風邪引いちゃいますよ？」
濡れた服のせいなのか、言われた途端、体に寒気が走る。
「匿ってあげますよ？」
彼のすぐ目の前の彼女の顔。若い男ならすぐに惚れてしまいそうな理知的な顔。それが妖艶な笑みを浮かべ、彼の前にある。彼女はこんなにも綺麗だっただろうか。
今度はさらに強く抱きしめてくる。服の上から伝わる彼女の温もりがとても心地よかった。恐怖が過ぎ去った直後の安心感から、感覚が麻痺しているのか。彼女の突然の行動に何の疑問も持てないまま、ただその心地よさに身を任せている自分がいた。
「……あ、あぁ、ありがとう」
イザーナはウーノの耳元で小さく呟いた。そして今度はこちらから、口付けを交わした。
その時、彼女の口元に浮かんだ笑みは、先程の笑みと違い、少し歪んでいた。

三章　導神？

ウーノに案内され、着いたのはホテルの一室だった。
「家って言っていたからマンションか何かと思っていたけど――ホテルだったとはね」
ウーノは微笑を浮かべ、ドアを閉める。
「三年ぐらいここに住んでるんですよ。だから私には家みたいに感じてしまうんです」
「そう、か……」
今のウーノの言葉に、何か引っかかるものがあり、振り返る。ウーノは微笑を浮かべたままイザーナのシャツのボタンに手を伸ばす。
「ほら、早く脱がないと風邪引いちゃいますよ？」
ボタンを一つ一つ外しつつ、イザーナを押して奥へと追いやっていく。
「ウーノ……？」
彼女の名前を呼ぶが、何も返ってこず、されるがままあとずさり、背後のベッドに腰掛ける形になった。そしてボタンが全て外され、前がはだけた状態となった。
「たくましい体……」
ウーノは胸、腹部へと指を這わせ、イザーナの前に膝をついて、座った。
「……なぁ、ウーノ。電話を貸してくれないか？」
自分の体を這う手を掴む。
「どこに掛けるの？」
ウーノは掴んできた手を逆に掴み返し、自分の胸へと持っていく。
「俺、の――」
掌に伝わる感触に頭が麻痺し、最後まで言葉が出てこなかった。

「イザーナ……」
彼女の顔が近付き、再び口付け。
「愛しているわ……」
心臓が激しく音を立てた。
「……」
イザーナはもう何も答えず、彼女の服を捲り上げる。唇を首に這わせ、手を回し、ブラを外す。露になった白い胸を両手で優しく揉み上げ、ベッドのほうに押し倒す。右手で胸を弄りつつ、スカートの中に左手を入れていく。
「あ、イ、イザーナ……」
ウーノの声に、さらに欲望を掻き立てられ、体を重ねようとした時――
――イザーナ……。
「……！」
突然、昔の光景が脳裏に浮かんだ。イザーナは思わず手の動きを止める。

三章　導神？

――本当、なんであんたなんか好きになっちゃったんだろ。
過去の映像で、まだ若いミナが下目使いでこちらを見つめている。
――確かにそうだ。ミナとイザナギがカップル成立なんておかしすぎる。
自分の隣で友人が、こちらを見ながら茶々を入れる。
――うるせえよ似非哲学者。それと変なあだ名で呼ぶな。
「……あ」
小さな声を呟き、イザーナは体を起こす。
――なぁ、ミナ。俺のどこを好きになってくれたんだ？
そう尋ねる自分にミナは即答する。
――頼りなくて馬鹿でかっこ悪いところ。
――あのさぁ……俺達お互い好きで付き合ってるんだよな……？
その言葉にミナは微笑みながらイザーナの首に抱きつく。
――当たり前でしょ。好きじゃなかったらこんなことしないって。
「……イザーナ？」
突然の行為の中断に、彼女も体を起こす。
「どうしたの？」
こちらをまっすぐに見つめる目。イザーナは気まずさから、目をそらす。
「……すまない」
その言葉にウーノの目が細められた。
「俺は……」
イザーナは俯きながら言った。
「君を抱けない……」
「……」
ウーノは無言のまま立ち上がり、ベッドの隣にある鏡台まで歩き、その引き出しを開ける。

「……どうして？」
押し殺したような声。鏡越しにこちらを見ている。
「俺には……」
顔を上げ、ウーノに向ける。
「恋人がいるんだ」
「……そう」
突然ウーノは振り返り、その手に握った物をこちらに向けた。
「じゃあ、もういいわ」
銃声。

三章　導神？

「迷ってしまいましたねぇ……」
狭い路地の中、車を走らせつつ、ツズファはそう呟いた。
「奴の声がしたから、この辺だとは思うのですが」
車の速度を上げ、ホテル前を通り過ぎようとしたとき――
「っ！！」
咄嗟にブレーキを踏み、車から降りる。そして目の前のホテルを見上げる。
「遅かった……」
そう呟くその顔は苦渋に満ちていた。
「終焉の音、聞こえましたよ。イザーナ殿」

「な、何で……」
ウーノは目を見開き、イザーナを見ていた。
「何で死なないのよ！？」
「……」
イザーナは額に出来た銃創に手をやり、血を拭う。ウーノは腰を抜かしたのか、その場に座り込み、ガタガタと震えている。
「……ウーノ」
イザーナはウーノをまっすぐ見据え、口を動かす。
「お前ここに三年住んでるって言っていたよな？　それじゃあ去年の冬にお前が通報したあの家はお前の家じゃなかったのか？」
ウーノはその姿勢のまま答えない。だが彼女の行動で大方理解で

きた。
「今みたいなことを――あの時の犠牲者にもやったんだな。誘って、断られれば殺す。それと警官に賄賂も渡しただろ？　大した捜査が行われなかったから、おかしいとは思っていたんだ」
「うるさい！」
ウーノは再び銃を向ける。怯えが怒りに変わったようだ。
「銃を下ろせ、人殺しが」
そのイザーナの言葉にウーノはわなわなと肩を震わせ始めた。
「人殺しですって……？　違う、私は――」
ウーノは首を横に振り、違う、と何度も叫んだ。イザーナは静かに口を開き、はっきりとした口調で言葉を吐き出す。
「お前は――」
ただのイカれた人殺しだ。

三章　導神？

「違う！　私は……私は皆に愛されるべき人間なのよ。誰よりも綺麗で、誰よりも美しいのよ！」

ウーノは銃を強く握り締め、そう叫ぶ。だが、次第にその顔が俯き始め、両手を顔に持っていく。

「なのに……何で、皆私を拒むの……？　最初は優しくしてくれるのに……どうして皆私に乱暴するの……」

ゆっくりと顔を覆う。

「嫌、もう嫌……。私が愛する人は、皆私を拒む……。私を愛してくれる人は皆私に乱暴する……。だから――」

そして――彼女は嗚咽をあげ始めた。

「ウーノ……」

イザーナは無意識に彼女の名を呼んでいた。泣く姿に同情したのか、愛しく思ったのか。

「ガレイド……さん」

ウーノが顔を上げる。未だ目に涙を浮かべた顔でこちらを見ている。イザーナは黙ったまま彼女の言葉を聞く。

ウーノは何かに怯えるような目でこちらを見つめ、静かに口を開いた。

「あなたなら……あなたなら、私を愛してくれると思ったのに……」

「……」

イザーナはウーノを見ることが出来ず、一瞬彼女から視線をそらした。そしてすぐに何かを決意したような顔で彼女を見て、ゆっくりと口を開いた。

「……ウーノ、俺は――」

「イザーナ――見つけた」

イザーナは息を呑んだ。
突然、前触れもなく、そいつは現れた。
黒い影。実際は黒いレインコートのようなものを着ているだけなのだが、どこも肌が露出していないので、そこだけぽっかりと穴が開いてしまったように感じる。フードの奥にある顔は、暗くてよく見えない。だが、その影が発した声には聞き覚えがあった。
「……ミナ」
イザーナの言葉にその影――ミナはゆっくりと頷いた。
「私の名前……思い出したのね……」
ミナはそう言って、こちらに一歩近付く。ゆっくりと手――骨と化した手を持ち上げる。途端――
「――――!!」
部屋中に悲鳴が響き渡った。

三章　導神？

その悲鳴にミナは立ち止まり、ゆっくりと振り向いた。そして悲鳴の主を視界に捕らえる。悲鳴を上げたのは――ウーノだった。
「な、何これ、何なのっ！？」
ウーノはそう叫び、銃を影に向けた。
「ば、化け物っ！」
その言葉と同時に、部屋に銃声が響き渡った。
「やめろ！　撃つな！」
イザーナが叫ぶ。だがその時には、すでに弾は全て出尽くされ、空しく撃鉄が下りる音が響くだけであった。
「……私が見えるの？」
まるで何事もなかったかのように、ミナはそう呟いた。そして振り返り、イザーナに顔を向ける。その視線は――イザーナの額の傷に向けられていた。
「……」
イザーナはミナの体に視線を向ける。所々に穴が開いているところからすると、弾丸は命中したようだ。しかしミナは痛がるそぶりも見せず、静かにこちらを見つめている。そのミナに対して、大丈夫か、と声を掛けるべきなのか、イザーナは分からなかった。
やがてミナは振り返り、再び視線をウーノに送る。ウーノはミナが再びこちらを向いたことで、ビクッと体を震わせた。
「何なの……あなた……？」
「見つけた」
ウーノの質問に、ミナは地の底から響くような低い声で答えた。そして一歩、ウーノに近付くと静かにこう言った。
「処罰対象」
その言葉と同時にミナの体の中から別の影が飛び出した。
「神を知りすぎた人間」

そして――
部屋は血に染まった。

三章　導神？

「イザーナ殿！」
ツズファは扉を蹴破り、部屋に入り込んだ。
「イザーナ殿！　無事ですか！」
その手に笛を握り締め、奥へと進んでいく。すると聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「……だな、そうか、酷いもんだな」
声の主を探す。ベッドの隅、そこに隠れるようにイザーナは座り込んでいた。一人で何かを呟いている。
「……大丈夫ですか？」
ツズファはそう言ってイザーナに近付こうとして――この部屋の惨状に思わず息を呑んだ。
辺りは、まるでペンキをぶちまけたように真っ赤に染まっていた。むせ返るような悪臭が立ち込めている。イザーナが座り込んでいる場所が一番酷い。
「……イザーナ殿？」
ツズファは、しきりに何かを呟いているイザーナに尋ねる。
「……これは誰の血ですか？」
ゆっくりと近付き、その肩に手を置く。だが彼は顔も上げず、一人で――腕に何かを抱きしめて、呟いていた。
ツズファはよく目を凝らし、イザーナが抱きしめている物が何かを確かめる。そして、それが何か分かった途端――
「……！！」
ツズファは猛烈な吐き気に襲われた。必死に口を押さえ、堪える。
「……そうなんだよ。吐き気がするよなぁ」

イザーナはそう言って、それの髪を優しく撫でた。
イザーナが抱いているもの、それは――ウーノの首だった。
「あぁ、そうさ。俺は殺したんだよ」
イザーナはククッと笑った。ツズファがいることに気付いているのか、いないのか、彼はその首に語り続ける。
「そうだ、ウーノ。さっき言おうとして言えなかったけどな……」
イザーナは首を持ち上げ、それに口付けをした。
「お前が俺に持っていたものは……くだらない妄想――甘美な幻想だ」
鼻を鳴らし、自嘲気味な笑みを浮かべる。
「そして……その全てを受け入れてやれるほど――俺は出来た人間じゃあないんだ」
ゆっくりと抱きしめ、その耳元で、すまないな、と呟いた。
途端、一瞬首が霞んだかと思うと、次の瞬間、首は跡形もなく消え失せていた。消える寸前、彼女の目から涙がこぼれたように見えたのは錯覚だったのだろうか。

三章　導神？

降りしきる雨の中、ツズファは車を走らせていた。
「次を左だ」
助手席に座るイザーナが指示を出す。車は左折し、狭い道を通っていく。
「……何か聞きたいことがあるんじゃないか？」
無表情で運転をするツズファに、イザーナは疲れきったような目を向ける。
ツズファは何も答えず、黙々と走らせる。その様子に、イザーナは大きく鼻を鳴らし、だんまりかよ、と呟く。外に目をやり、流れる風景を眺めながら額を弄る。かすかに指の先に血が付いた。静かなエンジン音だけが鼓膜を響かせる。大きくため息を吐く。
「……次も左だ」
再び指示をし、煙草をくわえ、火を付ける。
「なぁ、ツズファ」
「……なんでしょうか？」
ツズファは顔の向きを変えず、小さい声で返す。イザーナは外を眺めたまま、ぽつぽつと語り始める。
「……彼女は――ただ普通の恋を求めていただけなんだ。ただそれが、人より少し狂っちまっただけなんだ」
窓に向かって煙を吐く。ガラスが一瞬曇る。
「彼女は学生時代に暴行を受けたらしい。それも――好きだと告白した男から、集団でな」
イザーナは、吐き気がするな、と呟く。
「だが彼女は暴行を受け入れていたらしい。そんなものでも愛して

くれているんだと――彼女は思っていた」
こちらに顔を向けず、指で右を指す。ハンドルを切り、右折する。
「そしてしばらくして――彼女は身籠った。だが父親は分からなかった。集団に暴行受けたんだ。誰の子供かなんて分かるわけがない」
イザーナは突然肩を揺らして笑い出した。
「それで彼女はどうしたか。最初に告白した男に打ち明けたそうだ。そしたらどうしたと思う、その男は？」
イザーナはツズファに顔を向け、静かに言った。
「崖から突き落としたそうだ」
「……」
ツズファは黙ったまま運転を続ける。

三章　導神？

「奇跡的に彼女は助かった。だが子供はその時に流れちまったらしい。そして病院のベッドの上で彼女はやっと、男が自分を愛していないと分かったのさ」

イザーナは再び窓の外に顔を向ける。

「もう家には帰りたくないと――彼女は病院を抜け出し、そしてこの地に流れてきた」

「過去は分かりましたが……何故彼女は人を殺すのですか？」

ツズファの言葉に、イザーナは顔をそちらに向ける。

「それが彼女の新しい愛の形だよ」

煙を吐き、次の方向を指示する。

「酷い裏切りを受けたのに――彼女はそれでも愛を求め続けた。ただ相手のためだけに、相手が望む自分でありたい……。だが、今度は自分が――相手を支配するほうだ。相手にされるがままじゃない。自分が望むものを相手が望むべきだ。相手が拒むのであれば……今度は自分が崖から突き落とす番だ。それが、彼女の心。彼女の愛。それが――彼女をあんな異常な行動に駆り立てるんだ」

そこでイザーナはいったん言葉を区切り、大きく息を吐く。

「……だが、あいつは他の男にしたようなストーカー行為を、俺にはしなかった。俺を――おこがましいと思うかもしれないが……信じてくれていたんだな。自分を助けてくれると、救ってくれると……」

イザーナは再び外に顔を向ける。

「……俺は、彼女を助けてやれなかった……。彼女は苦しんでいたんだ……自分の罪に……。誰かに、ただ一言、やめろ、と言ってほしかったんだ」

車内に沈黙が訪れる。ツズファは視線をイザーナに向け、静かに口を開く。

「ですが彼女は――人殺しです」
その冷たい一言に、イザーナは僅かに肩を震わせる。
「彼女は処罰されてしかるべき人間なのです。変な同情や願望は事実を狂わせますよ」
その言葉に、分かってるよ、とイザーナは小さく呟いた。
「ですが――そういった考え、私は好きですよ」
そう言ってツズファは軽く笑った。イザーナもそれに釣られて笑う。前方の信号が赤になり、車がゆっくりと止まる。
「……なぁ、ツズファ。よく俺のいる場所が分かったよな」
イザーナは顔を外に向けたまま、言葉を発する。
「それにたった一人で来たのか？　こんな土地勘のないところに」
信号が青に変わり、車を走らせる。
「いえ、最初はスザーノと一緒でしたよ。あいつは勘が良いですから、見知らぬ土地でも、すぐにあなたを見つけられると思いまして。まぁ、途中で帰らせたのですが」
「何故？」
「それは……」
ツズファはハンドルを切りながら答える。

三章　導神？

「ヨミの声がしたものですから」
イザーナは振り返り、説明を求めるような目をツズファに向ける。
ツズファはゆっくりと説明を始める。
「ヨミは死神の導き手のようなものですよ。ただし導き手とは違って肉体から生まれるのではなく、怨念から生まれます。ヨミは本質的には飢えた獣と同じです。だからなのか人の姿はしていません。そして彼らは――」
「処罰対象の肉を食らって、そいつも死神にするんだろ？」
イザーナは、ククッと不気味な笑みを浮かべ、煙を吐き出す。
「その辺は分かってる。奇妙な姿をした化け物が、死神の体から這い出てきて、俺に襲い掛かってきたからな。そしてウーノも俺の目の前で――」
食われた、と遠い目をして言った。
「あそこに死神がいたのですか？」
「……気付かなかったのか？」
イザーナは驚いた様子でツズファを見る。
「あれは本来見えないものなのですよ。あれを見ることが出来るのは――処罰対象、その人だけです」
「……俺には見えていたぞ？」
「それは――」
運がよかったですね、とツズファはぎこちない笑みを浮かべた。
「……そうだな」
イザーナはそう呟くと、窓の外に目をやり、指で左を示す。
「先程から気になっているのですが……」
車を左折し、明かりの少ない道を走らせる。道幅が徐々に狭くなっていく。
「何だ？」

イザーナは外を眺めたまま煙草をくわえている。表情は確認できない。ツズファは横目でイザーナに視線を送りながら、ゆっくりと口を開いた。

「町の出口から遠ざかっているような気がするのですが」

その言葉を聞いた途端、イザーナは肩を揺らし始めた。笑っているのだろうか。

「……大丈夫だ」

方向は合ってる、とイザーナは答えた。

車は薄暗い道を走っていく。そしてしばらくして、狭い角を曲がったところにあったものは、コンクリートの壁だった。

「……」

行き止まりのため、ツズファは車を止め、隣に視線を向ける。イザーナは、ドアに手を掛け、降りろ、とあごで示した。

三章　導神？

ツズファはエンジンを切り、車から降りる。
「ほら、こっち来い」
イザーナは濡れるのも構わずに、行き止まりの壁まで歩き、そこにもたれかかった。
「ここに何があるのですか？」
ツズファはそう尋ねながら、イザーナの元へ足を運ぶ。イザーナは自分の隣に立つツズファを確認すると、笑みを浮かべたまま、ツズファの肩に手を置いた。
「思い出しちまったんだよ」
そう言うなり――イザーナはツズファの腹部目掛け、膝を叩き込んだ。
「がっ！」
ツズファは突然の衝撃に耐え切れず、前のめりになった。さらに背中にひじを落とされ、その場に跪く格好になる。
「な、何を……」
痛みに顔を歪めながら、視線を上げる。それと同時に――
ツズファの額に銃が突きつけられた。
「……」
ツズファは無言のまま、イザーナの顔を窺う。無機質な――人形のような目をこちらに向けていた。そんな彼の様子に、ツズファは不気味な笑みで返す。お互いに視線を交わし続ける。
「ツズファ」
イザーナが静かに口を開く。
「もう分かっているんだ」
寒さのせいか、銃を持つ手が、かすかに震えている。ツズファは、そうですか、と小さく呟く。
「ミナを――」

イザーナの顔が歪む。

「ミナを死神にしたのは、お前なんだろ？」

その言葉に、ツズファは表情を変えず、ゆっくりと頷いた。

「どこから――分かっていましたか？」

銃を突きつけられているというのに、相変わらずの物静かな声。

イザーナは僅かに目を細め、口を開く。

三章　導神？

「最初、記憶が戻ったとき、俺が自殺したときのことも、お前らが現れたときのことも思い出せた。だが一つだけどうしても思い出せないことがあった。それは――ミナと寝たことだ。俺が記憶を失って、朝目覚めたとき、お互いに裸だったから、大して気にならなかったが、その時のミナの言葉に一つ引っかかることがあった」

――なぁ、俺昨日酒とか飲んでいたか？

――いいえ。水なら馬鹿みたいに飲んでいたけど？

イザーナは銃を握る手に力を込める。

「お前言ったよな。自分の能力には水が必要だって。俺は普段水なんて飲まないから、お前しかいないんだよ。導き手も神なんだろ？そして俺の記憶を奪い、説明するとか言って、あまり動かないようにしていたからな。仕事で動く彼女のほうが死神に出会いやすかったって訳だ」

「……私が先か彼女が先かは、賭けだったのですがね」

ツズファはゆっくりと息を吐き、淡々と続ける。

「よく分かりましたね、さすがです。あなたの言ったとおり、彼女と性交を交わしたのは私です」

「何故だ！？」

イザーナは銃の撃鉄を上げ、叫ぶ。

「それは――あなたを助けるためですよ」

対照的にツズファは静かに言った。

「あの女――ウーノ。あなたは彼女に神のことを教えすぎてしまい、処罰を受ける。私の力の一つ、予知。それでそういった結果が出たのです。しかし神と人間の両方に罰が発生するこの禁止事項は、どちらか片方が処罰されれば、もう片方は処罰が免除されるというプログラムの穴があるのです。ですから私は確実な方法を選んだのです。それは――あなたの知り合いを死神にすることです。処罰には

神が優先されます。しかしあなたを知る死神がいれば処罰は人間のほうに向かうでしょう。ですから私は彼女と寝たのですよ。あなたを助けるために――あなたを愛する死神が必要だったのですよ！」
「手前っ！」
銃底をツズファの額に叩きつけ、さらに顔に蹴りを入れる。
「糞がっ！　糞が糞が糞がっ！！」
さらに間髪いれずに殴打。ツズファは地面に転がり、苦しそうに咳き込む。イザーナは叫ぶ。
「何で……何でミナを巻き込んだ！？　助かる方法が無いなら放っておけばいいだろうが！」
「それでは――私が困ります」
ツズファは倒れたまま、肩を揺らして笑う。

三章　導神？

「私も一応――生きていますから。あなたが死神になろうものなら、私達はヨミの餌となる。そして……私達は死神のあなたとなるのです。私は導き手として生まれ、神の使命をサポートする為だけの存在……。それでも私は生きたいのですよ。命があるのですから」

「……知るかよ」

イザーナは冷たく言い放ち、ツズファの顔面を蹴り飛ばす。

「手前らがどうなろうと知ったことか。死ねよ。ヨミに食われりゃよかったんだよ」

銃を持ち上げ、狙いをツズファの頭部に定める。ツズファは顔を上げ、不気味な笑みを浮かべている。その口や鼻から血が出ていた。

「あなたは――」

ツズファはゆっくりと体を起こし、その場に跪く。

「あなたは――二度も自分を殺す気ですか？　それも自分自身の為に」

「……」

イザーナは無言のまま銃口をツズファの額に押し付ける。

「ツズファ、俺は……イカれた人殺しだ」

イザーナはゆっくりと口を開き、語り始めた。

「――俺の友人に、やかましいが、気の利く良い奴がいたんだ。ガキの頃から一緒に遊んでいてよ。そいつは将来、学者になりたいって言っていたんだ。だけど、一ヶ月前――死んじまった。殺されたんだよ。道歩いていたら、いきなり銃で撃たれてよ。救急車が来たときは、もう手遅れだった」

ツズファは無言のままイザーナに視線を送り続ける。

「犯人は――すぐに見つかった。二人組みで……しかもまだ十二歳のガキだった……。理由は……誰でもいいから撃ってみたかった、だそうだ。笑えるだろ？　そんな屑に俺の友人は殺されたんだ……。

だからな、俺は――殺してやったんだよ。刑務所から連れ出して……体に少しずつ弾丸ぶち込んでやってなぁ。助けてって泣き叫ぶそいつらを――徹底的に痛めつけて……殺したんだよ。楽しかったぜぇ……。あいつらが泣き叫ぶ姿は……最高だった。まぁ、すぐにばれたんだが。それで捕まりそうになったところを、あの銃で頭をズドンだ。それで……俺の人間としての人生は終わった」

話を締めくくると、イザーナは不意に空を見上げた。

「あの時も――こんな灰色の空だった」

表情は見えないが、その声はどこか悲しげだった。

「なぁ、ツズファ」

イザーナは顔をツズファに戻す。

「お前も泣くか？」

そう言って、口元に不気味な笑みを浮かべた。それはツズファがよく浮かべる笑みと酷似していた。

三章　導神２１

「……殺したいのなら殺しなさい。命乞いなどはしません」
イザーナを見返して、ツズファは口を開く。
「ですが、これだけは覚えておいてください。いずれあなたは――私に感謝することでしょう。そして、あなたは自ら望まぬ自分へと変貌していきます。これは、誰にも止められません。せいぜい――」
ツズファは大きな――不気味な笑みを浮かべた。

「――苦しみなさい」

銃声。
静かだった場所に響く突然の轟音。
だがすぐに音は消え失せ、辺りにはもう静寂が訪れていた。
「……ははっ」
イザーナは笑みを浮かべたまま、その場に銃を落とした。そして、ゆっくりと顔を上げ、再び空を見た。大きく広がる灰色の空。
「……なぁ、ツズファ。お前、分かっていたんだろ？」
雨が顔に容赦なく降り注ぐ。
「……俺が、お前の仕業だと気付くと――分かっていたんだろ？お前だって馬鹿じゃあないからなぁ」
笑い声が口から漏れる。最初は小さかったが徐々にそれは大きくなっていった。そして顔を下げる。
そこには――ツズファの死体が転がっていた。うつろな目で空を眺めている。
「覚悟――していやがったんだな。自分が殺されると……知っていたんだな」
イザーナは乾いた笑い声を上げながら、その場に跪いた。その目から流れている液体は雨水ではなかった。

「……くそったれ」
空を見上げる。灰色の空が一面に広がり、静かに見下ろしている。雨は止む気配を見せない。静かだ。何も聞こえない。聞こえてこない。目に雨水が入り、一瞬閉じる。
「……くそったれ」
彼はもう一度そう呟き、目を開けた。

終章　酒場にいた男？

男の話が終わった。なんとも奇妙な話だった。
「おもしろかったかい？」
男はそう言うと、ククッと不気味な笑みを浮かべる。
「さて、あんたはこれからどうするよ？　いや、この先どうしようか考えていたところなんだよ」
男がそう尋ねてきたが、私はそれには答えず、先程気になった、ひどく汚れている腹部に視線を送った。
「なぁ、教えてくれてもいいだろう？　まぁ、話を聞いてくれたから別にいいけどな」
そう言って、男は立ち上がる。私は視線を上げ――
「……どうした？」
男は私の視線に気付き、不思議そうな顔を向ける。私は無言のままだった。
私は視線を固定したまま、口を震わせる。唸るような声が喉の奥から漏れる。私は視線をそらすことが出来なかった。男の――背後に立つ黒い影から。
「……どうしたんだ？　まるで――」
男は笑みを大きくする。
「――俺のうしろに死神がいるみたいじゃないか」
その男の言葉と同時に――影が一瞬消えたかと思うと――悲鳴を上げる間も無く――私は――
「最高の結末だろう？」
イザーナは先程まで男が座っていた椅子を眺めて、乾いた笑い声を上げた。

そして無言でグラスを拭いているバーテンダーに目を向ける。
「……また飲みに来るよ」
聞こえていないのか、バーテンダーは無言のままだった。その様子に軽く笑みを浮かべ、あんたは長生きするよ、とだけ呟いた。そして扉を開けて、外に出た。

終章　酒場にいた男？

冷たい風が頬をなで、一瞬身震いする。コートから煙草を取り出し、口にくわえ、火を付けた。
「あと、どれくらいだろうな……」
ゆっくりと煙を吐き、目を閉じる。
「……もう、あの時のことが、昨日のことのように感じるよ」
顔を上げ、目を開ける。一面の空が目に映った。
「……最悪の気分の理由が分かった。今日も灰色だ」
両手をポケットに突っ込み、路地へと足を運ぶ。そして汚れた壁にもたれかかり、ゆっくりと煙を吐く。そして視線を自分の腹部へと向ける。自分の血でどす黒く染まった破れたシャツ。よく見れば、その隙間から本来見えないはずの物が見えていた。それはイザーナの――臓器だ。
「もう……痛みも感じなくなっちまったなぁ……」
自嘲気味に笑い、顔を前方に戻す。そして何かを掴むように、手をゆっくりと持ち上げ、自分の前方――何も無い空間を彷徨わせた。
「なぁ、ミナ……」
イザーナは両手をゆっくりと動かしていく。
「ミナ……そこにいるのか？　見えないんだ」
煙草が口から零れ落ち、地面を転がる。
「あとどれくらいだ？　十人か？　百人か？　あとどれぐらいで、お前の――死神の使命は終わるんだ？」
そうやっていると、しばらくして、イザーナは乾いた笑い声を上げながら、その場に座り込んだ。力無く手足を投げ出している。
「くそったれ。何もかも。全てだ。どこまでも、吐き気がする」
肩を揺らして笑う。その目からは涙が溢れていた。乾いた笑い声

が路地に響く。
「くそったれ……あと、ほんの少し。ほんの少しでいいから、俺に、幸せをくれ。もう十分苦しんだだろう？　まだ、足りないってのか？　なぁ、神様よぉ……」
ゆっくりと顔を上げ、うつろな目に空を映した。
「……重いんだよ」
地面に転がっている煙草を拾い上げ、口にくわえる。今にも雨が降り出しそうな――あの時と同じ空を、いつまでも目に映していた。
――おい、イザナギ。
懐かしい声に、イザーナはふと隣に顔を向ける。そこには誰もいない。
――前から聞きたかったんだが、そのイザナギって言葉何なんだ？
自分の声がどこからか聞こえてくる。
――かっこいいあだ名だろ？　イザーナ・ガレイドだからイザナギ。東洋の神様の名前で、誘う男って意味らしい。
イザーナは、懐かしさに、ふっと笑い、顔を空に向ける。
「神様の……名前……ねぇ。誘う男……はは……笑えねぇ」
しばらくの間、イザーナはそのまま空を眺めていた。
やがて煙草が半分ほど無くなった頃、ゆっくりと立ち上がる。
「……帰るか、家に」
煙をゆっくりと吐き出し、煙草を地面に放る。
「この無駄に広がる灰色の空を見ていると気分が悪くなる」
彼はそう言って――その場から姿を消した。そこには火の付いた短い煙草が一本転がっているだけだった。

END

終章　酒場にいた男？（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
この作品は高校生の時に書いたものです。タイトルやタグの通り、古事記をベースにしています。
反省点として、物語の設定上、複雑な”システム”を説明しなければいけないのですが、それがかなり話の流れを悪くしてしまったと思っております。完全な実力不足です。
ですが、人生に絶望し、無差別に人を神の世界へといざなう神の誕生という物語を書き上げることが出来て、個人的には満足しています。また所々に古事記ネタを仕込めたことにも満足しています（笑）

この物語を読んで、ほんの少しでも何かしらの思いが残ってくだされば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7879p/

IZANAGI

2010年12月29日10時25分発行